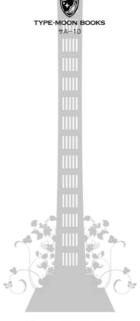


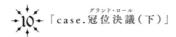


「case. 冠 位 決 議 (下)」



Lord El-Melloi II Case Files

ロード・ エルメロイ II 世の 事件簿



目次 Contents

『第一章』 005

『第二章』 093

『第三章』 153

『第四章』 207

『第五章』 281

『終章』 355

『解説』 388

『あとがき』 398

ロード・エルメロイII世の

事件簿

10 「case.冠位決議グランド・ロール(下)」

角川文庫

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

この物語はフィクションであり、実在の人物・団体とは関係がございません。

目次 Contents

第一章

第二章

第三章

第四章

第五章

終章

解説

あとがき



この列車に乗るのは二度目だったが、奇怪な感覚は変わらなかった。

排気音や車輪の音は聞こえる。心地よい程度の振動もある。なのに、まるで空飛ぶ絨毯にでも乗っているかのような浮遊感。相反するとも思われる印象が、この列車では当たり前に両立している。

魔眼蒐集列車レール・ツェッペリン。

恐ろしくも美しい名を持つ、闇の世界に知られた列車であった。

「……内装が、変わってる?」

「時々模様替えいたしております」

乗り込んだ後、つい感想を口にすると、車掌のロダンがそう答えてくれた。

相変わらず、彼の表情は読めない。痩せ細った顔はどこか悪魔めいていて、世界にふたつとないこの列車にふさわしかった。

「とはいえ、それに気づくお客は滅多におりません。使い魔で来られる常連はおられても、実際に二度以上乗り合わせる方はわずかで すから」

「……そう、ですか」

彼の言葉に、かすかな親密さを感じたのは、車掌としてのサービス精神ゆえかどうか。

いずれにせよ、列車そのものと同様、彼もまた平凡な人間とは程遠い。

死徒。

そう呼ばれる者たちの、眷属なのだという。

英霊や魔術師とはまた異なる、神秘にまつわる者たち。自分が教えられてきた亡霊や死霊とも違っていて、だから恐ろしくはないのだけれど、不思議な心持ちはした。

ドクター・ハートレスの起こした波紋が、それだけ大きかったという示唆でもあろう。

(......神霊イスカンダルの創造)

いくつかの推測の結果、師匠は、ハートレスの目的をそう断じていた。

そのために、師匠の聖遺物を奪い、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンを使って、フェイカーを召喚した。長い期間、いくつもの事件の裏に暗躍して、野望を叶えるための準備を積み重ねていた。

神霊イスカンダル。

魔術師のための神を創造することによって、古代と同じ様式の魔術を取り戻す。そうすれば、現代の魔術師たちも根源を目指す理由がなくなると。

(.....だから、霊墓アルビオンに潜った)

理屈は、分かる。

しかし、その規模は想像を絶していた。正直なところ、いまだ自分にはその意味が摑めているとは言い難い。これまで出会ってきた多くの魔術師たちを振り返って、どうやら彼らの二千年ほどの妄執を覆すほどの、絶大な重みがあるらしい……と考えているだけだ。

今回、ハートレスを止めるために思いがけない人々が集まったのは、師匠の旅の結実でもあるが、同時にハートレスの行為の反作用でもあると、そんな感想を自分は抱いていた。

きっと、どちらの旅もひどく長い。

本人の意に反して君主ロードなどという地位に押し込められ、数々の事件と遭遇することになった師匠。現ノ代ー魔リ術ッ科ジの学部長を離れて十年、いやひょっとしたらもっとずっと長大な年月をこの計画に費やしてきたハートレス。

それは、ただの鏡写しなどというよりも歪な、メビウスの輪のごとき印象を帯びていた。魔術師としての技量にせよ、緻密にして周到な計画にせよ、まるで一致しないはずのふたりなのに、地道に紐解いていくと、何か決定的なところで同じ地点から出発してしまっているかのような妄想を、振りほどけなかった。

(.....このまま)

このままハートレスを追っていけば、彼のいる煉獄に、師匠も突き落とすことになってしまうのではないかという、そんな恐怖が自分の心臓を摑んでいたのだ。

恐ろしくて、強張っていた自分の肩に、ふと優しくなにかが触れた。

「大丈夫だ」

隣に座った、師匠の手であった。

その手も、かすかに震えていたけれど、だからこそ、確かな温か みが胸に宿ったように思えた。

ついで、

「……窓の外は見えへんのやなあ」

呟いたのは、隻腕眼帯の僧侶であった。

時任次郎坊清玄。極東の国からやってきた、修験者と呼ばれる宗教者だった。山岳信仰と仏教ブッディズムとが複雑に合わさった宗教形態だと、師匠の講義で教わったことはあったが、自分も詳しいところまでは覚えてない。

「見えない方がいいんじゃねえか。この列車、まともな空間は走ってない上に、今回は霊墓アルビオンだろ」

ナイフをジャグリングしつつ言ったのは、占い師のフリューだ。

頭に汚れた布を巻きつけ、日焼けした筋骨たくましい身体を、何層もの布に包んだ壮漢である。列車の内側にあっても、砂漠の乾いた風を思わせる男だった。

「万が一、俺たちが知覚できる以上の情報量をつっこまれたら、一 発で脳がやられるぜ。わざわざ危険を冒すことはないだろ。これか ら、世界トップクラスの危険地帯に飛び込むってのに」

「あら、そんな混沌の情報こそ私たち魔術師の求めるものではありません? 根源に至ろうと思うのに、たかだかその程度の危険を厭いとう必要が分かりません」

さらに返したのは、金髪縦ロールの少女。

清玄とフリューだけでも、あまりに世界観が違いすぎ、パッチワークつぎはぎな印象を免れないのだが、この少女は格別であった。一目で高級品と知れる蒼いドレス、いかなる角度からも破綻のない優美な仕草、天上の彫刻家が鑿のみをいれたのではと思わせる端整な顔立ち。一般人に、実は彼女は魔術師なのだと打ち明けても、これだけモノが違えばあっさり納得されるのではなかろうか。

ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルト。

三人ともが、師匠と自分の初期の事件──剝離城アドラで出会った 人物だった。

そして今、霊墓アルビオンに挑むべく、魔眼蒐集列車レール・ ツェッペリンに乗り込んだチームでもある。

「は、生粋のエリートお嬢様と、傭兵の魔術使いじゃ分かり合えないのは当然さね。それはそれとして、アルビオンをアタックするチーム編成はどうするつもりだい?」

「間違いなく、私は警戒用メンバーだろう」

と、師匠が告げた。

「というより、ほかの役割ロールでは使い物にならない。残念だが、神秘を扱う技量を問うのであれば、この中で一番下だからな」

「ふむ。純粋な魔術ならともかく、神秘を扱うとなれば、あんたのところの内弟子は特別だからな」

納得顔で、フリューがうなずく。

霊墓アルビオンに挑む際、通常は五人でチームを組むのだとい

う。

アルビオンからさまざまな資源を採掘するための、発掘用メンバー。

迷宮に勃発する危機をいち早く発見し、注意を促すための、警戒 用メンバー。

そして、霊墓に巣食うおそるべき怪物から身を護るための、戦闘 用メンバー。

「今回の場合、突破するだけだから、発掘用メンバーはいらない。 代わりに地図用メンバーとでもしておいて、あとは警戒用、戦闘用 のメンバーでそれぞれの範囲あたりを決めておけばいいだろ。で、 俺は自動的に地図用メンバー、お嬢様は戦闘用メンバーで間違いね えさ。霊墓アルビオンの経験者は俺ぐらいだろうしな」

「君が生還者サヴァイバーとは知らなかったが」

フリューの言葉に、師匠が口を挟んだ。

それは、自分も気になっていたところだった。以前の事件で知った経歴からは、まったくそんな素振りは見えなかったからだ。

「テレビでCMはしてないだろうからな」

「冗談はよせ。霊墓アルビオンの生還者サヴァイバーと喧伝すれば、傭兵としては十分以上の箔がつく。売り込みに使わない手はあるまい」

師匠がそう言うと、しばしフリューは沈黙した。

それから、

「俺のあだ名を知ってるだろう?」

と、口にしたのである。

つられて、その答えは自分の唇から滑り出た。

「……師父殺し」

詳しい事情は知らない。だが、この魔術師がそんな異名で呼ばれ

ているのは、剝離城での事件でも聞いていた。

「そう。それで、ほとぼりが冷めるまで、霊墓アルビオンにこもってたわけさ。そこで生還者サヴァイバーだなんて売り出せば、理由を勘ぐられて、冷めたほとぼりも台無しになるだろ。なんで、黙ってたわけ」

「……なるほどな」

納得したのか、師匠も小さくうなずいた。

魔術師にとって、師弟関係は極めて重大なものだ。血縁があれば 魔術刻印の移植ということにもなるし、なかったところでその流派 の神秘を明かす以上、関係性が極めて濃密となるのは、これまでの 事件で自分もよく知るところだ。

(.....ああ)

ふと、妙なことを考えてしまった。

魔術師とは、つまり連綿と続く時間そのものではないかと。

だからこそ、師父殺しも弟子殺しも、とりわけ陰鬱とした色合いで浮かび上がる。それは、悠久と思われた時の流れを断ち切る行為だからだ。過去ししょうを殺すにしろ、未で来しの命を奪うにしる、その在り方はどこかしら魔術師と矛盾してしまう。

もちろん、根源に至るためにはなんでもするのが魔術師なのだから、そんなことは些さ末まつ事じだと考える魔術師もいようが、それでも自分が出会ってきた人々には、さきほどの連想を抱かせるだけの何かがあった。

あるいは、今、この列車に集った魔術師たちにも。

もう少しして、列車は速度を落としていった。

乗客たちに配慮した穏やかな減速とともに、漆黒に閉ざされていた車窓から、蒼い光が射し込んだ。地上の陽光とは異なる、不思議な光だった。どこか懐かしく、胸の騒ぐような光。

「......さあ、到着いたしました」

車掌が、厳かに告げた。

まるでそれは、啓示のように。

「霊墓アルビオン。その最上層にございます。残念ながら、当列車 をもってしても、安全に辿り着けるのはここまでです」

ほんのわずかではあったが、その声に無念さが滲んでいたように 聞こえたのは、自分の錯覚だろうか。

ゆっくりと列車の扉が開き、一拍遅れて、彼は深々と一礼した。

「差し出がましい言葉ではありますが、皆様のご武運をお祈りして います」

*

山岳の、麓にあたる場所だった。

すぐに魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンは走り出し、朧おぼろな霧の向こうへと消えていった。その霧もまた、列車に伴う現象だったものか、数分と経たぬうちに消えていき、アルビオンの景色を自分たちの瞳に焼き付けた。

「……空じゃ、ないですね」

最初に口からこぼれたのは、そんな言葉だった。

遥か高みに広がっているのは、淡く発光する天蓋であったから だ。

一体半径何キロ、いや何十キロになるだろうか。もちろん、これ ほど巨大かつ広大な天蓋を見るのは初めてだった。おそらく、霊墓 アルビオンを除いては、ほかのどこにも存在しない景色。

逆に、大地を見渡すと、今度はいくつもの山が連なり、河が流れ、異形の街が張り付いている。

(あれが......採掘都市?)

列車に乗っている間、フリューからちらりと聞いた場所だ。

霊墓アルビオンにおいて、魔術師たちが築いた橋きょう頭とう堡 ほ。さらに深層に挑むため、つくりあげた街の遠景に、かすかだが 胸が熱くなるのを覚えた。

ああ、これがロンドンから何キロも地下の光景だなんて、誰が信じられるだろう。

「やれやれ、ひさしぶりの地下世界ってか」

どこかうんざりした様子で、フリューがこきこきと首を鳴らした。

ゆっくり天蓋や植生を見渡し、こう続ける。

「ああ、間違いない。……さすがは魔眼蒐集列車レール・ツェッペリン。こちらの指定通りの場所につけてくれたな」

「フリューさんの、指定だったんですか」

「おうさ。さすがにあの列車で、採掘都市のど真ん中に乗り付けるわけにはいかないからな。かといって、いまや時間は貴重品だ。あんまり遠くに降ろされるわけにはいかない。一応昔使ってた装備については、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに乗る前に持ち込んできたがね」

背負っていたズダ袋を示して、色黒の魔術師は顎を擦る。

周囲を見回し、面倒臭そうに口を開く。

「さて、今のうちに確認しておくが、目標層までの残り時間は二十 二時間五十分前後。最低限の休養は魔眼蒐集列車レール・ツェッペ リンで取っているはずだが、全員最後まで睡眠と排泄の必要はない か?」

「そりゃ、山岳修行では必須項目やからな。三日三晩飲まず食わず出さずが基本や」

清玄が、最初に答えた。

次に、ルヴィアが軽く眉をひそめつつ返す。

「口に出したくもありませんが、当たり前でしょう。 『強化』の初歩に過ぎません」

「……だ、大丈夫、です」

かあっと、耳が赤くなるのを感じながら自分も言った。自分は厳密には魔術師ではないが、そうした身体機能の調整は、ブラックモアの墓守としての訓練に含まれていた。思えば、聖堂教会の代行者などもそうした技術を駆使していた気がする。神秘にまつわる人間にとっては、基本的な能力ということだろうか。

「……悪いが、睡眠が不要とは言い難い」

最後に、師匠が苦虫を嚙み潰したような顔で、口にしたのだ。

「今日までに、それなりに脳に疲労を強いている。何らかの興奮剤 を使えば、支障なく行動できるだろうが、ノーマルな精神状態を保 ちにくい」

「OK。時計塔の君主ロードらしからぬ、実に正直な申告助かる」 両手をあげて、フリューが片目を閉じた。

「どうせ、アルビオンの探索で、まったく休憩なしなんてその方が よほど危険だ。可能なら、という前提付きだが、おおよそ二十四時 間の間に二回ないし三回、それぞれ二十分ほどの休息を基準にす る。これなら問題ないか?」

「大丈夫だ。瞑想メディテーションによる休息効果の増幅を望める。副作用はあるが、受け入れられる範囲内だろう」

しかめ面で言った師匠に、ルヴィアがくすりと口元を押さえた。

「あら、大変なこと。その程度で副作用が起きるようでは、日頃、 睡眠不足で苦労されてるのでは?」

「まったくその通りだが、あまり苛めないでいただきたいレディ。 我が義妹を思い出すのでね」

「ふふ、以前のお返しですわ」

可憐な唇を三日月の形にして、ルヴィアが指の腹で押さえた。

「まさか、あなたとチームになるなんて思いませんでしたけど」

本当に、そうだと思う。あの剝離城アドラから、自分たちはなんて遠いところに来たのだろう。魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに乗って、地の底たる霊墓アルビオンにまでやってきて、あげくに追っている相手は古代の魔術師たるフェイカーと、そのマスターたる現代魔術科の元学部長だという。

状況を整理するだけで、目眩がしてくるのも許してもらえるだろう。

それから、

「じゃあ、全員こいつを被っといてくれ」

フリューが、背負っていたズダ袋を下ろして、内側からひきずり だした布をそれぞれに手渡したのだ。

「なんですの! この汚らしい布は!」

「おいおい勘弁してくれ。お嬢様のその格好で、都市シティに入るわけにいかねえだろうが。もちろん、君主ロードもだ。修験道ぐらい行ってしまえば、逆に気にされないが、お前らは目立ちすぎるっつうの」

フリューの言葉に、うぐ、とルヴィアが押し黙り、しばらくすると渋々といった感じで美しい髪と細い肩口をその布で覆った。

こういうあたり、納得さえすれば、己の流儀でなくてもあっさり 受け容れるお嬢様ではある。もっとも、気位の高いお嬢様なだけで あれば、いかに強大な魔術を扱おうとも、魔術師の世界では通用し ないのだろう。

清玄と師匠も従って布をかぶり、自分はおずおずと尋ねた。

「……拙は、大丈夫でしょうか」

「ん、ああ、グレイは普段からフード被ってるんだから、問題ない だろ」

「そういう、ものですか」

「イッヒヒヒヒ! みんなとお揃いが良かったか! いっちょまえ にショック受けてるんじゃねえ!」

「そ、そんなのじゃありません」

かぶりを振った自分に、くつくつと笑い声が湧いた。

清玄だった。

隻腕眼帯の修験者はこほんと咳払いしてから、顎をしゃくった。

「ほな、案内してもらえるか。フリューはん」

「おう。じゃあ、ついてきてくれ」

というフリューが、早足で歩き出す。

当然全員が『強化』された歩みで、何度か師匠が置いてけぼりになりかけたのだが──実際に息を切らした場面では自分が背負うことでカバーして──驚くべき速度で、山の麓から平原を踏破していった。

結果、おおよそ二十分とかからぬ内に、見えていた都市の末端に 辿り着いたのである。

「これは……」

と、小さく清玄が呻いた。

遠景で見たときは、中東の砂漠の街のごとき印象を受けていたのだが、こうして近づいてみると、また異なる風景であった。

あえて言うならば、蜂か蟻の巣に似ていただろうか。

建物と建物を隔てているのは、近代的なコンクリなどではなく、 自ずから盛り上がったかのような土壁であり、ある種原始的とさえ 思えるその建築が、極めて立体的な街を形成していたのだ。

がやがや、と多くの人が中央の通りを歩いている。

地表のロンドンがそうであるように─ある意味、階級社会の具現である時計塔以上に、多くの人種が行き交っていた。共通することといえば、あまり年老いた者はおらず、多くの者がさきほどフ

リューが渡してくれたのと似たような布を纏っているぐらいだ。

そして、自動車の代わりに往来しているのが、奇怪な生物だっ た。

地上の騎馬警官と同様に、あるいは犀さいに似た有角の生物が、 あるいは亀のごとき甲羅を背負った巨獣が、悠々と通りを闊かっ歩 ぽしている。はたして、彼らが神秘を帯びた幻想種なのか、単に地 底によってまったく新しい進化を経た生物種なのかは分からない が、地上では見られない動物であることは間違いなかった。

「……これが、都市シティですか。あんな生物が、ここでは当たり 前に?」

「区画によって違うがな。中央部にいけば、少々変装してても、君 主ロードやお嬢様は目をつけられるかもしれんが、このあたりなら なんとかなるだろ」

奇怪な獣と人々が往来する横には、屋台がいくつも並んでいる。

こちらもまた国際色豊かというか、単に肉や魚を焼いただけではなく、独特なスパイスや焦げたソースなど、さまざまな匂いで満ちていた。そこにさきほどの獣臭や、ほかでは感じられない独特な甘い香りが混じっている。

(ハーブの、香り?)

だとすれば、自分の知らない種類だろう。

屋台のいくつかに並んでいるハーブには、おそらく地上では考えられない薬効のものが数多くあるはずだ。ひょっとしたら、授業で習ったことしかないような精霊根などの呪体も、あっさり交じっていたりするのだろうか。

「.....つ」

ついで、少し離れた屋台から、喧騒が聞こえた。

どうやら、何かの諍いさかいが起こったらしい。一瞬、魔力の律動が感じられたのは、どちらかが一あるいは双方が『強化』なりの魔術を使ったものか。砂埃が吹き荒れ、一瞬紫電らしきものが散ったが、それさえ日常茶飯事らしく、人々は気にする風もなく、行き

過ぎていく。

「あまりきょろきょろなさらない方がよろしくてよ」

ルヴィアが、隣から小声で忠告してきた。

「来たばかりの素人と見られれば、足元を見られるのは当たり前です。 さきほどから、三種類ほどは視線を感じますわ」

「は、お嬢様は慣れてらっしゃるこった」

「アルビオンほどでなくとも、異国を訪ねることは多かったものですから。どの土地であろうと、エーデルフェルトはふさわしい誇りとともにあらねばなりません」

「まあ、正解だ。金だけですめばいいが、ここのかっぱらいは血や 内臓の方を好むしな」

フリューの言葉には、単なる脅しにとどまらぬ実感がこもってい た。

「魔術師の血はどこでもそれなりに売れるやろけど、内臓まで売れるんかいな.....」

清玄が、ほとほと呆れた感じで口にする。

実際、そう言われると、そこらの屋台の裏で、腎臓や肝臓が抜かれるような気がしてくる。もちろん、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンが魔眼の移植で売っていたように、アルビオンでの臓器売買もそれなりの専門家が関わっているのだろうが。

そこで、不意に気づいた。

「ひょっとして、このへんの建築物が土つち塊くれでできてるように見えるのも……」

「おお、気づいたか。そういや呪的感受性が高かったな。だったら、ひとつ分かりやすい例を見せておくか」

近くの壁に触って、フリューが片目をつむった。

こんこん、と拳が壁を叩く。

すぐさま、その手はフリュー自身の腰のあたりに翻ひるがえり、 そこに仕込まれていた占い用のナイフを取り出すや、突然壁にグサ リと突き立てたのだ。

しかし、驚くべきは、フリューの奇き矯きょうな行動ではなかった。

刃で穿たれた穴は、自分たちの目の前で、たちまち埋まっていっ たのだ。

「え.....!」

「大したもんだろ。中国の神話の視肉みたいなもんでな。少々の傷 はたちまち埋まってしまうのさ」

絶句したままの自分に、フリューは肩をすくめる。

「ごくごく表層とはいえ、ここは霊墓アルビオン―死せる大たい竜りゅうの尻尾にあたる。ただの土塊だって、古き竜の属性を帯びて変質してしまってるんだ。とりわけこの区画は顕著でね。ほとんどの建築物は、こういう土塊の習性を魔術で制御することでつくられてるのさ」

フリューの解説は、けして衝撃を和らげなかった。

だって、それはあまりにも、今まで聞いていた魔術や神秘の在り 方と違っていて。

「確か、魔術は大量生産には向かないと……」

「それは地上の理屈だ」

と、師匠が説明を添えた。

「この地下ではいささか異なってくる。もちろん、強度だとかなんだとか犠牲にしているものも多いが、地上からクレーンを持ち込むわけにもいかない。逆に、今フリューが言ったように、大マ源ナは過剰なほど濃いからな。神しん代だいのような次元違いの精度は成立せずとも、かなりの大魔術が気軽に行える。……もちろん、魔術師の方の数も腕も、相応に必要とするわけだが」

最後のあたりで眉間の皺を深くしたのは、この場にあっても師匠

らしかった。

「優秀な魔術師はともかく、優秀な魔術使いは地上の時計塔以上に多いだろう」

「なんせ、アルビオンならではの複合工房なんて代物もあるんでな。加えて、採掘都市の中心部はともかく、こことかの周辺部はしょっちゅう地形も変わりまくる。だから、すぐに建て替えられるように、元素フォーマル変換クラフトやらゴーレムやらを使って、こういう即席の街をつくりまくってるわけだ」

フリューの言葉を、自分は茫然と受け止めていた。

地上の時計塔でも、金満の第一科ミスティールなどなら、ゴーレムを召使いとして使役していたりもする。しかし、それにしたところで、簡単に住居を建設するような規模ではない。

ああ、ここは本当に別世界だ。

まがりなりにも時計塔に属して、故郷やこれまでの事件でもそれなりの神秘を見てきた自分が、なお驚愕せざるを得ない異境。

(そういえば.....)

ライネスが集めたデータから、ハートレスの弟子にはおそらくアルビオンで生まれ育ったものもいると聞かされていた。たとえば、あの秘ひ骸がい解かい剖ぼう局きょくで出会ったアシェアラなどは、アルビオンの生まれだったはずだ。

この異境で育った人間ならば、むしろ地上の方をありえない別世界と感じるのではないだろうか。

現代に召喚された神しん代だいの魔術師のように。

あの、フェイカーのように。

「いずれにせよ、どの区画の経済圏も、アルビオンという大迷宮によって──名もしれぬ、死せる竜によって成り立っている。腐乱した死体に嚙り付いて、肉も髪の毛も奪い、わいてきた蛆うじを喰らって生き延びている街さ」

「あら、好みの響きですわね」

フリューの言葉に、ルヴィアが微笑した。そういえば、エーデルフェルトのあだ名は、地上で最も優美なハイエナだとか。彼女なら、死体漁りは貴族の嗜みですわぐらい、堂々と言ってのけそうだ。

「で、フリューはんは、アルビオンに潜る前に、どこへ行くつもり なんや?」

清玄に問われると、一瞬、壮漢は顔をしかめた。

それから、

「我が師のところさ」

と、フリューは──師父殺しと呼ばれた魔術師は、こう吐き捨てた のだ。

*

フリューが案内したのは、蟻塚のごとき都市の、なお外れに位置 する場所だった。

人の気配が少ない通りを抜け、複雑に曲がりくねった階段を上り、まるでこの都市自体が迷宮の一部であるかのような錯覚を堪えつつ、占い師の逞しい背中を追っていく。

「師父殺し、とお聞きしましたけれど」

「し……っ」

唇に人差し指をあてて、フリューはルヴィアの発言を制止した。

用心深く、腰の帯へと指を伸ばす。鋭く光るナイフが、その帯に 差してあった。黒い肌の指がそろりとそのナイフを挟み取り、中空 へと投げ放ったのだ。

「Lead導き meたまえ」

詠唱は、一ワン小節カウント。

天の星を占うフリューのナイフは、この地下にあっても正しく効果を発揮したか。

虚空に弧を描いた刃が、中空で一瞬不自然に静止したかと思うや ──鋭く、近くの壁へと加速する。

さきほど、壁が再生したときとは、また違う結果が待っていた。

壁に突き立つと思われたナイフが、そのまま通り抜けて、向こう側の地面を深く抉ったのだ。

壁だったはずの場所は、白昼夢と化していた。

代わりに、ぽっかりと別の通路が広がっていた。

「ああ、我が師ながら、相変わらず面倒くさい幻術をかましてやが る」

「あなたが殺したはずの、師が?」

もう一度、ルヴィアが尋ねようとしたときであった。

「一ああ、この馬鹿弟子に殺されたぞ!」

聞き覚えのない嗄しわがれた声が、陽気に反応した。

フリューがいかにも嫌そうな顔をしてから、新しく現れた通路の 角を曲がる。

降ろされていた布を片手で持ち上げると、内側は小さな空間になっていた。壁や押入れに、中東のものらしき飾りや、いくつもの 天体図、フリューが使っていたものと似たナイフが吊るしてある。

そして、中央には、嗄れた声の主人がいた。

ほころびた絨毯を敷いて、あぐらをかいた矮わい軀くの老人であった。

肌と筋肉に張りがあるので、はっきりとした年齢を判じ難いが、

おそらく七十は超えているだろうか。髪の毛は一本もなく、黄色い 歯も不揃い。そのくせ、垢じみた臭いはせず、むしろ香水に似た甘 い匂いを纏っている。

近くには水タバコのボトルが置いてあり、そこから伸びた管を片 手で保持していた。どうやら、ひとりで煙を堪能していた最中だっ たらしい。老人の不思議な香りも、その水タバコが原因だろうか。

「おう。誰か近づいてるなと思ったら、もう顔も見ないだろうと 思った馬鹿弟子が、ほかの客まで連れてくるとはな」

くかか、と笑った老人に、清玄が目を丸くして訊く。

「あんたは.....」

「ゲラフでいいさ。その名前以外はずいぶん前に捨てたもんでな」 その言葉を受けて、清玄がぱちぱちと瞬きしてから、尋ねる。

「やっぱり、フリューはんは殺してなかったんか?」

「は、魔術師としては見事に殺されたとも。魔術回路も何もズタボロでな。いまじゃ長子カウントの小僧っ子ほどの魔力も扱えんわ」

「……また、不摂生をしていたようで」

不機嫌そうに老人の水タバコを見やって、フリューが小さく舌打ちした。

「おうおう。老いぼれのささやかな楽しみにまで、ちくちくケチを つける気かよ。さすが師父殺しの言うことは違うな」

「我が師はこの通り、人の恨みを買うことにかんしては人一倍でな。これだけ弱ったとなれば、とどめは俺が刺すって順番待ちがレジャーランドの看板アトラクションなみに並びかねん」

大きな手で顔を覆い、フリューが告白する。

その前で、弟子に殺されたはずの老魔術師が、また水タバコの吸い口を咥える。楽しげに唇を歪めた老人を見やり、フリューはため息をついた。

「だから、俺が殺したんだ。正確には、殺したという扱いで、工房 やら遺産やら受け取った上で、この霊墓アルビオンに叩き込んだの さ」

「はは、何しろ霊墓アルビオンは出る際のセキュリティは厳しいが、入る際はわりと緩いもんでな。そうでなくても、若い頃はここで鍛えた生還者サヴァイバーだったんで、不自由はなかったともさ」

各地から、霊墓発掘のための魔術師を募集しているわけで、入る際のチェックが緩いというのも当然だろう。だからこそ、時計塔の派閥が、使い捨てのスパイをアルビオンに送り込んでいるなどという、師匠の推理につながったのだから。

「でも、それじゃフリューさんは.....」

「だから列車で言ったろ。理由が勘ぐられないように、このアルビオンでほとぼりを冷ましてたんだって」

うんざりしたように、フリューが肩をすくめる。

「けけけ、感謝しやがれ。ぱっとしなかったうどの大木が、華々しく再デビューってなもんだろうが」

「よくも先を越したなって恨まれることも多かったぜ」

「その恨みも新たな魔術の縁にしてこその魔術使い稼業ってもんだろうがよ……で、そんなお前が、のこのこ新しいチームまで連れてきてどうした? いまからアルビオンの発掘でもう一儲けって面じゃなさそうだ。違うか? エーデルフェルトの姫君に、エルメロイの若き君主ロード」

一瞬だけ眼光鋭く、老魔術師がルヴィアと師匠を睨めつけた。

少し間をおいて、師匠の方が口を開く。

「......地下にいても、地上の趨勢をよくご存じのようだ」

「けけけ、魔術回路がダメになった以上、別で補わないと魔術使いはやっていられないんでな。情報ってのはそのひとつだ。……だけどな、わざわざ俺のところを、馬鹿弟子と一緒に訪ねてくる理由ってのは分からなかった。さんざっぱら恨みは買ってきたが、そこの

エーデルフェルトのハイエナが、俺ごとき老いぼれの隠し財産を探してるわけでもないだろう?」

「我が師よ」

と、フリューが改めて言った。

「二十三時間──残り二十二時間で、霊墓アルビオンの古き心臓まで 到達したい」

「.....はあ?」

枯れた樫の木みたいに皺を深くして、老魔術師はしばらくぽかん と唇を開いていた。

それから、くるくると、こめかみのあたりで短い人差し指を回す。

「なんだ。地上で苦労したあげく、とうとうおかしくなりやがったか? 脳髄を呪詛におかされたなら、師弟のよしみで、呪詛科ジグマリエの古い知り合いぐらいは紹介してやるぞ」

「降りるだけなら手がある……って、あんた昔言ってただろう」

根気強く、フリューが訴えた。

「普通のチームで採掘したいなら、百階層以降に降りる意味はない。帰還する手立てがないからだ。だけど、ただ降りるだけだったらいくつか手があるんだよな.....って」

「本気にしてるなよ。あんなもん、酒を飲んだ上のくだらない戯言 だろ。だいたい自殺志願だってなら、もっといくらでもマシな方法 があるぞ」

また水タバコの管を引き寄せて、一息吸っては吐き出す。

部屋にくゆった煙をゆるゆると人差し指でかき回す老人は、弟子 の頼みなど、まるで意に介してないようだった。 その視線が、天井からすうと降りてきた。

師匠が、前に出たのだ。

「明日、古き心臓にて、冠位決議グランド・ロールが行われます」

「……はん。根源に辿りつくこともできず、神秘を極めたとか勘違いしている奴らの学級会だろうが。せいぜい好きにやって、好きに堕落して、好きに世界をかきまわすがいいさ。てめえの現代魔術科がどうなろうが、俺の知ったことじゃねえ。だいたい、俺がアルビオンで余生を過ごすことを受け入れたのも、そういうクソくだらない争いに心底嫌気がさしたからだ」

「……だったら、これで満足でして!」

今度は、これまで黙っていたルヴィアが、師匠の隣から傲然と進み出たのである。

少女が叩きつけたのは、いかにも高級そうな宝石のついた首飾りであった。アルビオンでも必要になるかもしれぬ、と持ち歩いていたのだろう。

ひょいとその首飾りを持ち上げ、水タバコの数呼吸分ほど見聞してから、老人はもとに戻した。

「いいだろう……と言いたいが、こんなもの地下で換金してられるかよ。魔術の触媒カタリストに使うには、エーデルフェルトの癖がつきすぎだ」

「つ.....!ı

「あのよ、爺い.....」

困り果てたフリューが口を挟もうとしたときだった。

「師匠?」

ふたつめの言葉は、私の唇からこぼれた。

まっすぐに、師匠が背を曲げていた。

濡れた鳥羽のごとき長い髪が耳元から垂れて、横顔を隠してい

た。

「.....なんだよ、それは」

「あなたにお返しできるものがない」

と、頭を下げたまま、師匠は告げた。

「どうしても、金に換えられないものは私にもあります。あなたに もあって当然でしょう。なのに、突然やってきて、あなたのプライ ドだけ曲げてほしいなどという言い草は傲慢以外の何物でもありま すまい。だから、私はこうするしかありません」

「君主ロードが軽々に頭を下げるな、とか言われなかったか」

「何度も言われました。罵倒された記憶は数え切れませんし、尊敬 する方からも歴史が濁ると諭されました。そうでしょう。私は到底 君主ロードなどという地位にふさわしくありません。ことここに及 んでも、こんな方法しか思いつかない愚か者です」

「こんな場所で無駄な時間を使って、老いぼれに頭を下げるぐらいなら、たとえ自殺行為でも、さっさと迷宮に突入した方がマシだとか思わないのか?」

「フリューが、私をここに連れてきました」

と、頭を下げたまま、師匠は星占い師の名を言った。

「彼との縁は長いものではありませんが、十分なだけの濃さがありました。その彼が、迷宮をくぐり抜けるためにあなたの協力が必要だと判断したなら、私はその判断に身を預けようと思います」

Г......

しばし、沈黙が落ちた。

老魔術師は水タバコの吸い口からも手を離して、師匠を見つめていた。

「……目があるな」

「目?」

鸚鵡返しに尋ねてしまったこちらを無視して、

「君主ロードがな。そうか、君主ロードが俺に頭を下げるか。時計 塔の君主ロードが」

老人の声は、なぜだか煙が浮かび上がるのと逆に、地面にわだかまるようだった。

それから、

「おい、弟子」

と、老人がフリューを呼びつけた。

「んだよ、爺い」

「確かに、大魔術回路をひたすら降りるだけなら手はある。だけどな、俺は生きたまま降りられる……だなんて言ってないぞ。そういう覚悟はしてきてるんだろうな?」

「そういう依頼なんだから、仕方ないだろ」

嚙み付くように返したフリューに眉をひそめ、老人は顎を擦る。

「依頼......ははあ、依頼ね。俺の弟子はずいぶん安く命を売るよう になりやがったな」

「悪いが、問答してるひまがねえんだ。こうしてる間にも、貴重な 時間が削られてる」

「は、いきなり人様の家にあがりこんで、言いたい放題しやがって。で、全員分の探索用装備は用意してるのか?」

その言葉の意味は、自分にも分かった。

数秒遅れて、師匠の方が意外そうな顔で問うたのである。

「……いいんですか、ゲラフ殿」

「いいから確認させる。俺のところに来る以上、持ってきてるんだろが、馬鹿弟子」

「俺が潜っていたときのやつなら」

「よこせ」

フリューが差し出した袋の中身を見やり、ごそごそとまさぐった 後、

「古い」

と、断じる。

そのまま、ゆっくりと立ち上がって、ちっちっちっと弟子とよく 似た舌打ちをしてから、こう命じた。

「ここで三十分ほど待ってろ」

「三十分で! フリューはんも言ったけど、残り二十三時間もない ねんで!」

たまりかねて、清玄が叫んだ。

しかし、

「三十分待てば、お前らがまるっと半日は節約できるようにしてやる。せいぜい感謝の涙で地面を濡らしてろ」

清玄の言葉にそう応じて、ゲラフと名乗った老魔術師は玄関の織り布をめくりあげ、悠々と姿を消したのだった。

おそらく、明日はいままでの人生で、最も長い一日になるだろう。

私には──ライネス・エルメロイ・アーチゾルテには、そんな確信があった。単に、冠位決議グランド・ロールがあるからというだけではない。ハートレスを追って、兄がアルビオンに潜ったからでもない。

そういう駒の動き方をしている、と不意に思ったのだ。

世界を盤上に置き換えるなんていうのは、いかにも子供のやりそうな妄想なのだが、結局のところ魔術師とはそういうものだろう。 一般人がさっさと幼少で切り上げた超人幻想に、うっかり指先だけ引っかかってしまったから抜け出せない憐れな群れだ。

救いようがないのは、そんな哀しさを含めて、愉しんでしまっていることだ。

どうせ、誰の人生も等しく愚かしい。

だったら、私は指先だけでも超人に引っかかってるほうが面白い。くだらない陰謀で誰かを嵌めたり、誰かに嵌められたり、無意味に根源なんかを追いかけ回して、屈辱でのたうちまわる方がいい。いまさら、まともで健全な人生なんてまっぴらだ。そんなものを押し付けられるぐらいなら、さっさとこの心臓をもぎとっていけばいい。

(.....まったく、今更だ)

そんな物思いにふけってしまったのも、ひさしぶりに誰かが不在のせいだろうか。

フィールドワークだのなんだのと言って、しょっちゅうロンドンの外に出かけていたが、兄が帰ってこないかもしれない......と真剣に考えたことは、実のところなかった。担保として、魔術刻印は

とっくに取り上げているし、あれの無駄な責任感の強さはよく知っている。

だけど、今回ばかりは例外かもしれないと、どうしても思ってしまったのだ。

これまでも、さまざまな事件と遭遇しては来たが、霊墓アルビオンは別格という感覚が拭えない。ある意味私たちと親しいがゆえに一なにしろ、物理的にこの足の下に埋もれているのだから一その恐ろしさを、これ以上なく知らされているのだった。

どれだけの魔術師が潜り、地上に帰らぬままとなっているか、考えずにいられない。ほかにハートレスを追う手段がなかったのは本当だが、他人が聞けば絶句するか、私に罵ば詈り雑ぞう言ごんを浴びせるしかない暴挙である。

(......私自身も、大半の手札を失うことになったしな)

夜もとっぷりと更けたが、今も大量の書類と睨めっこしてるのは これが理由だ。

もはや、冠位決議グランド・ロールは兄抜きで出席せざるを得ない。仮になんらかの連絡手段があったとしても、会議の場に兄の姿がないのは痛い。兄はまったく自覚がないだろうが、『新世代ニューエイジへの影響力が大きいエルメロイII世』という看板は、かなりの意味を持っているのだ。

ただでさえ手札の少ない現代魔術科が、さらに半分をゲーム開始前に打ち捨てたようなものだ。対戦相手にしてみれば、まさに笑いが止まらないだろう。もっとも、冠位決議グランド・ロールの問題は、席についた誰が敵側にあたるのか、はっきりとしないという点にもあるのだが。

(いまから、民主主義に乗り換える手もあるか.....?)

わりと真面目に考えたいのだが、問題は貴族主義トップのバルトメロイで、こんなタイミングで、かの時計塔トップ派閥の面子を潰せば、間違いなくエルメロイ派は破滅だ。下手すれば、時計塔の歴史から一切合切削除されかねないレベルの大破滅である。

かといって、これが人生さセ・ラ・ヴィとばかりに、何の策も講 じずに会議で無能を呈してしまえば、これはこれで侮られて、早急 にいずれかの派閥に追い詰められるだろう。重大な会議でろくな存在感も示せないような相手を、平穏な地位に据えておくほど、時計塔の権力抗争は甘くない。

「.....やれやれ」

義兄に押し付けていた胃の痛みを、ひさびさに感じる。

スラーの執務室の椅子に、思い切り背をもたせかけたときだっ た。

「──どうかなどうかな! 教授たち、霊墓アルビオンに着いたかな!」

もはや我慢出で来きないとばかりに、フラットがソファから身を 乗り出したのだ。

とはいえ、この少年が同じ内容を口にしたのは、昨夜からもう十七度目である。いい加減私が飽き飽きしているのも無理はないと、 諸氏には同情していただきたい。

「一応、到着はしたようだ」

答えて、私はぎゅっと眉をひそめた。

「可能な限り強力な通信用術式を付与しておいたが、それでも途切れ途切れだな。深層まで降りれば、まず状況は分からんだろう」

「あーもう! 俺も魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに乗りたかった! 今回はオークションしてないっていうけど、魔眼とかバンバン競せってみたかったし! そうと知ってたら、もう一度フェムの船宴カーサで張ってきたのに!」

「今度は君の声帯を質草にしたまえ。きっと高く売れるだろう」

「いいですねそれ! 喋れなくなると困りますから、今のうちに新しい声帯をつくっておきましょうか! あ、そうだ、新しくつくるなら、喉にこだわる必要とかないですね。いっそ右手とかどうです! 喋ったり変形する右手とか格好良くありませんか、最高じゃないですか!」

「うん、好きにしたまえ」

わきわきと右手を動かし始めた天才馬鹿から、視線をそらす。い つもならこれも義兄に押し付けるところなのだが、これだから玩具 の不在はつまらない。

ぼやけた視界に活を入れるべく、眉間を指で押さえる。

もちろん魔力で『強化』すればどうとでもなるが、どうせ会議で は過剰なストレスと緊張で死にかけるだろうから、なるべく温存し ておきたい。

ついで、すっかり冷めた紅茶を手に取ろうとすると、

「──姫様。こちらをどうぞ」

と、スヴィンが新しいティーカップを差し出してくれた。

いやまったく、ありがたいものは優等生だね。

「君らの塩梅はどうだ?」

「とりあえずエルメロイ教室の生徒については、動揺もあるものの、引き続きスラーの復興を手伝ってくれています。とりわけシャルダン翁が献身的なのに引っ張られて、遠巻きに見守ってたほかの講師陣も、おそるおそる戻ってきてくれてる感じです」

読み終えた書類をまとめながら、スヴィンが答える。

もちろん、フラットもその手伝いであちこち駆け回ってくれたの だろう。

エルメロイ教室の双璧は、意外と人望が厚い。スヴィンはもちろんのこと、フラットにしても、つい手を差し伸べたくなるような雰囲気を纏っているからだろう。こればかりは私にはお手上げの分野なので、ちょっぴり羨ましくないこともない。

それから、こう尋ねられた。

「冠位決議グランド・ロールには、姫様ひとりで行かれるんですか?」

「トリムマウだけは連れていくが、まあそういうことだね。あの薄 情者の兄め」 せいぜい憎々しく言って、私は唇を歪める。

とはいえ、メルヴィンが用意していた魔眼蒐集列車レール・ ツェッペリンもさることながら、霊墓アルビオンにアタックするためのチームを集めたのは私自身だ。ここで尻尾をまるめて諦めてくれるような男なら、そもそも私の兄にも選ばなかっただろう。

「護衛についていきますよ!」

「お前をついていかせられるか!」

フラットの発言に、つい反射的に怒鳴り返してしまった。

しょぼんと指をつっつきはじめた少年をおいて、私は温かな紅茶 を一口含んでから、一応説明を加える。

「……ふん。冠位決議グランド・ロールとなれば、むしろ身体的には安全だ。そこで襲ったりすれば、時計塔の地位は大きく下がるからな。で、シャルダン翁にも同じことを言ってるが、その間、地上は君たちに任せる」

「わ、任せてください! もうどどーんとタイタニック号に乗った つもりで! 氷山とかガッツンガッツンぶち壊しますよ!」

「どこの世界のタイタニック号だそれは」

ツッコミつつ、密やかに私はもうひとつの不安要素を考えていた。

(.....メルヴィンのやつはどうした?)

魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンを手配した直後、彼がトランベリオ派と接触したのは知っているが、以降は連絡が途絶えている。

(民主主義派に、取り込まれたか?)

もちろん、可能性としては高い。もとよりメルヴィンは、民主主義の中核たるトランベリオの分家だ。一応貴族主義に属するエルメロイにあれこれ便宜をはかってくれていた方が、理屈としてはおかしい。

とはいえ、あのメルヴィンだ。

命よりも愉悦を優先するようなあの性質で、単に権力に尻尾を振ることはありえまい。

(まして、あれでもウェインズではそれなりの顔役だ。突然殺されるということはあるまい。ということは.....)

トランベリオの御大か、とかの壮漢が頭をよぎる。

さすがに、ロード・トランベリオ──マグダネルが何かしら仕掛けてきたならば、メルヴィンも動きを封じられよう。

(本来なら、ロード・ユリフィスが対策を取ってくれるところだが)

老魔術師の顔を、ライネスは思い出す。

ロード・ユリフィス―ルフレウス・ヌァザレ・ユリフィス。時計塔の因習を一手に担ってきたような老人からすれば、エルメロイ派は一応貴族主義の仲間とはいえ、可能ならば消し去りたい類の汚点であろう。

もうひとりの君主ロード代理、オルガマリーについても、こちらは天体科アニムスフィアの本拠の遠さと、彼女のコネクションの細さから、あまり期待できる気はしない。

(.....まったく、四面楚歌なんて言葉が可愛く思えてくるぞ)

東洋の故事を思い出しつつ、私はつい唇がゆるむのを堪えていた。

いや、困ったことに、少しだけ愉しくなっているのも本当なのだった。この性質がもっと活かせるような立場だったら、自分は相当困った暴君に成り果てていただろうなあとも、考えてしまう。おっと、すでにそうだろうというツッコミは勘弁いただきたい。

そこで、

「.....お嬢様」

と、トリムマウが呼びかけたのだ。

どうやら、学術棟の受付から、何らかの通信を受け取ったらしい。間をおかず、水銀の唇は、あまり聞きたくなかった単語を発した。

「秘骸解剖局からのリムジンが到着いたしました」

「解剖局から?」

「はい。冠位決議グランド・ロール前日となったので、今から霊墓 アルビオンに移動していただきたいとのことです」

つい、眉間の皺が寄った。将来的に、兄のごとく顔に固定してしまわぬうちに、対策の魔術が秘薬を用意しておくべきかもしれない。

「やれやれ、夜に蠢うごめくのは魔術師の常だが、一応君主ロード 相手にも遠慮のないあたり、実に解剖局らしい。これ以上、余計な 手を打つ時間も与えてくれないかね」

軽口を叩きながら、ほぞを嚙む。

魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンで独自に乗り込んだ兄と違い、この迎えに乗れば、もはやほぼすべての行動は拘束されるだろう。あるいは、民主主義派の誰かが、余計なことをさせまいと、手を回したのかもしれない。——くそ、会議自体の前倒しもありえるぞ、これは。

「姫様」

「大丈夫? ライネスちゃん」

スヴィンとフラットが、それぞれに心配そうな声をかけてくる。

まったく、大事なポイントだけは押さえているあたり、確かにこのふたりはエルメロイ教室の双璧だ。憎たらしいが、可愛らしいの も否めない。

「堂々出陣さ。まあ、君たちはせめてもう少しきりっとした顔で見 送ってくれたまえ」

そう言って、残った紅茶を飲み干した。

十数分後、闇夜に待つリムジンへ、私はトリムマウを伴って乗り 込んだのであった。

*

ゲラフと名乗った老魔術師が戻ってきたのは、ちょうど三十分が 経ち、焦れた清玄とルヴィアがいい加減に出発したほうがいいので はないか、と提案しだした頃合いだった。

「おう、逃げ出さずに残ってたか」

「あんたなあ!」

声をあららげた清玄にかまわず、ゲラフは飄々と肩をすくめてみせた。そういうところは、弟子のフリューと似ている気がする。ただ、無為に彷徨さまよっていただけではない証拠に、背中に編み籠を背負っていることも、みんな気づいていた。

「いいから、ついてこいや」

と、身を翻して、老人が歩き出す。

今度は、自分たちが来たときと同じ、『強化』による歩みであった。外から見れば、ほとんど風に乗るかのように見えただろう。

そんな風に老人が連れてきたのは、街の外の、小高い丘の麓だっ た。

荒野である。

魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンから降ろされた山岳と、さほど離れてないのに、草木の類はほとんど生えていない。代わりに、ひびわれた丘の表面が、竜の鱗めいて見えたのは単なる錯覚だろうか。ここは死せる竜の尻尾にあたる……などと聞かされた今、自分が踏みしめている地面だって、まともな土とは思われなかった。

乾いた風は地表の冬ほどの寒さではないが、かすかな魔力を孕は らんで、ちくちくとこちらの魔術回路を刺激してくる。天蓋から降 り落ちる不思議な光もあいまって、自分は自然と唾を飲み込んでしまう。

ただの土地でさえ、霊墓アルビオンはこんなにも異常だ。

こんなにも、現代の人間を拒絶している。

「踏み込むのは、いつもの場所からだろうしな。このへんでいいだろ」

ひとり勝手にうなずいて、ゲラフはようやくこちらを振り返った。

近くの石の上に編み籠を下ろし、ぎろりと三白眼でこちらを睨めつけながら、

「おい、そこの修験者」

と、呼ばわった。

「そこの丘のてっぺん、何歩で飛び移れる?」

「は?」

問われた修験者が、老人が顎でしゃくった丘を見やる。

おおよそ、頂上まで二十メートル以上はあっただろうか。中空に 張り出した丘のてっぺんは、恐ろしく巨大な原始の象のごとくにも 思えた。

「二歩やな」

不服そうな顔で、修験者がわずかに膝を曲げた。

広げた隻腕に、巨大なカラスのごとき羽が生えたかのように見 紛った。二歩と言ったからには、おそらく丘の途中でもう一度どこ かを蹴ったのだろうが、自分の目にもその体術は感知しきれなかっ た。

気づいたときには、清玄の体があっさりと丘の頂上に飛び乗っていたのである。

飛び降りて戻ってきた清玄に、ゲラフが低く唸った。

「……悪くないな。天狗飛び切りの法か」

「せや。これだけは親父にも褒められてたからな」

「だったら、都合がいい。アルビオンの探索の際には可能な限り高所を取っておけ。もともと修験者の修行には、アルビオン向きの訓練が詰まってる。断食にせよ、呼吸法にせよ、山籠りにせよ、おおよそ必須の技術なんでな。以前一度組んだことがあったが、確かに腕は良かったさ」

ゲラフの言葉に、清玄が何度か瞬きした。

「修験者と? アルビオンに修験者が潜ってたことあるんか?」

「ある意味で、ここは地上の時計塔以上に多くの魔術師や魔術使いが集まるのさ。……片腕を失ったのは、魔術の代償にでも捧げたのか」

「そんなところや」

苦笑いした清玄から、つい自分は目をそらしてしまった。そらすべきではないと分かってはいたのに。

だってそれは、自分の聖槍が奪ってしまった腕だから。

「失ったのは最近だな。さっきの跳躍も幾分バランスが崩れてた。 本来は、そっちの印形も使って魔術を制御するんだろう」

「しゃあないやろ。なくなったものを数えても意味があらへん」

清玄の苦笑が、切ない色を濃くした。

「そういうのは、もうやめたんや」

失ったものを求めて、清玄はあの剝離城にやってきたのだった。 本当の後継者になるはずだった兄とともに、傷ついてしまった魔術 刻印を。そして、魔術刻印が修復されるのと引き換えに、城の主人 に自らの人格を奪われた。

自分たちと戦い、右手を失ったのもその結果だ。

だから、経緯を話そうとせず、ただ「もうやめたんだ」とだけ告

げる清玄が、こちらを気遣っているように思えて、自分はかえって 俯いてしまった。

そんな清玄に、ゲラフが告げたのだ。

「出せ」

「あん?」

「いいから、そっちの腕をまくって出せ」

食い下がったゲラフに、渋々清玄が垂れ下がった袖の内側を剝き 出しにする。

いまだ痛々しく、肉の盛り上がった断面をしばし見つめてから、ゲラフはむんずと握りしめたのだ。

「いづづづづっ! 何するんやジジイ!」

「痛むだろうが、我慢しろ」

短く言って、ぐりと腕をひねり、こちらが止める間もなく、こともあろうか断面に思い切り手の平を押し付けたのだ。

凄絶な悲鳴が、あがった。

「清玄さん!」

駆けつけようとした自分を、傍から出た手が制止した。

「やめておけ」

「師匠! でも……」

抗弁しようとした自分は、師匠の視線がかすかにズレた位置に向けられていることに気づいた。老人でも修験者でもなく、さきほど老人が手の平を密着させた腕の断面──そこから、ずぶずぶと猛烈な勢いで、淡く緑色に発光する枝みたいな何かが伸びていった。

「精霊根……そんな使い方が……!」

「あああああああああっ!」

悲鳴に促されるがごとく、断面から一気に枝が伸びた。

うねうねと広がった枝から葉が生い茂り、それもあっという間に 枯れて、散っていく。わずか数秒に樹木の一生を凝縮したような光 景。

ばかりか、残った幹と枝は、そのまま清玄の腕のカタチとなったのだ。

外側の樹皮こそ変わらないが、どうやら清玄の思い通りに動くらしかった。逆の手で押さえたまま、その指がぎこちなく開閉した。

「もともと精霊根は、石像に植えつければそのまま動き出して、 ゴーレムになるなんて代物でな。相性の良さそうなヤツを選んで、 うまいこと魔術回路と組み合わせれば、こういう芸当もできる」

「……ひっ……ぐっ……そんなん……どこから……」

まだ痛みが引かないのか、膝をついたまま、切れ切れに清玄が言う。

「地上じゃ珍しい呪体だが、アルビオンじゃどうとでもなるのさ。 お前の修験道とは相性がいいだろう。前の腕と完全に同じとはいか んが、それ用の使い方もある。あとは使いながら慣れればいいさ」

さも、壊れかけた家具でもくれてやったように言い切り、ゲラフは振り返った。

「エーデルフェルト」

「いちいち、家名で呼ばないでいただけます?」

反発したルヴィアだが、さすがに今の光景に思うところがあった のか、声音に相手を見下す響きはなかった。

「宝石を使った自動索敵の魔術は、いくつか心得ているだろう」

「……ええ、もちろん。魔術師をやっていく以上、恨みを買うことは多いですもの」

地上で最も高貴なハイエナ──もとい狩人にふさわしい言葉では あった。もっとも、恨みをぶつけてきた相手の被害は、倍返しぐら いではすまないだろう。

「なら重畳。そいつはアルビオンでも有用だが、大魔術回路ではあまり魔力に集中しすぎない方がいい。なにしろ、魔力に溢れてない場所がないんだ。常に反応しっぱなしじゃ意味がないだろう。いくらか精度は落ちるだろうが、反応対象を限定するのが基本だ」

「反応対象を?」

老人の言葉に興味を惹かれたのか、ルヴィアが訊き返した。

「たとえば、属性に限定して使えば、問題ない。この際、対象にする属性は一秒ごとに変えていけば万全だ」

そう言ってから、老人は突然片手を振り上げた。

ばっ、と握りしめていた何かを、周囲の荒野にぶちまけたのである。どうやら、アルビオンで採れる鉱石らしい……と悟ったのは、後のことだ。指か手首のひねりにコツがあるらしく、まっすぐ振り上げたとしか思えない手のひらから、一斉に鉱石は四散した。

「いくつ、どこにばらまいた?」

「……ああ、こうですわね」

ドレスの内側から、青い宝石を持ち出して、可憐な唇が囁く。

「Call目覚めよ」

ルヴィアの呪文ひとつで、宝石の煌めきはその深さを変えた。

数秒で、今度はその色が青から赤、赤から黄、黄から緑と移行して、美しい少女はこともなげにこう答えた。

「七つ。......いいえ、陰に隠して、もうひとつありますわね。位置 はこう」

人差し指で宝石を弾くと、跳ね出た光が、さきほど老人のばらまいた鉱石へと宿り、大地から浮かび上がらせたのである。

顔をしかめて、ゲラフはちぇ、ちぇ、と舌打ちした。

「嫌になるな。十五分どころか、ほんの数言、二十秒足らずで終わりかよ。俺の弟子どもにこれだけの才があればな」

「うるせえ爺い」

嚙み付くように言ったフリューに、師匠が小首を傾げた。

一歩前に出て、疑問に思ったらしいことを尋ねる。

「フリューのほかにも、弟子がいらっしゃったのですか」

「おお、俺は魔術使いだからな。まともな魔術師みたいに、一子相 伝にこだわる必要もないだろう」

さも当然とうなずいてから、ゲラフは禿とく頭とうをぺしりと叩いた。

「もっとも、そこの馬鹿弟子以外は全員死んだがな」

「.....死んだ?」

「つまらない話だ。それこそ、そんな無駄話に使う時間はねえんだろ。で、あんたにはこっちがいい」

ぺらり、と一枚の紙を差し出したのだ。

安っぽいコピー用紙であった。一応保護用の魔術はかけているようだが、それ以上の触媒だったり、術式の刻まれた礼装とも思えぬ。ひらひらと荒野の風に揺れる姿は、なんとも頼りなかった。

しかし、その内容にこそ、受け取った師匠が瞠どう目もくしたの だ。

「これは―!」

「最新の、アルビオンの地図だ。ついでに、馴染みのヤツらに一通り聞き回ってな。ここ数ヶ月で怪物どもを見かけたルートをチェックしてある。フリューが見れば、低層では遭遇を最低限にしつつ、潜っていけるだろう」

その言葉に、横合いで聞いていたフリューも血相を変えたのであ

る。

「おい、爺い! どうやったんだそんなもの!」

「ろくに魔術も使えなくなった老いぼれが、採掘都市の隅に住んでいるんだ。この程度のものを用意できる程度のツテはあるさ。地図のルートを使えば、大魔術回路に巣食った幻想種どもとの戦闘なんかは最低限ですむ可能性がある。ないよりはマシってぐらいだろうがな」

「そういう意味じゃねえ!」

老人の説明に、弟子たる星占い師は一喝した。

「さっきの精霊根にしろ、この地図にしろ、おいそれと手に入るものじゃねえはずだ。俺が潜ってた頃なら、まず一年分の儲けはくだらなかったぞ!」

ごくり、と唾を飲み込んでしまった。

実際、それは納得できたからだ。大迷宮によって、この場所は成り立ってるとフリューは説明していた。ならば、どのような怪物が出るか、どのように徘徊しているかという情報は、よほどの黄金にも勝るはずだ。

思わず、自分も声が漏れた。

「どうして、そんな.....」

「馬鹿弟子の言うように、俺はとっくに死んでるんでな」

と、ゲラフは、いかにもつまらなそうに吐き捨てる。

「死人に財もいらん。魔術師ならざる魔術使いである以上、受け継がせる相手もいない。どこかで手放そうと思っていたものを、この機会に手放しただけだ。......おい、君主ロード」

「なんでしょう」

老人に呼びつけられて、師匠が視線を向けた。

とはいえ、さすがに表情は硬い。老人が差し出しているものの価

値を、痛いほど師匠も分かっているからだった。

「さっきのは見ものだったぞ。魔術師の世界じゃずっと見下されてきた俺に、時計塔の君主ロードが頭を下げたんだからな。昔の知り合いどもに話しても、誰ひとり信じやしねえだろう。いいや、そもそもあいつらは新世代ニューエイジの魔術師が君主ロードになったなんて寝言の方が信じ難いだろうがよ」

くくく、と愉快そうに老人の喉が鳴った。

突然降って湧いた贈ギリフ物トに、周囲の魔術師たちも一様に絶句していた。混乱していたと言っても良いだろう。よもや、これほどのものを老人が惜しみなく差し出すなどと、誰が考えるだろうか。

師匠は、頭を下げて、低い声を押し出した。

「……身に余る言葉です。その上でわがままを重ねますが、もうひとつ、伝言のお願いをしてもかまわないでしょうか」

「は、気が向いたらな」

メモを受け取って、老人が片眉をあげる。

(.....どうして?)

つい、疑問に思わずにいられなかった。

ひどく、不思議な関係だった。

老人と師匠が出会ってから、わずか一時間にも満たぬ。なのに、 老人は―フリューの言葉が確かなら、身代を傾けるほどの出資を惜 しまず、師匠もそれを予期していたように思えたからだ。

自分もおおよそ同席していたはずの、至極短いやりとりのどこ に、それほど胸を打つ要素があったのだろう。

「──おい、フリュー、お前はこっちだ」

さらに、編み籠から背負い袋を出して、ゲラフが手渡す。

「最近使われてる探索用の道具を、適当に見繕って入れてある。お

前なら別に説明しなくても使えるだろ。......それに、こいつも受け取っておけ。昔渡しそびれてたがな。俺が現役の頃に使ってたナイフだ」

「……いいのか、爺い。昔、何度言っても譲ってくれなかったろうが」

「知ってるだろうがよ。もう使えるような体じゃねえんだ。単に未 練で、残してしまってただけだ」

フリューは背負い袋を担ぎ、しばしナイフを見下ろしてから、懐にしまいこんだ。

「分かった。恩に着る」

「着なくていい。ほれ、もういい時間だろう。さっさと行け」

面倒臭げに、老人はしっしと手を振った。

やっと厄介事を追い払った、とでも言いたげな仕草であったが、 今となっては、単純にそんな感情によるものとは思われない。

間をおいて、フリューはぽつりと呟いた。

「爺い、すぐには死ぬなよ」

「いまさら何言ってやがる。俺のことなんざ、地上じゃ忘れてたろうがよ」

歯を剝き出して、老人がけけけと笑った。

アッドと似てる笑い方だった。けして上品ではなく、しかしこちらのことを慮おもんばかっている者の態度。右肩の固フ定ッ具クに収まっている匣はこが、カチャカチャと動いたような気がした。

ぐるりと振り返ると、師匠の肩を抱いて、フリューが先を促した。

「行くぜ、II世」

「.....かまわないのか」

「ああ」

うなずいたきりで、フリューは足早に歩いていった。

ルヴィアと清玄も、一度だけ老人に会釈してから、それについていった。

「フリュー! エルメロイII世!」

かなり離れた頃に、声が背中を叩いた。

「必ず帰ってこい! てめえらのしけた面ツラなんざ見せなくていい! 必ずアルビオンから戻ってこい!」

振り返らず、代わりに、星占い師の逞しい手があがった。

フリューについていくと、先は丘陵地帯になっていた。

樹木などが生えていないのは変わらず、代わりにひびわれた円柱がいくつも連なっている。ストーンサークルのように見えるが、どうやら人工のものではなく、風などによる浸食作用によってそのカタチに変化していったらしい。

ずっと動かず、老人はこちらを見つめていた。

荒野に取り残された石像のようでもあった。

林立した石柱によって、その姿がついに消え失せた頃、ぼそりとフリューが呟いた。

「……あの爺いが魔術師として死んだのは、まあ半分は自業自得だが、残りの半分ぐらいは俺のせいでな」

「どういうことですの?」

石柱の間を歩きながら、ルヴィアが尋ねた。

「さっき、俺以外の弟子は死んだって言ってたろう」

ゲラフの弟子。

つまり、フリューの同輩にあたる魔術師──魔術使いたちのことだろう。

「ありゃな、嘘じゃないが正確でもない。俺以外の弟子は、まとめ て殺されたんだ」

「殺された? なんやそれ!」

物騒な言葉に、新しく生えてきた腕を握ったり開いたりしていた 清玄が反応する。 衝撃に、自分もつい耳をそばだててしまった。

「もともと、爺いはアルビオンの生還者サヴァイバーでな」

最初に会った、老人の部屋でもそんなことを言っていた。

「魔術師としての研究なら地表の時計塔が一番だが、魔術使いとしての実戦なら、このアルビオン以上の場所はない。生還者サヴァイバーとして地上に出た爺いは、辣らつ腕わんを振るい、相当に名前をあげた。あれで意外と世話好きでな。似たような事情の、頼る相手もいない魔術師崩れをよく拾ってきたものさ。……俺もまあそういうひとりだよ」

フリューの言葉に、往年の老人の姿がなんとなく思い起こされた。

おそらく、中東だったろう。

ギラギラと照りつける陽光の下で、あの老人は何人もの若き魔術師に囲まれていたに違いない。あるいは、師匠が運営するエルメロイ教室にも似ていただろうか。フリューを始めとした面々は、魔術にかかわるものとしては陽性で、マフィアや諸部族の仲介に関わることも多かったらしい。

「それが、時計塔の逆鱗に触れたんだろうよ」

赤茶けた地面に、フリューの声が吸い込まれていく。

「神秘は隠匿すべし。爺いのいた業界はあくまで裏だし、けして時計塔の掟を破るほどではなかったが、ちっと派手で気ままにやりすぎた。もともとあの調子で敵が多くてよ。まあ、必要以上に口が悪いあげく、手癖も悪い。結果として、当時の俺とも疎遠になっていた。いい加減、目をつけられる前にあれこれ手仕舞いしとけと言っていたんだが、まるで聞かないもんでさ」

フリューの話によれば、ゲラフがとある依頼を受けて、密やかに 国外へ出ていたタイミングだったという。

彼のかまえていた工房が、突然の襲撃にあったのだ。

内戦の多い地域で、それに巻き込まれたらしい。とはいえ、たと え高位ではなくとも超人たる魔術使いたちが、たかが銃器を持った だけの常人に、やすやすと殺されるはずもない。もとより、多くの 工房は結界を敷いており、物理的な手段だけで乗り込ませるほど甘 いものでもない。

そこには、ゲラフを忌々しく思っていた魔術師の差金があったの だ。

ゲラフが帰ってきたとき、工房は廃墟となっていた。長年、周到に集めた触媒カタリストや呪体が根こそぎ奪われていたのはおろか、留守を任されていた弟子たちも全員惨殺されており、死体にはおぞましい拷問の痕も残っていて、彼らがギリギリまで苦しんだのが見て取れた。

「弟子を殺された爺いは、復讐鬼と化したのさ」

フリューの言葉には、隠しきれぬ悔恨が滲んでいた。

惨劇に、己が居合わせなかったことだろうか。それとも、惨劇の 後、老人を止められなかったことか。

「ひとりずつ、実行犯も、居合わせただけの軍人も、そそのかした 連中もぶっ殺していった。なんせ俺の占いの師匠なんだ。隠れられ るものじゃあない。そこからの二年ほどは、そりゃあ悪魔みたいに 恐れられたものさ」

ふと、影を思った。

誰の人生にも、魔が差すことはある。老人の人生に差した影はあまりに暗く、大きすぎて、だからこそ老人は影と一体になってしまった。恐れていたものになってしまえば、もう恐れる必要はないのだから。

「……ああ、それもまたやりすぎたんだ。やればやりかえされるのが常だ。爺いの復讐もその例外じゃない、その夜、運命が差し向けた相手は、最悪の殺し屋でな」

「.....殺し屋?」

早足で歩くフリューに、少し汗をかきつつ追いつきながら、師匠 が尋ねる。 「裏では、一時期有名だった魔術使いの殺し屋さ。東洋人の、独特な魔術を使うヤツでな。その弾丸にやられた結果、どういう術式なんだか、師匠の魔術回路も魔術刻印もまとめてズタズタになったんだ」

「っー!」

一瞬、師匠が硬直した。

何かしら、思い当たるところがあったのかもしれない。あるいは、フリューがそんな話をしたのも、師匠に対してカマをかけるような意図があったのかもしれぬ。

いずれにせよ、自分には分からないことだ。

同時に、少なくとも今は、分からなくていいのだろうと思えた。 もしも必要であれば、この人は教えてくれるはずだと、そういう信頼はあった。

「ずいぶんと、その殺し屋について詳しいようだが」

「そらそうだろうよ。俺は一時相棒を組んでいたからな」

大いに唇の端をゆがめたフリューの言葉に、師匠のみならず清玄が隻眼を剝いた。

「じゃあ、あの爺さんを弟子のあんたが追い詰めたっていうんか!」

「だから、半分は俺のせいだって言ったろ。なんせ疎遠にしてたもんでな。俺があの爺いに恨みを持ってると思われてたのさ。実際、 当時についていえば、あながち間違いじゃない。はは、師父殺しな んてあだ名がつくのも分かるだろ」

坂道を踏みしめながら、フリューが自嘲じみた声をこぼした。

「さっきの殺し屋はな、本当に怖おぞ気け立つぐらいの腕利きだった。単に魔術の力量がって話じゃなくて、魔術師や魔術使いの盲点をつくことが頭おかしいぐらいに上手くてな。爺いも大したもんだったが、そもそも魔術戦にさえしてもらえず、あっさり撃ち抜かれて終わりだ。俺がとどめを刺したことにして、かつ匿かくまったのがこのアルビオンでなければ、まず隠れきれなかっただろ。……

いや、実際のところ、分かってたのかもしれねえ。魔術師としての 爺いは完全に破壊されたから、見逃されただけかもな」

Г.....

不自然なぐらいに、師匠は沈黙していた。

気にせず、フリューが続ける。

「殺し屋に依頼したのは、時計塔の貴族の誰かだったそうだ。依頼 主クライアントとの間に、人を経由していたせいで、俺たちも実際 に誰かまでは分からないんだがな」

「ええ、そういう輩なら、自分で依頼することはしないでしょう」 引き継いで、師匠の後ろを歩いているルヴィアが言った。

彼女にしてみれば、そちらの方が慣れた世界だったろう。魔術使いの殺し屋と、由緒正しき血統の貴族。本来なら、一生顔を合わせることなどありえないふたりが、この場では同居しているのだった。

近くの石柱を手で触れつつ、頷いたフリューの視線が地面を彷徨った。

「昔から、爺いは言ってた。時計塔の選民どもが神秘も魔術も薄汚く独占しようとしているのが許せないってさ。もともとアルビオンに潜って、生還者サヴァイバーになったのも、そんな奴らを見返してやるって考えていたからだろう。地上に出てから、いささか破天荒になりすぎたのも、同じ想いが抑えきれなかったからだろうな。あのアルビオンで成功した俺に、時計塔のクソどもが何を言おうが知ったことか、と無視し続けたんだろう。

その報いを受けて、可愛がった弟子も丹精を込めてつくりあげた 工房も、自慢の魔術回路も魔術刻印も―本当になにもかもを、あの 爺いは失った。奪われた。正直なことを言えば、アルビオンに戻っ たからって、あの爺いが生き延びてるかなんて、俺は自信がなかっ たぞ。能力的には問題なかろうが、もうありとあらゆる生きがいを 奪われた身だ。生きる理由がなければ、どんな人間だろうがあっさ りと死ぬもんだ」

Γ													
	٠	٠	٠	٠	٠	٠	٠	٠	٠	٠	٠	٠	L

少しだけ、分かる気がした。

自分はあの老人のようなガムシャラな努力なんかしていない。誰かを見返したいと情熱を燃やしたこともない。だけど、ずっと大切に抱いてきた願いが叶ったならば、その願いこそが己の行動を縛ってしまうこともあるだろう。

だって、願いの重さとは、つまり魂の重みだろう。そのように生きていくと決意して、そのように生きてきた結果だろう。だったら、人生の大半を費やして叶ってしまった願いとは、もはや単なる夢ではなく、その人の生き様そのものだ。

そして、それほどの願いゆえに、大切な人々まで巻き込んで破滅したとなれば、一体どんな風に残った時間いのちを潰していけばいいのだろう。

「そんな爺いにさ、時計塔の君主ロードが頭を下げたんだ」

と、フリューは微苦笑した。

「ああ、時計塔を見返したいなんて思ってる魔術師や魔術使いは、 ごまんといるだろう。爺いもそのひとりに過ぎないさ。だけど、爺 いは一度その夢を叶えてしまって、振り回されて、ついに奪われ た。あんたには、そんな古い夢をもう一度叶えてもらったようなも んだ。なあ、エルメロイII世。あんた、爺いがそういう相手だと 思ったんだろ? だから、率先して頭を下げた。違うか?」

「.....あ」

小さく、自分は呻く。

フリューの言う意味が、やっと自分にも分かったのだ。

「私を、悪人だと思うか。他人の大切な願いを、己のために利用する罪人だと」

師匠の声に、陰鬱なものが含まれていた。

実際、そんな風に糾弾する者もいるだろう。おそらく、師匠が時 計塔でやってこられた理由のひとつがここにある。陰謀が得意なわ けでもなく、人間の機微に長けているわけでもない。それでも、魔 術師の芯にある動機ホワイダニットを看破してしまう。 魔術の深淵を志す限り、師匠の観察眼は相手の根幹的なところに まで届いてしまう。

---『目があるな』

老人の言葉は、そんな師匠の性質に対して投げかけられたものだったか。

すると、フリューは淡く笑った。さきほどの自嘲とは、性質の異なる表情であった。

「いいや、爺いも分かってたさ。分かった上で、頭を下げたあんたに感謝してたんだよ。自分の人生が今更報われた思いだろうさ。おそらく、俺も感謝すべきなんだろうが」

言って、一度だけ振り返った。

もはや姿は見えなくなっていたが、老人の気配が残っている気が した。まだ老人が、あの丘の麓で待ってくれているような、そんな 気がしてならなかった。

たまらないものが、胸にこみあがった。

魔術師とは人間性を打ち捨てて、神秘に捧げた生き物だという。 実際その通りだと、自分だって何度もこの身で体験している。なの に、どうして時々こんなにも人間らしいと思ってしまうのだろう。

それ以降は、誰も、大して喋ることはなかった。

しばらくして、フリューの足が止まった。

「あ.....っ」

と、自分は息を止めた。

丘陵地帯に入ってから、いくつも石柱が林立していたが、ここで は奇怪な形の岩石がおびただしく重なっていたのだ。あるいは球 体、あるいは三角錐、あるいは星状の突起を帯びた立体がいくつも 積まれ、極めて危ういバランスを取っている。

芸術家というよりも、まるで巨人の子供が、奔放な心の赴くまま に粘土をこねあげたオブジェのようだった。

それも、中にはバランスがおかしいというか、明らかに重力に反しているような組み合わせまである。上部のほうがたんこぶみたいに盛り上がり、大いに傾いた石塔などは、崩壊してない方がありえなくて、こちらの均衡感覚を揺さぶってくる代物だ。こんな風景も、死せる竜の魔力の為せる業なのだろうか。

シュールレアリズムの、絵画の中に迷い込んだ気分だった。

その半ばで、フリューが再び口を開いたのだ。

「そこだ」

「そこ?」

「霊墓アルビオンの主たる迷宮部分。つまり大魔術回路─静脈回廊オドベナには、不正規の入り口が結構あってな。慣れたチームの一割ぐらいは、自分だけの入り口を確保していたんだ。爺いの地図のあたりまで、ちょうどいいショートカットになる」

「慣れたチームの一割、ね」

興味深そうに、ルヴィアが尋ねる。

「あなたも、その一割に入っていたということかしら。頼もしいこと」

「たまたまだよ。こういう占いは得意だって知ってるだろ」

嫌そうに手を振ると、腰のナイフへ手を伸ばした。

途中でその手が止まって、懐から別の一本を取り出した。さきほど、老人に渡されたナイフだった。

「Lead導き meたまえ」

放たれたナイフが、虚空に弧を描き、一瞬不自然に静止したかと 思うや──鋭く、オブジェのひとつへと突き立ったのだ。

突き刺さったその地点から、ゆるりと、人間ひとりぶんほどの漆 黒の穴が広がった。

どうやら、何らかの幻術をかけていたらしかった。このやり口 も、おそらくあの老人から習ったものなのだろう。

「……よし、まだ生きてたな」

「確か、アルビオンの内側はしばしばカタチを変えるんだったな」 後ろから、師匠が言った。

「その入り口が、途中で行き止まりになってしまっている可能性 は?」

「そいつは運頼みだ。どの道、まともなルートじゃ、たったの二十 四時間足らずで目標まで辿り着くのは不可能だろ」

「確かに」

と、師匠も認めた。

「頭をぶつけんなよ」

身をかがめて、フリューが潜っていく。

次に清玄が続き、三番目に師匠が、それからルヴィアさんと自分 という順番で、穴の内側に入っていった。

「さあ、潜るぜ。大魔術回路へ」

フリューの声が、底の見えない闇に響いた。

光は、闇の中で蟠わだかまっていた。

きらきらと群れ踊るようでもあり、パチパチと瞬く線香花火のようでもあった。

もっとも、原理としては爆発に近い。複数の通路が集中し、微妙に異なる魔力が流れ込んだ結果、互いに反発して光を放っているのだった。

アルビオンの大魔術回路・中層にいくつもある、結節点ジャンク ションのひとつである。

そこは、海に似ていた。

珊瑚が、びっしりと階層を埋め尽くしているからだ。

いや、もちろん通常の珊瑚ではありえぬ。清浄な海に生息するはずの、鉱物とも動物ともつかないカタチは、今アルビオンの濃密な 魔力を呼吸して、とりどりの色を咲かせているのだった。

これらは、死せる竜に寄生した生命である。

妖精郷に至る狭間で死に至った竜の骸は、多くのものを抱えて、 迷宮と化した。

たとえばそれは、竜としての魔力であり、現実と妖精郷のさらに狭間というひどく稀な位相であり、本来失われるはずだった神代の大気テクスチャそのものである。このため、それらすべてが渾然一体となったアルビオンは、いかなる霊地とも異なる独自の進化を遂げている。

本来、無形である魔力光が爆ぜる、などという怪現象もこの場なればこそ。

アトラス院、彷徨海と並んで、三大魔術協会としての時計塔が誇

る最大の資源、と称しても過言ではあるまい。

ゆえに、この迷宮で完全に安定した場所など存在しない。

今は、その結節点ジャンクションに、異分子が紛れ込んでいた。

獅子が、吼える。

正確には、獅子と紛う幻獣種が。

獅子の双頭に鷲の翼、巨大な爪には粘っこい毒液が滴るという、 地上のいかなる伝説にも存在せぬ──このような魔獣もまた、霊墓ア ルビオンにしか生息しないであろう。

無論、異分子とは獅子のことにあらず。

対峙した、もうひとつの影だ。

咆哮は魔力を混じらせて、もう一度影を叩いた。古来獣の咆哮 ビースト・ロアーは、さまざまな地域で神秘のあらわれとされる。 たとえアルビオンに生息する寄生生物といえども、これほどの咆哮 を受ければ大半は精神活動を停止させられて、双頭の獅子の食い物 にされるしかあるまい。

「ああ、獣の哀しさだな。強みを押し付けられない相手には、一手 劣る」

しみじみと呟いた影は、ゆっくりと剣を鞘走らせた。

いいや、緩やかに見えたのは、その動作が理にかなっているから だ。悠揚迫らざる速度で、しかし最短の動線を描いて、刃は闇を裂 いた。

「一鍛鉄Hephaistos」

同時に囁かれた神代の詠唱を、獅子が聞いたかどうか。鍛冶の神 を掲げたその呪文は、刃の切れ味を桁違いに引き上げる効果をもた らしたはずだ。 はたして、獅子の双頭は、呼吸ひとつの間にふたつとも落とされ たのだ。

「まったく愉快な土地だな。カリステネスあたりに見せれば、泣い て喜んだだろうさ」

古くマケドニアで鍛えられた剣を仕舞い、フェイカーは振り返った。

「そろそろ音を上げるか、現代の魔術師」

「.....いえいえ。まだなんとか」

背後で、ハートレスが笑みをつくる。

とはいえ、魔術師の頰は別人と紛うばかりにこけていた。ただならぬほどの精才気ドを消耗しているためだ。このアルビオンに潜る以前から、サーヴァントたるフェイカーに、魔力を提供し続けているのだった。

すでに対軍宝具を用い、何度となく遭遇戦闘を行っている。歴戦の勇士であるフェイカーは、ほぼ必要最低限の魔力で一度ずつの戦闘をこなしているが、なにしろクラス自体が規格外であり、聖杯のサポートもほぼ受けられない身だ。普通の魔術師であれば、五度ほど枯死してもおかしくない量が、すでにハートレスからは提供されていた。

以前の魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの際とは異なり、継続的な戦闘を余儀なくされる環境は、ドクター・ハートレスにもただならぬ疲労を強いているのであった。無論ほかにも仕掛けはあるにせよ、アルビオン中に渦巻く濃密な魔力をある程度変換できていなければ、すでに倒れていただろう。

とはいえ、フェイカーはむしろ感心した風に片眉をあげた。

「意外と慣れた感じだな。てっきり、ペース配分を間違えて、途中 で挫折するかと思っていたが」

「辞めて久しいですが、時計塔の学部長というのも一筋縄でいかな い仕事ですからね」

微苦笑を滲ませて、魔術師は腰に吊り下げた霊薬を飲む。

これとて貴重な品であり、大量に服用すればかなりの依存性もあるのだが、今回ばかりはやむを得ない。実のところ、体に無理をきかせるだけなら、現代科学による栄養ドリンクの方が安全かつ効果も高いのだが、魔力を賦活させるとなれば、やはり魔術による霊薬には及ばなかった。



肩をすくめて、フェイカーは冷静に観測する。

「目的地までは残り半分といったところかな」

「階層数も数えてないのに、よく判断できますね。おおよそ、私も そのあたりとは思っていますが」

「この手の勘が働かないヤツは、我が王の征服についていけなかったものでな。なにしろ、どこをどれぐらい征服する気なのかも分からない。生き残ったヤツは自然とこういう直感が磨かれたものさ」

「なるほど、それほどの直感となれば、ほとんど未来予測のようなものでしょうね」

海中のようなねっとりした空気の中で、ハートレスが深呼吸する。

大魔術回路の闇を睨み、フェイカーは静かに歩き出す。

唐突に、もう一度口を開いた。

「……つまり、あと半日ほどで、私はお前に殺されるんだな」

「そうなりますね」

平然とハートレスは答え、フェイカーもうなずいた。

「うん。なにしろ私を媒体に、神霊としての我が王イスカンダルを 再臨しようというのだからな。召喚の暁には今の私が消えるのが当 然だ。……ああ、この場合、願いを叶えてもらったというべきなん だろうがな」

「願い、ですか」

「私は、王のために死にたかった。お前は、その望みを叶えてくれるんだろう?」

問いかけに、ハートレスは細い眉をひそめた。

「……申し訳ありません」

「謝るな」

呵か呵かと、大きくフェイカーが笑う。

召喚されて以来、この女がこのような笑い方をするのは初めてか もしれなかった。

つい、と腰のあたりにさげたスキットルを口元に持っていく。

ぷんと香ったのはもちろん酒の匂いである。アルビオンに持っていける荷物は限られていたが、それでも極上の酒は主張して譲らなかったのが、なんとも彼女らしかった。

「お前は魔術師なんだろう? たとえ現代の常識と乖かい離りしていようが、それだけの理想と潔癖さをもって、猛々しき誇りとともに私を殺せ。古く新しい神代の明かりをもって、現代の魔術師たちを導くがいい」

そこまで言って、フェイカーは台詞を区切った。

「.....いや、もともとそんな動機じゃなかったか。お前は」

かすかに、ほんのかすかに、ハートレスが息を止めた。

きっと、相手がサーヴァントでなければ伝わらないだろう程度 の、小さな変動。

「分かるんですか、あなたに」

「あのな。もう二ヶ月以上も一緒にいるんだぞ。いくら私が人の機 微に疎くても、お前がどういう人格なのか、漠然とは知れてくる。 現代の魔術師という観点からすれば、お前はあまりそちら向けじゃない。陰謀も策略も人並み以上にできるだろうが、別に好きってわけじゃないし、呼吸するようにこなせるわけでもない。放っておいたら、毒にも薬にもならず、ぼんやり雲でも見て過ごすタイプだる。ああ、我が王の掛け声にさえ応えないのはそういうぼんくらばかりだったとも」

「初めて、そんな風に言われましたよ」

「だったら、お前の周りは見る目がないやつらばかりだったんだ」 ふんと鼻を鳴らしてから、フェイカーが断言する。 一呼吸置いて、ハートレスを正面から見つめて、ぱちぱちと瞬き した。

「おいおい。そんな顔もするのかお前。何か悪いものでも食べたか? それとも霊薬に脳をやられたか?」

「ははは、どうでしょう。というか、私でもおかしかったら笑いますよ」

声音には、かすかな懐旧の響きが混じっていた。

「ああ、でも、弟子たちからはこのアルビオンの話をよく聞いていたものですから、少し昔を思い出したのかもしれません」

昔の、ハートレスの姿。

現代魔術科学部長だった頃の、彼のこと。

「生還者サヴァイバーの弟子たちか」

「ジョレク、キャルグ、ゲセルツ、アシェアラ、クロウ」

ハートレスの唇からこぼれた名前は、忘れられた国の呪文のようでもあった。

「アルビオン時代の話を好んだのは、クロウでしたね。いわく、ジョレクとキャルグの兄弟は幻想種との戦闘を担っていたそうです。到底敵いそうもない相手の場合は、あのふたりが匂い袋や笛の音で引き受けているうちに、ゲセルツとクロウで魔術回路の間に埋まっている鉱石とかをできる限り発掘していったとか。敵うか敵わないかの判断は、地図をつくったり、警戒用の術式を常時起動しているアシェアラが担っていたそうですが、この迷宮の地図作りは難航を極めるのでしょうね」

「そのほとんどが、あらかじめ時計塔から霊墓アルビオンに差し向けられていたスパイだったわけだが」

呆れたようなフェイカーの言葉も無理からぬ。

彼女の時代にも、もちろん陰謀はあったし、間者スパイもいただろう。しかし、何十年もかけて世代をまたがって、ほかの派閥を嵌めるための策謀を働かせる……となると、さすがに埒らち外がい

だった。

「ゲセルツはともかく、ジョレクとキャルグが入れ替わっていたのは参ったな」

入れ替わり事件。

エルメロイII世が推理していた通り、ふたりの弟子は入れ替わっていたのである。おおよその目的も、推測の通り、秘骸解剖局の情報などを盗み出すためであったろうか。

「おかげで、ゲセルツまではそれなりに秘密裏に運べたのに、秘骸解剖局に潜んでいたキャルゲ──ジョレクは力ずくになって、結局殺してしまうしかなかったですからね。私の関与が完全に露見してしまった。死体は処理しましたが、あの冠位魔術師にはあっさりその意味まで見抜かれてましたしね」

蒼崎橙子は、ハートレスに対して、彼らは誰の弟子だったのかと 尋ねた。

ハートレスの弟子たちの失踪事件、その真相を彼女はいち早く察知していたのだ。つまり、失踪した弟子たちはハートレスの弟子になるより以前から、別派閥に属していて、いつか本来の派閥の役に立つため、アルビオンに潜伏させられたスパイたちだったという事実を。

「クロウはもう死んでるんだったか。アシェアラだけは先に姿を晦くらましてしまったが」

「構いませんよ。アルビオンから戻れない可能性がある以上、私が 心残りを終わらせておきたかっただけです」

「心残り、か」

ハートレスは、大きな銀のトランクを手にしていた。

迷宮探索という言葉にはいかにも似つかわしくないそれを数秒見 つめてから、

「マスター」

と、フェイカーが呼びかけた。

「お前はマスターだろう。だったら、私の願いなど無視して、ここでやめたっていいんだ。私なら、今からでもアルビオンを引き返して、お前を好きなところに連れて行く程度はしてやれる。昔世話になったとかいう医者のところだっていい。誰もお前のことなんか知らない世界の果てだっていい。いささか魔力はきつかろうが、聖杯戦争が終わって、私が現界できなくなるぐらいまでは付き合ってやる」

Г......

ハートレスの返答は、やや遅れた。

「……あなたなら、そんな風に生きたかったですか?」

「馬鹿を言うな!」

一喝してから、自分でも驚いたように、フェイカーは躊躇した。

考え込んだのはほんの数秒だったが、言葉は何年もの──あるいは 二千年もの重みを備えていた。

「......いや、そうかもしれない」

と、呟きが、大魔術回路の珊瑚に似たカタチをすり抜けたのだ。

「生前も、幼少の頃を除けば、ひとところに長くいたことなんかなかった。我が王は誰も彼をも引っ張り回したし、王母オリュンピアスは私をディオニュソスの巫女として育てるため、ひたすら神殿で儀式を繰り返していたが、あれは軟禁であっても生活とは言えないだろう。だから、私にとっての故郷とはあの学舎だけだったのかもしれない」

「ミエザの学舎、ですか」

イスカンダルが幼少の頃、後に彼を守護する近衛や将軍となる友人たちと学んだ場所だった。歴史上、最も高名な教育施設のひとつと言えるだろう。教師は偉大なる哲学者アリストテレス。当時のほぼありとあらゆる学問を修めた、神の恩寵ともいえる頭脳の授業を、イスカンダルたちは惜しみなく享受したのだ。

同時期、フェイカーも同じ学舎で学んだのだろう。

「雲を見ていましたか」

「見ていたとも。ほんのわずか、窓から見えた光景だけ」

優しく、フェイカーは微笑んだ。

「もっと長い時間見ていたかった。だけど、学ぶことは多くてな。 私は影武者といっても魔術的な影武者だから、常に王とともにいた わけではなかった。アリストテレス師の教えで、私が受けられたの はほかの半分ぐらいだったろうし、魔術に胡乱な視線を向けてたエ ウメネスやクレイトスには疎んじられたものさ」

続くハートレスの言葉は、場合によっては倒れた獅子と同じく、 首を切り落とされかねない類であった。

「だから、後継者ディアドコイ戦争という裏切りが許せなかった?」

「……どうだろうな」

と、フェイカーは答えた。

イスカンダルの死後、「最も強い者が治めよ」という遺言をきっかけに、母も忠臣も血で血を洗う争いを繰り広げた大戦争。それこそは彼女が王のアイオニオン軍勢・ヘタイロイの呼びかけに応えず、今回ハートレスに仕えることを決意させた原動力ではなかったか。

「召喚されてすぐはそう思った。今だって、考えるだけで、たまらない憎しみがこみ上げる。体の内側からどうしようもない炎が滾たぎるとも。……だが、私や兄が生きていれば、やはり同様に相争う一派となったやもしれない。むしろ、最も熱心に後継者を標榜した可能性は高いだろう」

「そうでしょうね。血まみれ姿が似合ったと思いますよ」

「とりあえず否定しろよ」

拗ねたみたいに、フェイカーが形の整った唇を尖らせた。

細い肩をすくめたハートレスに、今度はフェイカーの方から尋ねる。

「お前は、弟子に裏切られて、どんな気持ちだった?」

「……それがはっきりと分かったら、ええ、多分ここにはいないのでしょう」

台詞は、落ち葉のように地面に落ちた。

「分からないことをそのままにできたなら、その場合でもここにいないでしょう。おそらく、そのままにする方が人と問トとしては普通なのです。自分の気持ちを押し込めて、我慢して生きていく方が魔術師としてさえ基本なのです。でも、きっとそうしてはいられなかったから、私はあなたを召喚し、ここにいるのです」

ハートレスの言葉を受けて、フェイカーの顔に大魔術回路の光が 揺れた。

時に青白く、時に赤黒く変化する光の波は、彼女の内側で移ろっていく感情のようでもあった。

「そうだな。私も我慢できない。もしも、同じ立場に自分があったら同じことを為したかもしれなくても、彼らを許すことができない。……私は私のエゴで、もう一度我が王を顕現させることを諦められない」

サーヴァントの微笑は、なぜか童女のように映った。

「私たちは、我慢できない同士だな」

「そうですね」

うなずいたハートレスの顔が、次の瞬間、大きく後ろにのけぞった。

フェイカーの人差し指が、魔術師の額を強めに弾いたのである。

「調子が狂う。ここから先は、そういう弱々しい顔をするな」

額を押さえたハートレスに、彼女はくくっと喉を鳴らす。

「でも、その顔は嫌いじゃないぞ。酒盛りでもできれば、また見せてほしい」

「あなたについていくほどは吞めませんよ」

「そんな必要はないとも。ああ、あの我が王だって、酒の量だけは ディオニュソスの巫女たる私についてこれなかったんだから」

にやりと唇の端をつりあげて、フェイカーはもう一口、スキットルの酒を嚥下した。

「とはいえ、さすがにもう酒を交わす時間はないか」

「いいえ」

フェイカーの手からスキットルを奪い、ハートレスが口づけたのだ。

こくん、と細い喉が動くのを、遥かなるマケドニアのサーヴァントは好もしげに見つめていた。

それから、彼女はもうひとつ問いかけた。

「……もうすぐ冠位決議グランド・ロールなんだろう? お前の思う通りに、会議が動くと思うか?」

「さて。いずれにせよ、もうやることは変わりません」

「そうだな」

と、フェイカーは迷宮の先へ、視線を移す。

海中の珊瑚のごとき通路は、またこの先で、姿を変えるのだろう。時に美しく、時におぞましく、迷宮は侵入者を惑わし、幾多の怪物が待ち構えているのだろう。

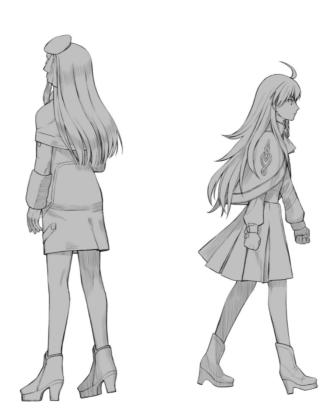
それでも、ハートレスの声に怯えはなかった。

「行きましょう。あなたをきちんと殺してあげます」

「ああ。私のマスター。……待っているとも。そのときを二千年以上待っていたとも」

まるで死刑台の階段と、婚礼の絨毯が一緒になったかのように、 光と闇の入り混じった大迷宮の通路を、ふたりは寄り添って歩き出 した。

◆ 第二章 ◆



がさがさ、と動くたびに葉擦れの音が鳴った。

光景は──テレビで観ただけなのだが──南洋のジャングルに近い だろうか。

シダ類が地面を覆い、樹高の高い植物が視界を七割がた塞いでいる。むっとするような草いきれが充満しており、地上では真冬だというのに、胸元までが汗でびっしょり濡れてしまっていた。

時折奇怪な生物がそうした植物の間を駆け抜け、たまに危険そうな個体が接近すると、ルヴィアが先んじて警告を発するのであった。

「……八時の方角から水の属性がふたつ、風の属性がひとつ反応。 接近を避けて、進路を五時方向にずらしましょう」

すでに、フリューとルヴィアが示し合って、何度か移動方向を変更している。

今、ルヴィアの周囲には、五つの宝石が浮かんでいた。

五つの属性に合わせた宝石だとのことだった。

ゲラフが言った警戒法はなるほどアルビオンに最適化しているらしく、戦闘寸前になりつつも自分たちはなんとか回避できていた。いや戦闘寸前になったのかどうかすら、自分には正確にはかる術すべがないのだが、師匠たちの物言いからすると、どうやらそういうことらしい。まだアルビオンに潜って半時間ほどだが、すでにどれほどあの老人の教えに守られていることか。

(ゲラフさんが.....教えてくれた知識)

あの地図に、フリューが培ってきた経験が合わさってこそ、無事でいられるのだろう。

アルビオンに入って短時間で、何度も光景が大きく変じて、自分たちを驚かせていたが、それでもふたつの共通点はあった。

ひとつは、呼吸するだけで肺まで痺れそうな濃密な魔力。

もうひとつは、地面を奇怪な光が走っていることだ。

それは、光の帯であった。

荘厳な流れが次から次へと湧いて、あるいはゆっくりと、あるいは気ぜわしく脈動しつつ、自分たちの向こう側へと流れていく。雄大な景色であると同時に、その在り方はひどく身近なものにも思われた。……たとえば、あらゆる魔術師たちの体を巡っている、魔術回路と酷似していて。

つい、自分は呟いていた。

「これが……大魔術回路」

「竜は死んでも、竜の魔術回路はこうしてまだ生きている。神代の 頃の神秘を内に蔵したままな。だからこそ、大魔術回路。またの名 を静脈回廊オドベナ」

フリューの説明を、どこか上の空で自分は聞いていたが、すぐ近くでルヴィアが声をあげた。

「それは……ひょっとして、神代の真エーテルが、まだこの魔術回路の内側を巡ってるかもしれないということですの?」

「さて、かもしれないが、この魔術回路を傷つけられた魔術師はいないんでね」

フリューの言葉どおり、ここまでにアッドを変化させて切りつけたりもしてみたが、光の帯にはかすり傷もつかなかった。

「異様な生態系も、魔術回路の影響によるものですの?」

「もちろん、それもあるだろうが、あまり思い込まないほうがいい。アルビオンは、結節点ジャンクションごとにまったく様相を変えるし、時期が変われば安定した様相も移行するからな。精密な因果関係なんざ、もはや誰にも分からなかろうさ」

フリューの言葉に応じたように、光の帯は赤く、青く、色を変え た。

その最中で、

「一そちら!」

シダの下から、索敵魔術をかいくぐった影が、突然盛り上がった。さきほどまで二次元の形しか持っていなかったはずの影は、みるみる三次元の長細い動物と化したのである。

蛇、と見えた。

しかし、もちろんただの蛇ではなかった。

二次元の影から実体化した蛇は、こちらに跳ねるや、中空で紫電を発したのだ。

「つー!」

「ルヴィアはん!」

清玄の叫びより早く、異変は生じた。

ルヴィアが周囲に浮かべていた宝石が、その紫電を吸収したのである。いかなる攻撃を受けても対応できるよう、索敵魔術と同時に 防御魔術も張り巡らせていたらしい。

フリューの放ったナイフが、彼女に嚙み付くより早く、蛇の頭を 穿った。

「気をつけろ」

と、ナイフを回収してから、フリューが警告する。

「いまの影かげ蛇へびもそうだが、大魔術回路に棲みついた幻想種はある種神代に近い。魔術と限りなく等質の生得領域を持っている」

「魔術に近い、ですって?」

「幻想種にはいくつかの意味合いがあるがね。現代の地上の幻想種のほとんどは、あくまで独自の進化を経ただけの、自然の生物とし

て成立する姿がほとんどだ。対して、神代やアルビオンの幻想種は、現実ではありえない形質を有している。生得領域は彼らが纏った超自然のルールだ」

「なるほど、よく学べましたわ」

ドレスについた埃を払って、ルヴィアはもう少し歩いてから、新たに口を開いた。

「目標地点は、古き心臓でしたわね?」

「そうだ」

と、師匠が肯定する。

「そのときには、すぐそばで冠位決議グランド・ロールも執り行われているだろう」

大胆不敵というべきかどうか。

ハートレスが行おうとしている儀式は、時計塔の頂上会議たる冠位決議グランド・ロールの至近距離を舞台にするのだった。もちろん偶然ではあるまい。同時期に魔術的な意味を求めた結果が、ロンドンにおいて最も神秘の濃い霊墓アルビオンの重要部に至ったのだろう。

「ハートレスの術式の目的は、神霊イスカンダルを再臨させることによって、神代の魔術を復活させる……なんやて? いくら魔術師いうたかて信じられることやあらへんけど」

これは、清玄が口にした。

「神代の魔術なら、直接神霊の権能にアクセスすることになる。神 霊が根源と強く結びついている以上、そうなれば根源に届かなくて もええ、か」

「君も、彼につきたいかね?」

「いいや。せやけどな、夢のある話やとは思うで。魔術師二千年の悲願を叶えたりはしない――代わりに、叶えなくてもいいっていう逃げ道をくれる。現実の痛みを散らす夢ますいとしてはこれ以上のものはそうそうないやろ」

清玄の囁きには、けしてふざけているだけではない何かがこもっていた。

精霊根によってできあがったばかりの手をさすり、隻眼で師匠を 睨めつける。

かつての犯人と、かつての探偵が、見つめ合う。

「そういう他人の夢を壊すために、命を危険に晒すんか。ああ、それはいかにもあんたらしい話やな、エルメロイII世」

「私も、そう思うよ」

どこか皮肉げな清玄の言葉に、師匠は真摯にうなずいた。

真摯さぐらいしか返せるものはないのだから、と言うように。

ゲラフのときも同じであったが、師匠はあらゆることに真っ直ぐ向き合い過ぎているように思う。本人が悪人だと言い張るように、ある程度の計算もあるのだろうが、その真面目さはいつか本人も壊してしまうのではないか、と不安にかられてしまう。

「.....もうひとつ、確認しておきたいことがありますわね」

と、ルヴィアが口を挟んだ。

「このタイミングで、冠位決議グランド・ロールが持ち上がったのは、偶然じゃないでしょう。なにしろ、サーヴァントは第五次聖杯戦争の勃発するこのタイミングでしか召喚できません。そして、あなたの言う術式で、フェイカーとやらから、神霊イスカンダルを呼び出す儀式も、冠位決議グランド・ロールによって、古き心臓の堰せきが外されるこの時以外じゃ不可能です」

「その通りだ」

「だったら、ハートレスはほぼ間違いなく、君主ロードないし君主 ロードに近しい誰かとつながっている。そうですわね?」

それは、以前師匠も言っていたことだ。

冠位決議グランド・ロールに参加する誰かが、ハートレスの共犯 だと。 「ああ。今、冠位決議グランド・ロールには義妹のライネスが向かっている」

「ご信頼なさってるのね? 下手をすれば、君主ロードが──いい え、貴族主義派か民主主義派かは分かりませんが、共犯者の君主 ロードの属する派閥がまるまる敵に回りますけれど。あら、なかな か楽しい趣向ですこと」

嘯うそぶいた少女に、鬱蒼と茂ったシダ類を踏みつけながら、師 匠が振り返った。

「だったら、君のエーデルフェルト家も巻き込むかもしれない。ここまで来て今更な話ではあるが、それが分かっていて、どうして私を手伝ってくれるのかね?」

「どうして、それが退く理由になるのかしら」

不思議そうに、ルヴィアは尋ね返した。

「私は魔術師ですわ。現代に生きる魔術師として、これほどの神秘 とめぐりあう機会はほとんどないでしょう。だったら、たかが時計 塔の一派閥を敵に回す程度、どうして躊躇う理由になりますの?」

「なるほど……」

あまりに、少女はきっぱりとしすぎていた。

以前、師匠に指導役チューターを申し込んだときもそうだったが、魔術師という以前に、その在り方は貴族として完成されすぎている。他人のものを奪うときですら、己の方がふさわしいのだから仕方ないと、傲慢に言い張るだろう。

そんな彼女を、美しい、と思う。

「で、経験者のご意見を伺いたいのですけれど、確か、最初のショートカットがこのあたりとか言ってらしたわね?」

「もう、すぐそこだ」

と、フリューは示した。

十数分と経たぬうち、植物が一斉に掻き消え、異様な臭いが周囲

にたちこめた。

その発生源が、自分たちの眼前に横たわっていたのである。

河だった。

地底に降りてから、何度も驚かされているが、あまりにも幅の広い流れだった。

向こう側まで、ざっと百メートル以上はあろう。ちょっとした浮遊や滑空なら魔術でもかなうが、それで届く距離ではない。底からは竜の魔術回路の光が浮き上がり、一見は美しく装っている。

同時に、たちこめる臭気の理由を、河岸から転げた人の首ほどの 石が、沈み切る前に泡を立てて溶け去ったことで証明した。

「酸の、河……!」

思わず、呻いてしまった。

溶解の速度は恐るべきものだった。石が沈む前に溶けるなら、人間の体など数秒で骨の一片も残さず始末してくれることだろう。河がこちらに一定以上侵食してこないのは、底と同じく、死せる竜の魔術回路が食い止めているからだ。

いや、おそらくここまで河幅が広がったのも、周囲を溶かして いった結果だろう。何物にも傷つけられぬ竜の魔術回路だけが、途 轍もない地底の酸にも耐えきったのだ。

フリューは、二、三度こめかみをつついてから、

「こいつが最初のショートカットだ。まあ楽な類だよ」

と、河を睨んだのだ。

「どないするんや、こんなん」

「まあ、少し待っとけ。さっき、匂い袋を撒いたからすぐに来るはずだ」

「匂い袋?」

眉をひそめた清玄への答えは、言葉ではなく実体として返った。

強烈な風を断ち切り、騒がしい羽音とともに、フリューが招いた モノたちは現れた。

「はあ?!」

困惑した清玄の声音も当然。迷宮の暗闇を横切ったモノは、単なる怪物などよりも親しみ深い分、こちらの意表をついていた。

それは、一匹ずつが人ひとりほどもありそうな、巨大な甲虫の群れであった。

「ようし来やがったな」

ぐっぐっ、と太ももを押さえて、フリューが歯を剝き出す。

「おいおいおいおい。フリューはん。まさか!」

清玄がついツッコミをいれたのも、無理からぬ。

正直、自分だって想像はしたが、間違えても言葉にしたくはなかった。

「おう、そのまさかだ」

と、気軽にフリューが首を縦に振ったのである。

「あの虫の群れの背中を、踏んでいくんだよ!」

「ふっざけんなあんた!」

清玄の叫びも虚しく、フリューの足が地を蹴った。

すでに『強化』をすませていた体は、数メートルを跳躍し、甲虫 の背を踏んだ。

一瞬バランスを崩しかけたが、そこは経験によるものか、すぐさ ま体勢を立て直して次々と新たな甲虫の背に跳んでいく。見守って いるこちらの胃をきゅっと縮ませるような、凄まじい光景だった。

「ああもう! めちゃくちゃですわね!」

非難したルヴィアも、すぐに続く。

破天荒なことではけしてひけを取らぬ少女は、蒼いスカートをつまみつつ、あたかもガラスの階段を踏むような優雅さで、おぞましき甲虫の群れを渡っていく。

なんだか、趣味の悪いおとぎ話にでも迷い込んだみたいだ。

Г......

信じがたいことだが、魔術師の運動能力にかかれば、なるほど不可能という類ではないらしい。ただ、いかにショートカットが可能とはいえ、寄生生物さえ利用するこの発想には、目を丸くせざるを得ない。アルビオンの採掘者たちは、それだけの試行錯誤をこの迷宮で重ねてきたのだろう。

隣で、居心地悪そうな咳払いがした。

「……悪いがグレイ、私が踏み外したら頼む」

「もちろんです」

師匠の言葉にうなずいて、自分も覚悟を決める。

あるいは恐れとともに、あるいは勇気とともに、自分を含む探索 者全員が、河岸から踏み出したのであった。 裂け目ポータルをくぐるとき、一瞬目眩がした。

位相がずれることによって、精神が受ける衝撃ということらしい。あるいは、魂が追いつくまでに起こる、ほんの寸瞬のラグだろうか。

ともあれ、地上の時計塔から数時間ぐらいで、私は遥か地の底に 招かれていた。

だが、その場で触れた情報は、いささか想像を超えていたのだ。

秘骸解剖局のチェックを経て、裂け目ポータルをくぐった後、私 たちは高所からその景色を見下ろしている。

裂け目ポータルと直結した高台うてなである。儀式塔と言った方がよいだろうか。ある種の魔術において、高みという位置はそれだけで有効に機能する。地上から遠く、天に近く。俗の概念から遠ざかればこそ、隔絶した神秘は燦然と輝く。だから、裂け目ポータルの片方がこうした高台に据えられたのも、自然なことではあった。

いや。

言いたいのは、そんなことではなかった。

私としたことが、いささか冷静さを失っていたらしい。

淡く発光する天蓋などは聞かされていたが、いま私の意識を占有しているのは、ごぅんごぅん……と眼下の都市のあちこちから聞こえてくる低い音だった。まるで、眠れる巨大な怪物が唸っているような音である。

実際のところ、その比喩は当たらずとも遠からず。

都市はそのまま、ひとつの巨大な生命だった。

見渡すかぎりに並んだ建物は、現代のビルディングと蟻の巣が融

合したみたい。おそらく、何らかの魔術的措置がなされているのだろう。時計塔の学術棟から発されるのと同じ種類の魔力が、いずれの建物からも感じられた。学術都市がある意味でひとつの魔術式として成立しているのと同様、採掘都市もまたなんらかの魔術でくくられているのだろう。

(……ああ、つまり、ここはもうひとつの学術都市でもあるのか) たとえば、現代魔術科のスラーもそうだ。

ロンドンに根をはる第一科を除く、十一の学科が支配するそれぞれの衛星学術都市。霊墓アルビオンの採掘都市とは、単なる橋頭堡や採掘拠点ではなく、そうした魔術都市のひとつでもあったのか。

データだけでは分からなかった実感を、今の私は得ていた。

「そういえば……採掘都市は初めてだったかね……」

杖をついた老人が、じろりとこちらを見やった。

胸元の、三重になった首飾りが揺れる。枯れ枝のごとき指にも、 宝石の指輪がふたつずつはまっており、いずれも極上の品に間違い なかったが、成金という風情はまるでない。ただし、宝石本来のき らびやかさも遠い。

あえて表現するなら、宝石の死体を身につけているかのよう、となるだろうか。

これで老人に精気がなければ、大英博物館あたりのファラオの木 ミ乃イ伊ラが歩いているかと見紛ったろうが、ギラギラと粘っこい 気配は隠しようもない。

ロード・ユリフィス―ルフレウス・ヌァザレ・ユリフィス。

降霊科を牛耳る、我が兄などとはまったく違う、正統なる貴族主義の君主ロード。

私は、小さくうなずいた。

「そもそも、霊墓アルビオンに来る用なんてないですからね。とはいえ、こちらこそ本来の時計塔の姿だ、なんて声があるのも分からないではないです」

「ある意味……ここでは時間が止まっている……。魔術師を過去へと向かうベクトルとするならば……この地底こそが本道と考えるのも……無理からぬことだろう……」

そう言って、老人は歩き出した。

杖をついてこそいるが、歩行自体は驚くほど速い。

高台の内側の螺旋階段を巡り、あっという間に、接続された別の 建物へと入り込む。

そこらの体育館ほどはあろうかという敷地の中で、多くの人々が作業を行っていた。その全員が魔術師なのは間違いない。いや、人間だけでなく、かなりの数のゴーレムも交じっていた。第一科と比べても、量と質の双方で抜きん出ているように見えるのは、アルビオンの特殊性と繁栄ぶりを示すものだろう。

なにより、私の目を惹いたのは─

「一これが、複合工房か」

つい、声が漏れてしまった。

魔術の事情をある程度知るものなら、その単語に眉をひそめたか もしれない。

通常、よほどのことがなければ、魔術師は自らの工房を他人につまびらかにはしないからだ。もちろん、弟子などは別だし、互いの魔術を学ぶにあたって、入り口ぐらいは開いてみせることもあるが、深奥に招き入れることはありえない。なぜならば、そこにはずっと研けん鑽さんしてきた魔術の精髄が詰まっているのだ。

(それこそ、我が兄を連れていけば、何を暴露されるか分かったものじゃないからな)

ついつい、連鎖的に考えてしまう。

後生大事に古い魔術を守っている輩の工房を、あの兄の表裏のな

い観察眼で、びしばしと解体してもらえば、さぞ、いい悲鳴がこだまするだろう。いや時計塔としては、案外その方が発展するかもしれないが、私の興味は悲憤のみである。己の無能さに絶望している兄が、世界に同様の苦悩を撒き散らすという皮肉が、とても味わい深く素晴らしい。

そして。

その例外──というよりも真逆にあたる存在が、この複合工房であった。

「ああ……複合工房クリエグラさ……」

と、嗄れ声が隣で響いた。

名に違わぬ光景が、目の前では繰り広げられていた。

重機のごとき器具を用いて傾けられているのは、私の背丈の倍もありそうなフラスコであった。半透明のフラスコの中で溶液がぐつぐつと沸騰し、トラック一杯の液体が、今度はレールに乗って流れ落ちる。その先にはさらに複数の蒸留機があって、別々の方法で溶液に触媒を加えて、反応を起こしていた。

一基や二基ではない。

こうした巨大な設備が、見える範囲だけで、ずらりと十数基も並んでいたのである。

怪物の唸り声のごとき、低い音の正体がこれだった。

やがて、魔術師たる私にも何が起きているのか分からない複雑怪 奇な工程を経て、最初はトラック一杯ほどもあった溶液が、小指の 先ほどの金塊に化ける。

無駄としか思われない光景なのに、つい私は感動してしまっていた。

(.....これこそ)

と、思う。

これこそ、魔術だ。

等価交換は魔術の原則だが、こうした蕩とう尽じんもまた魔術の 真理である。一は一に交換されるのではなく、限りなく無にまで希 釈される。その果てない希釈の先にこそ、奇跡のカケラは訪れ る......と魔術師たちは信じているのだから。

まったくもって救いようのない馬鹿者たちだと、笑い飛ばしてほ しくなるのも、分かっていただきたい。

「凝霊鉱からの錬金術かな?」

「これほど純度の高い凝霊鉱が採れるのはアルビオンだけでな...... とはいえ、以前なら......拳大ほどは残ったはずだが......」

「だから、ロード・トランベリオ──マグダネル氏の提案が出るわけですか」

霊墓アルビオンの再開発。

時計塔・民主主義派のトップがそれを言い出すことにも、当然の 理由はある。年々というレベルではなくても、アルビオンの採掘量 は目に見えて減っているからだ。現代において魔術師とはどうやっ ても絶滅危惧種なのだが、このままアルビオンからの供給が途絶え れば、どれほどの窮地に追い込まれるか。

だからといって、賛成できるかは別だ。

なるほどリターンは素晴らしい。しかし、そのためにかかるコストはどうなる? 現在のアルビオンの採掘規模ですら、莫大なコストがかかっているのは明白だ。再開発に賭けて失敗すれば、窮地どころか、再起の目が綺麗に消滅するだろう。

つまるところ、これはどっちを選んでも不都合な二重ダブル拘束 バインドなのだ。魔術師という生き物はなんて弱々しいものかと、 ついつい嬉しくなってしまう。

「……で、複合工房を初めて見た感想はいかがかね……エルメロイ の姫……」

「そう持ち上げていただかなくても。大変立派なものだと感動していますよ。ええ、特定条件下においては、我々魔術師もこのように協力しあえるのだなと」

「魔術師の生態に嫌みを言えるのが……なんとも楽しそうだ……」

「そういうわけではありません」

「だが正直安心した。......そのようであれば、睨みはきくだろう さ」

杖の握りを撫でて、ルフレウスが言う。

濁った瞳には、今も駆動し続ける複合工房の設備が映っている。

「アルビオンにおいては、皆が生きのびるのに必死だ。かつ、この場の人間はすべて魔術の理を知るがゆえ、秘匿の第一原則に抵触することもない。それゆえ、このような複合工房も成立しうる」

その通りだ。

魔術師のプライドも秘密も、この地底では優先されない。魔術を 秘匿しなければならぬ要素が、ここでは適用されないのだ。だから こそ、幾多の魔術師が知恵を結集し、発掘されたばかりの呪体を惜 しみなく投入する。

地上の魔術師ならば、人によっては吐き気を催すだろう。人によっては嫉妬のあまりに憤死するだろう。

ここは最古の拠点にして橋頭堡。

魔術師の最前線・霊墓アルビオンの──採掘都市なのだから。

「で、まさか観光案内をしていただいてるわけではないでしょう」

「もちろん……あちらだとも……」

老人が、くいと顎をしゃくった。

その延長上、巨大な設備の狭間に、見覚えのある人影が佇んでいた。

先に、私たちと同じ裂け目ポータルをくぐっていたのか。それと も、別の裂け目ポータルを使ったものか。

苛だたしそうに腕を組んで、ひとりの少女がこちらを睨めつけていた。珍しいのは、この私より若い少女ということだ。

「遅いわよ!」

と、彼女が唇を尖らせた。

銀色の髪に、琥珀色の瞳。

十一、二歳のまだ幼いといってよい横顔に、その年齢には不似合いな影が落ちている。魔術師の世界にそれだけ深く踏み込んでいるという証明だ。人間としての不幸が色濃くなるほど、魔術師としての色は鮮やかになる。

さもありなん、と思う。

私が最も謀略に巻き込まれ、度重なる暗殺未遂に怯えていたのは、この少女よりさらに若い頃だった。弱ければ弱いほど、つけこもうとする敵が増えるのが、時計塔のならわしである。逆に、そうした輩を退けるほど、魔術師としての精神性は完成する――完成してしまう。

この場に辿り着くまで、彼女の心身が受けた傷と流した血を、私 はどうしようもなく実感できた。

「やあ、オルガマリー」

オルガマリー・アースミレイト・アニムスフィア。

天体科を支配する、君主ロードの娘。

つまり、冠位決議グランド・ロールに参加すべくやってきた、も うひとりの君主ロード代行であった。

ただ、今回ばかりは組み合わせがおかしくて、つい笑みがこぼれてしまう。

「貴族主義の君主ロード代行ふたりが、よもや成人もしてない少女 ふたりになるとは思っていなかったですね。ご老体にはご負担おかけしてしまいますが」

おっと、いけない。

目ル上フのレ相ウ手スにまで、つい意地悪な気持ちがこもってしまった。もちろん、この老人に好意を抱いてもらいたいわけでもな

いが、ここで嫌悪感を持たれるのは悪手にすぎる。

「気にせずともいい.....」

ルフレウスは、黄色い歯の間から吐気をこぼして、口角をわずか にあげた。

「お主らは……余計なことを言わず、席についているだけでいい さ……」

無論、その台詞はけして親切心から発露したものではない。かの ロード・ユリフィスが好々爺めいた言葉を、意味なく告げるはずも ない。

票の数さえあれば、自分だけで勝てる。

そういう風に、老人は言っているのだ。時計塔においても指折り の名家たるユリフィスの誇りゆえであろうか。

ぞくり、と冷たいものが喉元を過ぎるのを感じた。よく研がれたナイフの刃でも当てられた気分。これだから、時計塔の上層部というのは始末に負えない。いささかの実績で調子に乗ったら、次の瞬間にはこちらの首が飛んでいる。

「とはいえ……よもや君主ロードが体調不良などと逃げ出すとはな……」

おっと、すぐさま、兄に矛先が向くとは。

「いえいえ、私に譲ってくれたのだと思いますよ。いずれは私が ロード・エルメロイになる以上、今のうちに経験しておくことも重 要ですからね?」

「ふん……」

一応兄を擁護しておいたが、どこまで私の言い分を信じているかというと、まあゼロだろう。現在進行形でアルビオンを攻略最中とまで知っているかはともかく、なんらかの裏工作をしているあたりまでは見抜いているはずだ。

それでいて、必要以上にこちらを牽制することもしない。

実際のところ、兄に比べれば、まだしも私の方がマシだと思っているのだろう。

魔術師としては単なる新世代ニューエイジでしかない兄に比べれば、たとえ分家の末端だろうと、私はエルメロイの血筋には違いない。血統こそ魔術師の本質と考えるルフレウス翁にしてみれば、私はギリギリ人間の範疇だが、兄は見るにも堪えないウジ虫といったところだろう。

(まあ、そういう気持ちが分からんではないんだがね)

兄の手前、なるべく控えてはいるが、私も魔術師としての道徳や 倫理観がしっかり備わってしまっている。

そもそもからして、他人の苦悩こそが私の愉しみであり……ああ、分かってる。性格なんて歪みまくってるとも。こうしてグレイもエルメロイ教室の皆もいないと、地金が出てくるのは許していただきたい。人間、外面は繕えても、内面がそう簡単に変わったりはできないのだ。

つい、と老人の視線が動いた。

「ミス・アニムスフィア......お主にはついてきてもらおうか」

おお、ミスときた。

正当なアニムスフィアの後継者である彼女なら、その価値があるということだろう。これだけはっきり差別されていると、かえって腹も立たない。うむ、後継者争いの結果で、たまたま紛れ込んだ末席で悪うございましたね。

「承知しました」

と、オルガマリーがうなずく。

ついで、老人は一度杖で床をついてから、こちらへ話しかける。

「ライネス」

はいはい、こちらは呼び捨てね。どうせそうだろうと思ってましたよ。

「古き心臓へ道を開くのは、もう半日後だ。お主には冠位決議グランド・ロールの間に気絶などせぬよう、せいぜい休んでいてもらおうか」

「ご配慮いたみいります。せっかくの機会ですから、採掘都市をも う少し見学させていただきますよ」

なるべく丁重に一礼して、一歩先に進む。

あまり時間はないのだから、せめてできる限りの情報収集はしておきたい。アルビオンの新参者ができることなどたかが知れているだろうが、まあ足掻けるうちは足掻いておきたいというのが人情というものだ。

「では、古き心臓で」

と、オルガマリーが会釈した。

隣を通り過ぎるとき、淡い香水が鼻孔をくすぐった。もう十年も すれば、さぞ美人になって、多くの男が現れるだろう。そのときに はせめて彼女の人生に、まともな選択肢が登場するのを祈るばかり だ。

複合工房を出て、眩しい光に目を細め、数十メートルほどしたところで立ち止まる。

それから、

「……これまた、女学校めいたやり方だね」

小さく、呟いた。

とはいえ、魔術的なやり方では誰にどう感知されるか分からない 以上、こんなやり方が安全なのも本当だろう。

ゆっくり開いた手の中には、くしゃくしゃになったメモが握らされていたのだ。

用心深く開くと、メモの端には、オルガマリーと署名が記されていた。

─世界は、灰色グレイだった。

いくつも立ち並んだ石碑に、自分は囲まれていた。

こまめな清掃はなされているものの、幾星霜を超えた石碑たちは もはや虚ろという印象が強い。風に吹かれれば、灰となって消えて しまいそうな、死者の名前たち。

ああ、分かっている。これは夢だ。

ブラックモアの墓地。

この景色を前にすると、自分はどうしても乾いた声を思い出して しまう。

──『お前が滅ぼすべきはアレだ。アレだ。アレだ。アレだけだ。

何度も、先達から教えられてきた言葉だった。

ベルサック・ブラックモア。

自分の心身に、墓守の秘法をいくつも教え込んでくれた人。

今思えば、アーサー王の器として選ばれてしまった自分に、できればそれ以外の人生だって選べるように、可能な限りの『力』を与えておこう、という意図もあったように思う。あの不器用な人は、けしてそんな言葉を口にしたりしなかったけれど。

「拙.....は.....」

ふらふら、と周囲を歩く。

霧を湛えた自分の墓地からは、本来の外の景色が見当たらない。

懐かしい故郷だというのに、ここから永遠に出られないような気がした。あるいは、ここからずっと出なければ、致命的な災厄に遭遇せず、終われるような気もした。

「おいおい、馬鹿なことを考えてる場合じゃあるまい。今は急ぎのはずだろうが。心の贅肉にかまけて、グズグズ怠惰に寝てないで、 とっとと目を覚ませ」

皮肉っぽい口調が、耳じ朶だを叩いた。

「.....アッド」

いや、違う。

自分のすぐ近くに、朧おぼろな影が立ち上がっていた。

この距離で姿が見えないはずはないのに、ただ影としか認識できなかった。だけど、その声音と佇まいに、確かな記憶があった。

騎士だというのに、まるでその呼称が似合わないヒト。

故郷の事件で、自分たちを守って、消え去ったはずの過去の残像。

アッドの基礎人格モデルになったという、円卓の騎士。

「.....ひょっとして、サー・ケイ.....?」

「妖精に近いところってのはいけないな。ありえない混線を引き起こす。とりわけ夢の中なんてのは最悪だ。なにしろ、あの宮廷魔術師マーリンの領分だからな」

顔は見えなかったが、にやりと唇を歪めたように思えた。

もう二度と出会うことはないだろうと考えていた相手の出現に、 自分の胸の内は千々に乱れる。突然嵐に投げ込まれた難破船みたい で、どんな思いもまともな言葉にはなってくれなかった。

「あ......あの......」

しかし、そんな感慨など知らぬげに、人影は続ける。

「時間も空間もここじゃ曖昧らしいがね。……お前が巻き込まれたのは、ああ、あいつがこっち側に近づいてるからか。夢の舞台にこ こが選ばれたのも、まあ必然だろう」

「あいつ……?」

訊き返すと、影はかぶりを振った。

「これだから、妹なんてのはいけない」

サー・ケイの妹。

それは、もちろんひとりしか思い当たらない。自分の体のオリジナルとなった、偉大なる王。だけど、それが近づいているというのは、どういうことか。

墓地が、揺れた気がした。

夢がほどけようとしている。

それも、今の影の言葉に反応した気がした。

「さあ、お帰りはあちらだ。ここは生きたまま、迷うようなところ じゃない」

すう、と影の指が動いた。

その延長上、霧の向こう側に輝きが生まれたのだ。

「あれ……って……」

ふら、と輝きに意識が吞まれる。

星に似た光が、その圧を増していく。

もはや、この場には立ってもいられない。分解しだした意識に耐 えられず、両肩を抱いていると、騎士の影は低く呟いた。

「覚悟ぐらいはきめとけ。決着はすぐだが、その運命はお前に厳し いかもしれない」 その忠言とともに、自分の意識は夢から浮上した。

*

「グレイ、グレイ―?」

こちらを案じる声と、肩に添えられた手。

革手袋越しの、ひどく優しく、壊れ物にでも触れるかのような力加減。そういえば、アルビオンに至る前、師匠は手袋を替えていたのだった。葉巻と革の入り混じった匂いが、ゆっくりとこちらの意識を揺さぶってくる。

天井には竜の魔術回路が青白く光っている。フリューの提案でキャンプをしていたのだと、ぼんやり思い出した。ほんの二十分ほどの休憩だったはずだが、疲れによるものか、すっかり眠り込んでいたらしい。

「師匠……」

呟きとともに、ようやく意識が現状に追いついた。

汗で、額に髪が張り付いている。さぞひどい寝顔をしていたことだろう。考えただけで猛烈に恥ずかしくなって、顔が熱くなった。

「も、申し訳ありません。不思議な、夢を、見てまして」

「夢?」

「な、なんでもないです」

まさか、サー・ケイと会った夢を見ていたとは言えない。素早く 首元から顎あたりの汗を拭き取り、小さくうつむくと、師匠は柔ら かく微笑した。

「いや、君にはいつも無理を強いている。アッド、本当に大丈夫か?」

「イッヒヒヒ! 心配性の師匠だな! ああ、グレイの体調につい

ては任せてくれ」

すぐ近くに置いていた鳥籠の内側で、匣がくるくる表情を変える。その言い草には少々の不満があるのだが、ひょっとしてあなた も同じ夢を見ていましたか、なんて尋ねられるはずもない。

代わりに、師匠が訊いたのだ。

「大丈夫かというのは君もだぞ、アッド」

「……ああ、大丈夫さ」

珍しく、余計な茶々を挟まず、アッドは匣に彫ちょう琢たくされた片目をつむった。

互いに言葉にはしなかったが、その意味は十分知れた。

ロンゴミニアドは、もう使えない。

故郷での事件の際、あのアトラス院の院長は言っていた。魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの戦いで、十三拘束を解放した以上、もう封印礼装としてのアッドは壊れかけている。自動修復機能によって、かろうじて休眠状態からは立ち戻ったが、次の解放には耐えられまい、と。

その言葉は、師匠にもアッドにも伝えなかったのに、どちらも把握してしまっている。自分はどれだけ隠し事ができないのだろう。

だから、これだけは言わなきゃいけない。

「それでも、師匠はやらなければいけないんでしょう?」

「む」

師匠の眉が、かすかに寄った。

「拙が少しぐらい無理をしても、ほかの人に少しぐらい無茶をお願いしても、師匠は行かなきゃいけないはずです。だって、イスカンダルさんは師匠の......」

その先は、口にできなかった。

神霊にされかかっているかの王と師匠との関係は、きっとほかの

誰も、安易に名付けしてはならない類のものだ。だから、そっと胸に秘めているだけでいい。この人の行先を見守らせてもらえれば、 それだけでいい。

小さくため息をついて、師匠は居心地悪そうに髪をまさぐった。

「今回は、なんだか君にたしなめられてばかりだな」

「いつもは師匠にされてることですよ」

おかしくて、少しだけ自分も笑った。

それから、

「ただ、師匠も顔色が……」

「何、それこそ大したことはないさ」

淡く笑った横顔が青白く見えるのは、けして竜の魔術回路に照ら されているからだけではあるまい。

しかし、それを理由に制止するのはできなかった。これほどの迷宮に乗り込んだ以上、どれだけ被害を最低限に抑え込んでも限度はある。たとえ直接戦闘や罠を避けられたところで、濃密な魔力が体内を掻き毟むしる。自分たちの中で、最も魔術回路の抵抗力の低い師匠から影響が現れるのも当然だった。

すると、フリューから尋ねてきたのだ。

「エルメロイII世、実際のところ、どれぐらい動ける?」

「......正直に言えば、呼吸が苦しくなってきた。だが、動くのには 問題ない」

「ほれ」

と、フリューが薬包を投げてよこした。

「魔力による高山病みたいなものだ。魔術回路が強靭ならかからないが、あんたには必要だろうと思ってた」

「……ありがとう」

感謝と苦悩が一体になった顔で、師匠が煎じ薬を飲み込んで、三倍も苦い顔になった。

それから、フリューがキャンプの魔術礼装を回収する。

魔術礼装と、獣避けの匂い袋を組み合わせた結界だった。それでも一部の怪物には役立たないそうなのだが、そこまでの不運は免れられたらしい。

すでに迷宮に潜って半日近く、自分たちは二度目の休憩を終えていた。

フリューの教示してくれたショートカットをいくつも使い、結節 点ジャンクションごとに、驚くほど大魔術回路はその様相を変えた。鬱蒼と茂ったジャングルや、猛烈な雪の吹きすさぶ氷原。溶岩の流れる大地や、真横に稲妻が走る丘にも立ち会った。それでも、フリューの言葉によれば、「お前らはアルビオンの一%も知らない」ということらしい。

大規模な戦闘を避けてこられたのは、間違いなくゲラフの地図に、ルヴィアと清玄の索敵が重なっての功績だろう。犯人側であったゆえ剝離城アドラでは発揮されなかったが、修験者としていくつもの山岳で修行してきた清玄は、獣の息遣いや環境の変化に極めて敏感で、おおよその遭遇エンカウントを事前に回避せしめたのである。

現在の階層としては、第二十七層……にあたるとか。

といっても、一層ずつ階段を下りていったわけではない。そもそも、フリューが使った隠し口からだと、最初に踏み入ったところで 第四層になるらしい。

「大魔術回路も、第十層まではほぼ採掘されつくしている。いまだと、第三十層あたりからが採掘のメインになっているな。第六十層あたりになると、腕利きのチームが危険を冒してでもより貴重な呪体の発掘を目指すってラインだ。……で、今回目指す、古き心臓といわれているゾーンは百五十層からになる」

「それじゃ……全然間に合わない」

つい口にしてしまった感想に、フリューは怒るでもなく、悠然と うなずいた。 「当たり前だ。そもそも百層付近で採掘しようって場合、熟練者のチームがさらに複数寄り添って、それぞれに協力しながら長丁場で挑戦していくものなんだ。時には、アルビオンの内側に中継地点をつくりあげて、一ヶ月から一年ばかりの街を形成することすらある。いくら裏技やショートカットを使おうが、半日で踏破できるのはこんなもんだ」

本来の、霊墓アルビオンでの採掘。

迷宮の途中に、即席の街をつくりあげるというのは、まったく想像の外だったが、こうして一部でも潜った今なら、そういうこともあるのかもしれない……と思えてくる。それほどにこの場での体験は濃密であった。

「……だから、残る半日で古き心臓を目指すってなら、まったく異なるアプローチが必要になる。最初から、採掘なんて考えてないからこそ取れる道がな」

その言葉とともに、自分たちはキャンプを発った。

そして。

今度は三十分ほどの地点で、フリューが開いていた地図を折りた たんだ。

自分たちが向かい合っている空白の規模に、全員がしばらく絶句 せざるを得なかった。

「三十層手前ってのは、意外と探索されつくしてない領域でな。一定以上の呪体を望むなら、三十層を通り越してしまった方がいいし、そこまで手が出ない新入りニュービーなら、ずっと浅い階層に繰り返し潜った方がずっとマシだ」

フリューの言葉も、ろくに耳に入らない。

迷宮に、ただ殷いん々いんと声が響く。

やがて、清玄がかろうじて口を開いた。

「……これが、ゲラフはんの言ってた?」

「爺いは、虚無の穴ナル・ピットって呼んでいたな」

自分たちが佇んでいるのは、凄まじく広い、大穴の縁であった。

視界を飲み込む円は、もはや実体化した暗黒に等しい。

小石を落として、数分待っても衝突音は聞こえなかった。もちろん、聴覚は『強化』していたのだが、そんな程度では追いつけない 高度ということだろう。

「……概算どおりなら、古き心臓は、採掘都市からさらに数十キロは地底になる。仮に現実の数値にあてはめれば、マントルにも届く距離だ。石の衝突音が聞こえないのは当然だろう」

「アルビオンは現実の座標に位置してない、でしたよね?」

尋ねると、師匠はうなずいた。

「現実の道理だけでいえば、とっくに私たちは酸欠になっているはずだ。魔術が物理法則をねじまげるといっても、無から有を生み出すのはたやすくない。それが、こうして平気でいられるのは、この迷宮が現実と向こう側の狭間にあるからだ。……だが、そうした性質は我々にもマイナスに働く」

大穴を睨んだまま、師匠は隣へ振り向いた。

「虚無の穴ナル・ピット、とはよくぞ名付けた。この穴が本当に古 き心臓に続いているとして、たかが数十キロで終わるのか?」

「保証はねえよ。なにしろ穴を降りて戻ってきたやつがいないからな。ただ、我が師はあの通り占い師だろうが。なんでもこの穴を見つけたときに、竜の心臓との流れを感じ取ったんだそうだ。賭けとしちゃ悪くない部類だと思うぜ」

「いやいやいやいや! そういう問題違ちゃうやろ!」

ふたりを交互に見つつ、清玄が思い切りツッコんだ。

「魔術師なんやから、高層ビルやそこらの高さなら、なんとでもなるわ。せやけど、数十キロってどういうことやねん! だいたい、この穴おかしいやろ! ここから窺ってるだけでも、あちこち大マ源ナにムラがある。場所によっては、行使していた魔術やって綺麗に散乱して、地面に激突八イ終わりや! どないする気なんや!」

以前、腑海林アインナッシュの仔─死徒の一種であり、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンを阻んだ移動する森─に立ち入ったときも、似たような状況はあった。精才気ドを賦活するメルヴィンの調律がなければ、ろくに『強化』も使えず、あの森で命を落としていたかもしれない。

だが、あれよりも遥かに深刻だった。

「もちろんロープを伝って降りていっちゃあ、どんだけ長さがあっても足りない。滑空用の礼装を使う。こいつなら、少量の精才気ドだけで機能するからな」

フリューが新たに取り出したのは、いくつかの布を折りたたんだような礼装だった。

小型のハンググライダー.....いいや、このカタチは、もっと鳥の 翼に近いだろうか。

「イカロスの礼装ですわね。珍しいものを出してきたこと」

と、ルヴィアが品評した。

「その通り。飛行には程遠いが、この大穴をひたすら滑空していく のには使えるだろう?」

「太陽に近づくわけじゃありませんものね」

呆れ半分なルヴィアの言葉だが、少なくともまったくの無策というわけではないらしかった。だからといって安心できるかというと、まるでできなかったが。

ふるふると首を横に振って、清玄はため息をついた。

「ひどい賭けやな.....」

「いや、賭け以外ではかなうまい。なにしろ古き心臓は、時計塔が 辿り着いている中では最下層だ。これより奥は妖精域。いまだ人が 届かざる領域だろう」

師匠の言葉に、スヴィンが教えてくれた、霊墓アルビオンの図を 思い出す。 採掘都市、大魔術回路、古き心臓、妖精域の順番になっていた。 最下部に書いてあった妖精域は、それがアルビオンの果てということではなく、それより下はまだ人類にとって未踏領域であるということなのだろう。

ごくり、と唾を飲む。

礼装を各人に手渡しつつ、フリューが説明を続ける。

「ここから先は未知数だ。仮に、この穴が古き心臓に直結していたとして、それで終わりってわけじゃない。目的は同じ領域にいるだろうハートレスに追いつくことだろう? 可能なら、崖のどこかで小休憩を取りたいところだがね」

「この穴の途中でキャンプを? それもぞっとしない話だな」

苦笑して、師匠は礼装を着用した。

見よう見まねで、自分も同じようにつけていく。基本的には、魔 術回路を駆動させるだけでいいらしい。

「できれば、飛び降りる前に練習ぐらいはしたいところだが」

礼装をつけた肩口を撫でて、師匠が言う。

しかし、今度は清玄が耳元に手をあてて、低く言ったのだ。

「いや、早くしたほうがええんやないかな。なんで、こんな穴ができたんかと思ってたんやけど、いま納得がいったわ」

「なんだ?」

フリューが顔をしかめ、すぐルヴィアが片眉をあげた。

彼女の周囲に浮遊した宝石のひとつが、淡く明滅を繰り返している。

自分たちの、数十メートルほど背後であった。突然、地面が大き く盛り上がり、内側に隠れていたモノの正体を露わにしたのだ。

「..... 蚯蚓みみず?!」

到底、そんな言葉で想起できるサイズではあるまい。

魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに匹敵するほどの、巨大な影であった。嵐のごとく大きくうねり、黒雲のごとくこちらを見下ろした怪物は、しかも一匹ではなかったのだ。

「急げ!」

フリューの指示とともに、全員が虚無の穴ナル・ピットへと身を 躍らせる。

だが、縄張りの侵入者を許さぬとばかりに、巨大な蚯蚓たちはそ の後から迫ってくる。崖に身をよじり、猛烈な勢いでこちらを追尾 してきた。

「なんで、ついてこられますの! ほとんど自由落下ですわよ!」

「見た目通りの鈍重さじゃねえんだろ! アルビオンここじゃよくある!」

「ああもう!」

ルヴィアの背中で、翼が広がった。

イカロスの礼装。

早くもその機能を使いこなした少女は、地の底の天使のごとく翻り、力強くその指を突き出した。

「Call!目覚めよ」

ーワン小節カウントの呪文とともに、呪いの魔弾が暗闇を引き裂 いた。

*

採掘都市にも、食事施設は存在していた。

おおよその文化は地上のロンドンから持ち込まれているらしい。 とはいえ、もともとロンドンが世界にも稀な多国籍都市であること を考えれば、これは当然の帰結だろう。この採掘都市にはさまざま な地域の魔術師や魔術使いがやってくるが、その集合としてロンド ンの在り方はふさわしかった、ということだ。

とはいえ、メモに載せられていた喫茶は、いかにも場末な感じ だった。

西部劇の臭いがする、とでも言えばいいか。

あまり清掃に気を遣ってるとは思えない木製のテーブルで、客もまばらに、離れて座っていた。乱暴にメニューが書かれた黒板も、 しばらく内容を書き換えられたことなんかないらしく、埃をかぶっている。

そんな中で、フードをかぶった少女の姿は意外と溶け込んでい た。

ちなみに、市民の多くがフードをかぶっているのは、アルビオンにおける頻繁な天候の変化で砂を吸わないようにということらしい。場合によっては砂に混じった胞子を吸い込んで、肺に寄生植物が生えたりもするとのことで、実に心躍る光景だと感心する。

「―どういうことかな、オルガマリー」

「来てくれたのね、ライネス。放っておかれるかと思ったわ」

と、天体科アニムスフィアの少女は微笑んだ。

フードからこぼれた銀色の髪が、くすんだ照明とあいまって、ぼうと霞むようだ。いままさに蕾つぼみが花開くところを思わせる。 十年どころか、あと五年としないうちに、周囲の男が放っておかなくなるだろう。もっとも、魔術師にそんなまともな神経があればだが。

私は、わざとらしく片目をつむって、肩をすくめた。

「何しろ、あんなメモを受け取るのは、先代が死んで、エルメロイの後継者扱いされる以前のことだったんでね。こんな女学校らしい手紙、無視するわけにいかないだろう?」

「女学校って、そんななの?」

オルガマリーが、小首をかしげる。

「私は学校なんか行ってないから。ずっと、アニムスフィアの本家 で、お父様につけられた家庭教師だけに教わっているわ」

「みんな、さぞ優秀な家庭教師だったろうさ」

「……そうね。とりわけトリシャは、私にはもったいなかった」

おっと、目を伏せたオルガマリーの横顔に、ちょっぴりぞくっと きてしまった。

確か、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの事件で殺された、オルガマリーの従者の名前だった。今もこうして話題に出るということは、彼女の存在がいかにオルガマリーにとって大きかったか、ということだろう。

すぐにその憂鬱を振り切って、琥珀色の瞳がこちらを向いた。

「訊いておきたいことがあったのよ」

と、彼女は密やかな声で打ち明けた。

「単刀直入にいくわね。エルメロイは、アルビオンの再開発に反対 なの?」

「おっと、これはいきなりだな」

おどけて片手をあげると、彼女の目つきがますます厳しくなったので、素知らぬ顔で元に戻す。うむ、冗談の通じる状況ではなさそうだな。

「だって、あなたにとっては成り上がるチャンスじゃないの?」

オルガマリーの質問は、なるほど核心を穿っていた。

まさか、冠位決議グランド・ロールでなく、こんなところでその話を持ち出されるとは思っていなかったが。周囲に聞かれる危険も一瞬覚えたが、誰もこちらに注目していない。……先んじて、ごく小規模の結界を張っていたらしい。

数秒、わざとらしく間をおいて、私は口を開く。

「それ以前に取り潰されちゃ意味があるまい。うちのような弱小派 閥が、同じ貴族主義の目上に逆らっては、一瞬で首が飛ぶ」

「でも、アルビオンの再開発自体は、貴族主義や民主主義のテーゼ じゃないでしょう」

鋭い指摘だった。

民主主義のトップであるトランベリオが、アルビオンの再開発を 目的にすると言い出したものだから、今回の冠位決議グランド・ ロールではそういう流れになっている。

だけど、それは貴族主義派や民主主義派自体の、目指すところとは別なのだ。

ついで、オルガマリーはこんな風に付け加えた。

「バルトメロイは、わざわざ先代から、アルビオンの再開発は阻止すべきだという手紙を申し送ってきたわ」

「先代から、ということは」

「そうよ。つまり手紙を無視しても、今のバルトメロイに逆らった わけじゃないって言い分が立つじゃない」

うわ、怖い考え方をするな、この娘!

もちろん、先代から申し送ってきたということは、バルトメロイも誰かが逆らってくる可能性を考えているのだ。万が一、バルトメロイに逆らった相手が出てきた場合、それでも威厳が失墜しないように。

琥珀色の瞳は、強い意志を宿して、宣言したのだ。

「だったら、これは貴族主義や民主主義の問題じゃないと、冠位決議グランド・ロールで宣言してしまえばいい。天体科アニムスフィアの格が、降霊科ユリフィスに劣るわけじゃないもの。得票数で争うのなら、私たちふたりは今回の冠位決議グランド・ロールをひっくり返せるのよ」

さすがに、返す言葉は遅れた。

小休止ということで、オルガマリーが視線を横にやると、密談用の結界も切れたのか、ウェイターが注文していた皿を持ってきた。

あまり食欲がわかないながらに、パサパサしたサンドイッチにかじりつく。うん、臭みを誤魔化すためだろうが、適当にスパイス利かせすぎだなこの肉。というか、私にも何の肉か分からないあたり、ちょっぴりスリリングだな!

ともあれ、飲み込んだところで、もう一度切り出した。

「……なるほど、ずいぶん成長したものだ」

「誰かさんを見習った、と言ってほしいわね」

唇を尖らせたところは、正直可愛かった。

とはいえ、ここまで直球なのは本来悪癖だ。相手の出方が分からず、弱みを摑んでいるわけでもないのに、内心をぶちまける馬鹿がいるか。もっとも、そのあたりまで赤裸々に感想を吐けば、いつか足をすくわれそうな気がするので黙っておく。

「……なによ。私じゃ組むのに不足だっていうの?」

拗ねたような言い方に、つい苦笑してしまう。

「いや、見習ったなんて言われて、自分の昔を思い出していただけだよ。君のところの家庭教師と違って、うちの執事は実にろくでもない人間だったさ」

まあ、あの悪徳執事はずいぶん前に出奔してしまっているんだがね。私をこんな性格にしてしまった責任は、いつか取らせてやりたい。

(.....だけど)

だけど、これこそバルトメロイが懸念していたことだろう。

貴族主義は強大だが、けして一枚岩ではない。むしろ、それぞれが誇りを持ち、独自の理念を持つがゆえに、瓦解するときはあっさりと瓦解する。そうなってしまえば、法政科やバルトメロイの王者

としての看板は強すぎるのだ。

強烈すぎるブランドが一度失墜すれば、立て直すのは難しい。

そのことを重々承知しているからこそ、貴族主義のトップである バルトメロイの動きは鈍いのだろう。十年二十年どころか、何世代 にもまたがった計略を平然と行うバルトメロイだからこその感覚 だ。

(.....とはいえ、エルメロイうちはそれに乗れるほど盤石じゃないんだよな)

というか、ブランドが失墜しまくった結果が、まさにエルメロイ派の現状なわけだから笑えない。先代ロード・エルメロイを失った反動は、いまだに深く我が派閥を蝕み、復活の目処など遥か彼方だ。

そこまで考えて、私はもうひとつため息をついた。

「ここで返事はできない。だけど、君の言葉はちゃんと胸に留めて おく」

「それでいいわ」

オルガマリーも、悠揚に首を縦に振る。

爆弾を落としておいて、まあさっぱりした顔をしてくれること だ。

なるほど、彼女も次期君主ロードの器に違いない。こんなところで、その素養を見せつけてくれなくても良かったのに。

得体のしれぬお茶だけ飲み干して、席を立つ。

一さてさて困った。

問題は、君がドクター・ハートレスの共犯じゃないと、いま だ確信が持てないことなんだよ。オルガマリー? 外に出て、天蓋からの光に目を細める。

残るは、半日。

いや、それさえも怪しい。

まして採掘都市まで来てしまった以上、できる小細工にも限度は ある。後は、我が兄が無事に古き心臓まで辿り着くことを祈りなが ら、過ごすぐらいか。

「さすがに、採掘都市の情報収集のツテなんかないしね」

疲れとともに、呟く。

ちょうど、そのときだった。

「ライネス・エルメロイ・アーチゾルテ、で間違いないな」

と、背中から声がかかったのだ。

一瞬前まで、確かになかったはずの気配であった。

(しまった--!)

これが暗殺なら、確実に殺やられているタイミング。

少し離れて待機させているトリムマウを呼ぶ暇さえもない、完全な不意打ち。久方ぶりに死を覚悟する。フラットの言うとおりに、 護衛を頼んでおけばよかったか、なんてつまらない思考が最後になるとは—

「安心しろ。敵じゃない」

と、嗄れた声が耳朶を叩いた。

こちらの警戒が伝わったらしかった。

今の気配の消失ぶりといい、人の思考の読み方といい、露骨に慣れた手際は間違いなくその手の経験者ゆえだ。大変遺憾ながら、私もそういう人間には慣れてしまっている。

誘導されるままに、路地裏へと入り込む。

そこで唾を飲み込み、ゆっくりと振り返った。

「.....あなたは?」

「ゲラフという。魔術使いですらなくなった老いぼれさ」 矮軀の老人は、顔中の皺を歪ませて、笑ったのであった。 急速な落下。

この不可思議な地下でも重力は働いていて、自分たちは途轍もない速度で墜落中。

だというのに、背後から追ってくる巨大な蚯蚓たちとの距離はいっかな変わらない。ルヴィアの放つ魔弾も、フリューのナイフも寄せ付けず、ぐいぐいと接近してくる。

「逃げ切れない―!」

まだ、背中のイカロスの礼装にも、自分は適応しきれていない。 かろうじて魔力は通っているが、やはりこれはただの墜落だ。師匠 も含めて、ほかの魔術師たちはすでに滑空状態へ移行しているが、 自分は空中でもがいている。

追ってくる巨大な蚯蚓は三匹。

群れ集うその圧力は、ほとんど実体を持つ嵐に等しい。恐るべき 速度もさることながら。まるで小さな山が動いているようだ。

しかし、次の瞬間、別の理由に自分たちは絶句した。

こちらを追う蚯蚓の頭部に、何かが開いたのだ。

蚯蚓が持つはずもない、神秘の結晶が。

(──瞳?!)

いいや、ただの瞳にあらず。

その眼球が開いた刹那、魔力が動くのが分かった。これまで何度 か、間近で感じたことのある神秘。

その魔力の動きに、心臓が止まるかと思った。

「そん、な!」

「魔眼を持つ怪物だと!」

師匠の叫びとともに、降下している自分たちの体が、途端にぎこちなく固まった。

それは、まさしく霊墓アルビオンならではの異形であったか。本 来、眼球など持たぬはずの蚯蚓が、いかにしてそのような形質を獲 得したのか、想像すらできぬ。

魔眼の格としては、ごく低級の『暗示』。しかし、よもや蚯蚓が 魔術を行使するなどと思ってもみなかった自分たちには、十分だっ た。虚をつかれたカタチで、全員が滑空を停止したのである。

いや、ひとりだけ例外がいた。

「こっちや!」

礼装の翼を羽は撃ばたかせ、反転した清玄の手が伸びた。

これは、比喩でなく、数メートルも伸長したのだ。ゲラフに与えられた精霊根の腕が、カタチを変えて、鉤爪のごとく最初に追尾してきた蚯蚓の頭へ突き刺さった。

「ああ、気分悪いけど、便利な手やな!」

言いざま、もう片手で、眼帯を清玄が押し上げた。

瞬間、凝集した魔力の結果に、自分はもう一度驚愕した。

魔眼を見開いた蚯蚓たちが、その瞳から炎をあげて、大きくのけ ぞったのである。

「一グレイはん!」

「っ一!」

その掛け声で、やっと礼装の翼が動いた。

魔力回路を駆動させ、可能な限りの魔力を注ぎ込んで、軌道を反 転。 「アッド!」

「おうさ!」

掛け声とともに、死神の鎌グリム・リーパーを展開する。

加速度とともに、刃を一閃。蚯蚓の巨大さからすれば、致命傷には到底なりえない程度の傷であったが、それでも負傷した蚯蚓を怯ませるには十分だった。

そのまま、墜落から滑空へと移る。



蚯蚓たちと距離が離れたことで、暗示の魔力が切れたのか、ほどなくしてほかの魔術師たちも体の自由を取り戻していった。

「清玄、いまのは……」

呻いた師匠に、清玄はほんの少しだけ得意そうに、唇を歪めた。

露わになった瞳をもう一度眼帯で隠してから、

「わいがどこから乗っていたと思ってるんや」

と、口にした。

「魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンであんたらと合流する間に、ちょっと『炎焼』の魔眼を手術してもらってな。ふん、魔術世界に顔はきかんけど、金だけならアッシュボーンが貯め込んだのがあったからな」

「……遺産、か」

小さく、師匠が呟いた。

自分も、当時のことをもう一度思い出してしまった。剝離城アドラの事件。

「そういえば、アドラの事件も、もともとはそういう触れ込みだったか」

「天使をつかまえたものを、遺産の相続者とする、やったな」

懐かしそうに、清玄が呟いた。

その遺産の相続を取り仕切ったのが、あの法政科の化あだし野の 菱ひし理りであった。

なるほど、アッシュボーンの遺産について、法政科は正しく仕事 したのであろう。

当時の遺言状の内容とはいささかの齟齬をきたすものの、息子であるグラニド・アッシュボーン──時任次郎坊清玄にこそ、遺産を受け継ぐ資格があると考えたらしかった。

(……天使をつかまえたものを、遺産の相続者とする)

そんな風に、アドラの事件の遺言状には書かれていた。

天使の名を問われて、答えたのは師匠であった。

ならば、清玄は天使をつかまえたのか。天使につかまえられたのか。

とりとめない連想を切り裂くように、師匠が肩の礼装に触れた。

「降りるぞ!」

イカロスの礼装が、翼を羽撃かせる。

師匠の声とともに、自分たち五人は、地底のさらなる闇へと潜行していった。

古き心臓へ続く、底なしの闇に─



─一滾々と、魔力が汲み上げられていた。

霊墓アルビオンにおいてさえ、その魔力は異常だった。

量もさることながら、質においても、ほかの区画とまるで違っている。

現代において、最も真エーテルに近い──と、人によってはそう言うかもしれない。過去の真エーテルとも、現代のエーテルともまるで違うものだと、人によっては言うかもしれない。

いずれが真実かは分からない。

だが、この場の呼び名は、アルビオンに関係するすべての人の脳 に刻まれていた。

古き心臓、と。

青白い光は、その場では螺旋状に渦巻いている。

大魔術回路を抜けて、新たな部位へと踏み入った証拠だった。

単純な広大さだけでいえば、百以上の階層が積み重なっていた大 魔術回路に比べれば、ぐっと小さい。しかし、さきほどの魔力から も分かるように、神秘としての濃度も同じだけ凝集されたかのよう に思えた。

広間である。

はるか昔に止まったはずの竜の心臓が、その場ではいまだ鼓動しているよう。広間全体が細胞のひとつに過ぎぬと主張するごとく、 蠢いているようだ。

そして、

「……さて、これで私の仕掛けは終わりです」

と、男は口にした。

心底疲れ切った口調だった。実際、それだけの大魔術を、彼は たったいま行使していたのだ。

それでも、まだ終わりではない。

視線を脇に落とす。ここまで持ち歩いていた、銀のトランクであった。

表面を撫でて、魔術ミスティック錠・ロックを外しながら、ハートレスはゆっくりと囁いた。

「あなたにも、協力していただかないと」

トランクが、開く。

隙間から手を突っ込み、内容物を摑み出す。

「元来の衛宮の家伝魔術は、体内や固有結界内など世界の干渉を受けぬ場所において、極限まで時間を加速させる術式です。さすがに固有結界は他人に真似できるものではありませんが、幸い外界と断絶した霊墓アルビオンはもとより世界の干渉力が低い。あなたの術式は十分利用できると考えます」

どろり、と出てきたのは、大きな瓶詰めであった。

内側には、傷ついた脳に神経、そして眼球が付属していた。

封印指定の魔術師をこのように保存する……ということは、魔術師でも知っている者は限られる。まず脳と神経、魔術回路を抜き出して、保存液に漬け込む。残った付属物についてはそのとき次第だが、この瓶そのものがかつての肉体、あるいは今の外骨格として機能するのであった。

本来、封印指定執行局にあるべきその魔術師を引き出すため、ハートレスがかけたコストはこの十年でも最大といえた。

「.....さて」

止まった懐中時計を、近くに配置する。

術式と連動した時計であった。永久パーペチュアルカレンダーを 仕込んだ精密時計は数百年の単位で、時間を計測してくれる。これ もまた、今回の術式には欠かせない道具のひとつだった。

「私を殺してくれるのだろう、と言いましたね」

ハートレスは、目の前の相手に呼びかける。

「だけど、それを叶えられるかは分からない。ここに来て私も無防備。君も無防備。最後に来て、ひどい賭けだと思いますか?」

『まったくだよ』

声ではなかった。

フェイカーが動かした唇を、ハートレスが読んだのだ。

彼女は、すでにこの場においての任務を終えてくれていた。ハートレスの計画にとって、欠くべからざるピースを担ってくれたのだ。

困ったように笑って、ハートレスは彼女にうなずいた。

「後は、間に合うかどうか」

胸のあたりを撫でた。

心臓ハートの、上を。

「君の願いが、叶うかどうか」

歌うように、寿ことほぐように、ハートレスは囁く。

「僕の願いが、叶うかどうか」

囁きは、部屋に揺よう曳えいする。

その視線の先で、フェイカーが光の柱に吞み込まれているのだった。死せる竜の魔術回路とつながったその光の中で、幾多の苛烈な戦場を駆け抜けたマケドニアの女戦士は、優しく微睡んでいるように見えた。

「おやすみ、フェイカー」

『おやすみ、ハートレス』

可憐な唇が、答えた。

ハートレス彼にだけ届く、言葉が。

そして、彼女を神とするまでの時計が、回りだす。

*

長く、長く落ちていく。

虚空は虚空と連鎖し、ただひたすらに、無意味な時間だけを連ね ていく。

切り立った壁面を除けば、視界はほぼ漆黒。

肌に触れる冷たい風と、その風を切り裂く音以外は絶えた──いいや、それさえもとっくに曖昧だ。それなのに落下しつづける感覚だけははっきりと肉体に刻み込み続けられ、延々と恐怖を喚起し続けられる。常人ならばものの数分と持たず、正気を失うだろう。

もちろん、これはおかしい。

いくらアルビオンが現実との座標になく、大魔術回路が地下何十 キロもの深層を保持しているとはいえ、これほどに長く落下し続け られるものだろうか。肉体感覚からすれば、すでに数時間は落下し 続けている。

大地と激突しないよう、その間常に視覚を『強化』し続け、イカロスの礼装で着地できる範囲内に落下速度を抑えているとはいえ、ここまでの長時間落下し続けているのはありえない。

Г......

自分がかろうじて耐えられているのは、墓守としての訓練と、ごく短いものの時計塔で受けた鍛錬のためだった。

もちろん、ルヴィアや清玄、フリューは問題ないらしい。師匠にしても、こうした科目ならば、魔術の腕とは直接関係ないため、不自由なく闇を落下し続けている。

大部分はただ墜落するばかりだ。

しかし、虚無の穴ナル・ピットは唐突に何度も曲がりくねり、時には狭きょう隘あいに窄すぼまって、自分たちの進路を妨害した。この場合は進路より落路とでも言ったほうがいいのだろうか。そのたび滑空礼装は細やかな制御を要求され、こちらの神経を容赦なく抉ってくる。

疲弊するこちらの横顔を見咎めてか、

「無駄に力をいれるな」

と、師匠から、何度めかのアドバイスをもらった。

「脳を使わず、状況と神経をほぼ自動化するんだ。魔術回路にそのあたりの計算を委ねてしまうのが一番早いが、君はそこまで魔術に親しんではいないだろう。なら、緊張せずにアッドと直感に委ねてしまったほうが早い」

「アッドに、ですか」

「イッヒヒヒヒ! 俺には疲れるとかそういう機能はないからな!」

右肩で、アッドがうるさく喚く。

だけど、今回ばかりはその言葉を素直に受け取っておく。ここまでアルビオンを踏破してきた疲れは、確実に自分の体を蝕んでいる。黙ってはいるものの、ルヴィアや清玄、フリューも同じだろう。

たとえ魔術回路によって滑空を自動制御できたとしても、この冷気は容赦なく体力を奪っていく。霊墓アルビオン特有の異様な魔力に晒され続けるのだから、なおさらだ。もちろん魔術によって体熱などの保護は可能だろうが、魔力の消費を最低限にすることを皆選

んだのであった。

「......そもそも、ここでまともに時間が流れているかは怪しいがな」

師匠の言葉に、ふと夢でサー・ケイが言っていたことを思い出した。時間も空間もここじゃ曖昧らしい、と。

しかし、それでもなお、今の自分たちは冠位決議グランド・ロールに間に合わせなければならない。

そこで、不意に声が途切れた。

「師匠?」

「.....あ、いや」

と、滑空中の師匠がかぶりを振った。

「ひょっとしたら、と思ったんだ」

「何が、ですか」

「ひとつだけ、これまではまらなかったピースが、今はまったような気がした」

言葉の意味は、自分には理解しきれない。

それでもいい、と思った。必ずしも、この人の真実を自分が共有できる必要はない。ただ、その結果生じた目的に、少しでも助けになれればいい、と思う。

ドクター・ハートレス。

彼の弟子が語ってくれた過去や、その来歴は、どこかしら師匠の 印象とだぶる。

単に現ノ代ー魔リ術ッ科ジの学部長であったからというだけではなく、もっと根本的なところで──たとえば、魔術師としてはあまり相応しからざる心性と思えるのに、その行動を見ていると、時折異様なまでの魔術師らしさを覗かせるところなど、どうしてもふたりを結び付けずにいられなかった。

そんなハートレスを、師匠は食い止められるのか。

いや、たとえ食い止められずとも、ハートレスと出会うことで、 師匠の中の苦悩と葛藤にひとつの解決が訪れるなら、と願った。 きっと、この霊墓アルビオンでの冒険も、そのためだけにあるのだ から。

もうしばらく落下していったところで、

「……空気が、変わりましたわね」

と、ルヴィアが口にした。

彼女に追随している、五つの煌めく宝石へと手を伸ばす。

「宝石たちが教えてくれます。ここから先は、霊墓アルビオンでも 新たな領域ですわ」

いまだ猛烈な勢いで落下しながら、美しい瞳を闇の底へ向ける。

「じゃあ、もうすぐ古き心臓―」

自分たちの、目標地点。

ハートレスが儀式を行うはずの、霊墓アルビオンの奥底。

そのとき、師匠が低く呻いたのだ。

「......間に合わなかったか」

声に滲んだ苦悩に、フリューが振り返った。

「どうしたんだ?」

「いま、ライネスと経パ路スがつながった。くそ、予定より数時間 は早いぞ。最悪の展開だ」

その言葉に、ほんの一瞬、愕然と魔術師たちは硬直した。

ルヴィアが、口を開いた。

「時計塔が、古き心臓の堰を開きましたのね」

「それは―」

言いながら、しかし自分も気づいていた。

この霊墓アルビオンには、外部からの魔術が通らない。とりわけ 深奥たる古き心臓は強固に閉鎖されていて、外部からのあらゆる干 渉をはねつけると、師匠から聞かされてもいた。その例外は、かの 時計塔の会議を開くため、古き心臓の堰を開くときだけなのだと。

つまり―

「一冠位決議グランド・ロールが、始まる」

重い声で、逆しまの師匠が呟いた。

採掘都市から、もう一度裂け目ポータルを抜けると、私の心臓は 大いに高鳴った。

もちろん、ついに会議を迎えたから、なんて勇ましい理由ではない。

(.....都市シティもひどかったが、こいつは別格だな)

肌が痺れるどころか、骨まで軋む。

空気のせいだ。

より正確には、空気に含まれた奇怪な『圧』のせいだった。

いかなる科学の検知器をもってしても、その『圧』の正体は分析できぬだろう。しかし、実際に人間をいれてみれば、坑道のカナリアよろしく、すぐさま衰弱して異常を教えてくれるはずだ。

私にしたところで、気を抜けば押しつぶされてしまいそうだった。現代の人間にとって、神代の魔力──真エーテルは毒だというが、ここの魔力はそれに近い。魔力に過剰反応する私の魔眼は、早くもズキズキと痛みを訴えていた。

単に、古いだけではない。

ここにあるのは、人理版図テクスチャによる影響をほぼ受けず、 神代のままに拡張されてきた、もうひとつの歴史だ。もしも人類が 神と断絶しなかったのならば、このようなカタチもありえたかもし れぬという、もうひとつの可能性だ。

三大魔術協会において、時計塔が誇る、偉大なる資産。

霊墓アルビオン。

その中核たる、古き心臓がここだった。

(心臓、ね)

実際に、このエリアがそんなカタチをしているのかは分からない。

古代の竜が地中で亡くなり、やがてこの霊墓アルビオンと成った際、もともとの体軀よりも遥かに巨大な体積となったことは間違いないが、ごく一部であるはずのこの区域だけでも、一体どれだけの広さがあるものか。

周囲の材質も、いまだ正体不明のはずだった。

ただ黒い。金属とも、はたまた有機物とも判別のつかぬ、滑らかな質感である。壁も床もそうした何かでできあがっていた。

そこまで、確認したときだった。

私の魔術回路に、微細な刺激が伝わったのだ。

(一ライネス)

(─おいおい兄よ。まさか、本当に間に合ったのか)

思考が顔に出ないよう、細心の注意を払う。

正直、七割がたはここに至ることも無理だろうと、諦めていたのだ。

さきほど、この古き心臓への裂け目ポータルを開くため、時計塔は堰を開いた。

しかし、外部からの干渉をほぼ遮断する古き心臓においては、たとえ堰を開いたところで、魔術による通信距離が相当制限される。なのに、魔術については二流以下の兄の思念がこれだけクリアに届くということは、極めて近距離まで彼が辿り着いているからにほかならない。

(──残念ながら、間に合ったわけじゃない。どうやら、古き心臓までは辿り着いたが)

(─おっと、ぬか喜びか。もう分かってると思うが、会議は四時間 ほども前倒しだぞ)

(──想定はしていた。最大限の努力はする)

兄の思念に、苦悩と焦りが滲んでいた。

それはそうだろう。私だって、許されるなら、今すぐ家に引きこもりたい。この場合、許されるならというのは、後々首を毒入りの 真綿で絞められるような苦境を受け容れるなら、ということだ。

時計塔において、誰かの風下に立つと格付けされれば、どれだけ殴られ放題になるかなど、想像もしたくない。具体的には、ケイネスが死んでから、落ち着くまでのエルメロイ派──つまりはあの兄をエルメロイII世に封じる一年ほど前まで、私が味わっていた苦境そのものである。

(─ゲラフどのとは会ったか?)

(─ああ、あの老魔術使いからなら、確かに伝言を受け取った)

あの老人は、我が兄の言葉を伝えに来たのだった。

いっそこちらのお抱えにしたいと思うほどの鮮やかさで、実際ちょっとばかり口説いてみたのだが、残念ながらその誘いには乗ってくれなかった。

(一ライネス、後は)

(──はいはい。ハートレスを食い止められるまで、せいぜい冠位決議グランド・ロールの時間稼ぎをしろというんだろう? やるだけはやってみるさ)

一旦念話を打ち切って、裂け目ポータルから一本道の通路を、影 だけを友として私は歩いていく。

影が落ちるのは、もちろん光があるからだ。

(死せる竜の魔術回路か……)

なんでも大魔術回路ではもっと人体に近く、血管のように光の通り道が張り巡らされているそうだが、この場では螺旋状に光が渦巻いていた。

やがて、空間が開けた。

広い部屋だった。

円蓋ドーム状の天井には、さきほどの光が集っていた。

きっと、その光ゆえに、この場が選ばれたのだと確信させるほど、美しい連なりであった。光の流れは一様ではなく、局所ごとにより強い輝きを溢れ出させている。遥かな地底の暗闇で、ぽつぽつと灯るその輝きは、まるで新世界の星空のようだった。

中央には円卓が置かれているが、その材質も分からない。もちろん、地上から運び込んだわけでもないだろう。時計塔が開設されて以来、一体何度の会議を、天蓋の星空と円卓が見守ってきたものか。その会議の結果によって、一体どれほどの魔術師が悲運を嘆き、もしくは勝利の盃を掲げたことか。

すでに、参加者は揃っていた。

向かって左に、民主主義派の君主ロードが。

つまり。

イノライ・バリュエレータ・アトロホルム。

マグダネル・トランベリオ・エルロッド。

向かって右に、貴族主義派の君主ロードと、その代行が。

オルガマリー・アースミレイト・アニムスフィア。

ルフレウス・ヌァザレ・ユリフィス。

手前の席につくべき中立主義派は今回欠席だ。

ある意味で、その空白さえも恐ろしい。冠位決議グランド・ロールにおいて、欠席というのは無関心ということではなく、それもまたひとつの意思表明にほかならないからである。中立主義がごっそり抜けたということは、彼らはこの戦いにおいて勝ち馬に乗る気ま

んまんなわけだ。政治的なアドバンテージを取らず、研究優先の方針でほかの派閥に睨みを利かせようとする中立主義ならではの選択だろう。

もちろん、私は右につく。

仮に、オルガマリーの誘いに乗って、アルビオンの再開発に乗るとしても、私たちが貴族主義派であるという事実が変わるわけでもない。いや、そこまで鞍替えしようとしたら、命がいくつあっても足りないからね?

「準備が整ったようだ」

最初に、マグダネルがにこやかに口にした。

民主主義派のトップ、トランベリオ派の君主ロードはここに及んでも、主導権を手放さないつもりらしかった。

ついで、イノライが言う。

「いつも代わり映えのしない面子だが、今回は目新しくていいね。 魔術師といえども、このあたりの新陳代謝はある方がいい。…… もっとも、その論理でいうと、オレやルフレウスが最初に追い出さ れるわけだが」

追い出される気などカケラもないのに、ご冗談を、だ。

女傑という名が、これほどふさわしい者もほかにいまい。

ロード・バリュエレータ。もしくは、冠位魔術師・蒼崎橙子の 師。いずれの肩書にせよ、尋常な魔術師ではありえなかった。

「くだらん……」

と、一蹴したのは、この中でも最も皺深い老人だった。

その皺の一本ずつよりも、魂に刻まれた宿業はなお深いと、全員が知っている。降霊科ユリフィスの君主ロードという立場からすれば、実際魂にまで何らかの術式を刻んでいても、何の不思議もないだろう。

イノライとルフレウス。

もしくは、創造科バリュエと降霊科ユリフィスという家格からしても、いずれ劣らぬ当主であった。

そして、

「──父から天体科アニムスフィアの投票権を預かってまいりました。皆様にはご無礼なきようと承っております」

オルガマリーがそつなく一礼する。

くそ、こういうあたりは年上の私よりうまいな。というか、最年 少という立場を奪われた分、私が不利になってる気もするぞ。

君主ロードたちの視線が、一斉にこちらを向く。

これだから残り物は嫌だ。適当にいなすにも、ちょいと気の利いたことを言うにも目立ちすぎる。

ひとつ、息をつく。

「未熟者なりに、末席に加えさせていただきます。どうぞよろし く」

短くまとめて、精一杯好意的に口角をあげながら、私も席についた。

ああ、胃が痛い。こんなものは我が兄にだけ与えておきたいというのに、世の中はままならない。血は冷たくて、神経は鑢やすりにかけられているよう。胸の痛みが緊張のせいなのか、誰かに呪われているせいなのかも分からない。

ただ、唾とともに、恐怖を飲み込む。

魔術回路を通じて、強引に脳を賦活する。

「では、冠位決議グランド・ロールを始めよう」

堂々と、マグダネルが言い放った。

正直に言って、この時点の私の戦略はひどいものだった。おそらくトランベリオが出してくるだろうアルビオンの採掘データについて、ぐだぐだ正確性で因縁をつけて、可能な限り引き延ばすというだけだ。

ひたすら遅滞に次ぐ遅滞、クレームに次ぐクレーム。ちょっとで も粘れるところがあれば、どんなにみっともなかろうが粘り倒す。 いざとなれば座り込みも辞さないぞ、という構えであった。

しかし、

「ああ。実は、その前にひとり紹介したい」

太い首を動かして、マグダネルが呼びかけた。

部屋の闇に、褐色の肌の女が溶け込んでいたのである。誰か影にいるのは分かっていたが、その顔までは区別がついていなかった。

しかし、光の下に出てくれば、それは見覚えのある女ヒ性トの姿をとった。

「秘骸解剖局・資材部門の、アシェアラ・ミストラスと申します」

凛とした一礼とともに、女が名乗ったのだ。

小さく、私は呻かざるを得なかった。

ハートレスの、最後の弟子。

解剖局で、キャルグ・イスレッド―いや兄弟のジョレクだったかもしれない―が殺された後、行方の知れなくなっていた相手と、よもや冠位決議グランド・ロールで再会するとは。

「今回の議題。霊墓アルビオンの再開発の是非については、皆さん すでにご存じだろう」

無骨な指を組み合わせて、マグダネルが言う。

「秘骸解剖局の意見は欠かせないはずだからね。証人として呼んで おいた。ああ、そうそう、後で誤解を招かないように、今言ってお くが、彼女は僕の養女でね」

「な.....っ!」

オルガマリーが、声を詰まらせる。

私にとっても、それは初耳の情報であった。秘骸解剖局の重要部門に、マグダネルの養女がついていた?

(一おいおい、兄上。これは)

(─ああ。まるで、話が変わってくる。マグダネル氏が十人以上の娘を持っていることは聞いていたが)

兄との思念のやりとりでも、互いの焦燥は滲んでしまっていた。

「はは。だからといって、解剖局が僕だけに有利なデータを出して くれるわけもないが、後で話してややこしくなってもなんだろ う?」

鷹揚に笑ったマグダネルだが、到底追従する気にはなれなかった。

(.....やられた)

主導権を取るどころの話じゃない。

初撃で、そのままトランベリオは終わらせるつもりだ。オルガマリーが貴族主義べったりでない以上、そこを突き崩せばあっさりこの会議は決着する。

むしろ、私が生き残るためにはここで媚を売ってしまう方がいい のか。

ちら、とルフレウスの様子を窺う。

枯れ木のごとき老人の指は、はたして肘掛けを強く握りしめていた。これはこれで大変まずい。しれっと私が裏切れば、この場で噴火して、会議の何もかもを無視して殺しにきかねない。そこで命を賭けて守ってくれるだろうと思うほど、マグダネルが信用できるはずもない。

まして、マグダネルがハートレスの共犯者だった場合はどうなるか......

「議題は、霊墓アルビオンの再開発と聞いていますが」

オルガマリーが、顔を上げた。

彼女なりに、危機感を覚えたのだろう。たとえ私に持ちかけたように、ルフレウスを裏切って再開発に賛成するとしても、最初からおもねるわけにはいくまい。

にこやかに笑みを浮かべ、トランベリオが言う。

「もちろんだとも。いいかな、アシェアラ」

「ええ、お父さん。――いえ、ロード・トランベリオ」

促されたアシェアラが、何枚かの紙を私たちの前に置いていく。 秘骸解剖局からの証人と言いつつ、この扱いは秘書さながらだ。も ちろん、自分たちはそういう関係なんだぞとアピールするためだろ う。お父さんと言ってしまってから、直したあたりも実にわざとら しい。

「ロード・バリュエレータ──ミズ・イノライからも、霊墓アルビオンの細かい資料を要求されていましたからね。用意してもらいましたよ?」

「ああ。ご苦労だね。マグダネル坊や」

片手で資料を持ち上げ、イノライが片目をつむる。

それから、こちらが資料を読み終わるまでの間をおいて、マグダネルがゆっくりとこちらを見やった。ルフレウスにやや長く、オルガマリーと私にやや短く。年齢差を考えれば、この時間差は敬意の比重として適切だろう。くそ、立ち振る舞いまで隙がないな。

「現代的なコピー用紙だが、これは秘骸解剖局の流儀だから勘弁してほしい」

前置きしつつ、マグダネルが言う。

「資料のように、アルビオンから採掘できる呪体は昨今減少の一途

を辿っている。時計塔を維持するならば、ここが決断すべき場所 だ。このままでは神秘の減衰と合わせて、僕たちが魔術師たる目的 を達成する可能性も下落する一方だろう」

我々が魔術師たる目的。存在証明。

過去へと走り続ける我々が、いつか辿りつかんとするその究極。 根源の渦。

だが、いまマグダネルが言う。

「つまり、このままでは僕たちの意義が失われるということだよ」 その言葉は、あまりにも重かった。

仮にも時計塔の重鎮たるロード・トランベリオの口から投げかけられた以上、ゆえなき言葉ではないと、誰もが納得させられたからだ。

これに対抗するならば......やはりロード・ユリフィスたるルフレウス翁をおいて、他にあるまい。

もとより、再開発反対の核となっているのは、この老人だ。

ぎょろり、と汚れたガラスのごとき瞳が壮漢を映した。

「時計塔の維持と……言うたか……」

嗄れた声が、マグダネルを引っかいた。

「そもそも……おぬしらが維持すべき時計塔とはなんだ……」

「魔術師の未来と考えます」

「......はっ......馬鹿馬鹿しい......」

マグダネルの返答に、ルフレウス翁は落胆を隠さず、こう言い 放った。

「よいか……時計塔とは……我らのことさ……」

節くれだった指を胸の宝石の上において、黄色い歯を剝き出しに する。 高慢ではあったが、横柄とは感じられなかった。至極当然に、昔からのならわしを講義するような口ぶりであった。

「呪体が足りぬというならば……新世代ニューエイジどもを削れば良い。……それでも足りぬなら……くだらぬ分家を削れ……。さらに人も魔も注ぎ込み……アルビオンを再開発する必要などどこにある……。神秘に近づくのは……我らだけで十分……。ああ、いつのまに……くだらぬ大量消費の理屈に……時計塔までを巻き込んだ……。そんな愚かしいものを……我ら時計塔などと……間違えても呼ぶでないわ……」

ぞくり、とする。

これが貴族主義の論理だ。

あたかも備品のひとつのように、あまりにも安易に他人の人生を 取り扱う。

しかし、それが間違っているわけではない。

そもそも民主主義だって、選民を行っていることに変わりはない のだ。魔術師である以上、現代ではごくごく限られた変異種に過ぎ ぬ。民主主義が新世代ニューエイジを抱き込んだのは単に労働力が 足りなくなって、その基準を妥協したに過ぎない。

だったら、それを貫いた方が筋が通ると、老人は話しているの だ。

「よいか……魔術師の未来と言うならば……」

さらに、老人が続けようとしたときだった。

ر ه.....

と、その視線が動いた。

瞳から、驚愕や動揺といった感情は窺えなかった。それでも、さ すがにこの事態は、いかなロード・トランベリオといえど、あるい はロード・ユリフィスといえど予想不可能だったろう。

「どういう……ことかな……?」

嗄れた声は、マグダネルから、入り口に向けられた。

すぐに、異変は訪れた。

「失礼いたします」

新たな人影が姿を現したのだ。

あでやかな振袖のたもとを押さえつつ、すうと眼鏡の位置を直した女は、もちろん自分たちが知る相手だった。長い黒髪もあいまって、やはり彼女の印象は美しい蛇に似る。音もなく時計塔を巡り、冷たい瞳で監視する蛇。

「化野菱理、だったな?」

意外なことに、その名を呼んだのはイノライだった。

「ご無沙汰しております。イノライ様」

「法政科のおでましとは思わなかったが、まさか、バルトメロイの 君主ロード代理というわけではないだろう?」

「このたびは、案内を承りまして」

「案内?」

眉を寄せた老女の唇が、続く一瞬で苦笑を滲ませたのだ。

「なるほど。こうなったか」

菱理の背後を見てのことだった。

もうひとりの人影が、そこに佇んでいた。時計塔の君主ロードたちが集うこの場に、ひどく不似合いなようで、しかし冠位決議グランド・ロールという名からすれば、こうなることが最初から決まっていたようにも思えた。

「先生もいらっしゃいましたか。──どうやら、まだ始まったところ のようで」

菱理に案内されてきた東洋人の女が、小さくひとつうなずいた。

「始まったところだと思いましたが、ひょっとして違いましたか」 もう一度、女が言うと、歯ぎしりの音がした。

錆びた鉄を擦りあわせるような音だった。

「……蒼崎……橙子」

憎々しげに呟いたのは、ルフレウスであった。

過去に恨みを買ったことでもあるのかもしれない。この冠位魔術師は他人の怒りや妬みを引き寄せることについても、その称号に値しそうだ。

「……お前のような卑俗の輩が……立ち入る場ではない……」

「ご挨拶ですね。降霊科ユリフィスのご老体」

眼鏡を外してから、橙子は片目をつむる。ほんのかすかに、その 笑みの質が変わった。

「だけど、今回に限っては私は正式に参加する資格があってね。ご 老体にはさぞ居心地悪かろうが、これも伝統の結果だ。ご勘弁願い たい」



「……資格……だと、何をふざけた……」

そこで、老人の言葉は止まった。

ひらひらと、古びた羊皮紙を橙子がつまんでいたのである。その 表面に書かれた名前まで、老人が一瞥で読み取れていたかどうか。

「どうやら、お分かりいただけたようだ。つまり、私は君主ロード の代理なんですよ」

「本物であることは、法政科の名において私が保証いたします」

と、菱理が請け合った。

しん、と沈黙が張り詰めた。

単なる驚愕ではなく、もっと重い意味のこもった沈黙であった。 ありえないのではなく、ありえる。ありえるからこそ、恐ろしい。 この冠位人形師なら、と皆が認めたのである。

「相変わらず、妙なところから依頼を受けるな」

と、イノライが片眉をあげた。

「先生の薫陶がよろしかったですから」

と、橙子は受けた。

このふたりは、確か学生時代からの師弟関係だったはずだ。ただし、橙子の名が封印指定にあがったとき、真っ先にイノライが首肯するほど、魔術師らしい関係である。

ルフレウスが、煮えたぎる釜のように唸った。

「……どこの……家……からだ……?」

「呪詛科ジグマリエ……というより中立主義を代表して、ですね」 小さくうなずいて、橙子が言う。

「この冠位決議グランド・ロール、私も正式な投票権を持って参加というわけです。ああ、安心してほしい。中立主義の残りの投票権

を持ってたりはしないとも。持っていたところで、あなたたちも認めてくれないだろうが」

悠々と、近くの椅子のひとつに、橙子が座る。

本来十二家の君主ロードのためにつくられた円卓の椅子は、冠位魔術師も区別なく迎え入れた。

それを見やって、

(.....レディ、まさか)

と、密やかに我が兄の思念が問いかけた。

(もちろん、やってやったさ)

小気味よさを抑えつつ、私も返した。

(なにしろ、私たちはドクター・ハートレスの共犯者を炙あぶりださなきゃいけないんだ。確実にハートレスの息がかかってない不確定要素が必要だろう?)

スラーで別れる前に、橙子──というよりも、橙子に裏で依頼していた中立主義派をけしかけていたのである。

無論、スラーの地下で、ハートレスたちが突入した霊墓アルビオンへの裂け目ポータルのことを含ませて、だ。一度は傍観を選んだ中立主義だが、そんな想定外の事件まで起こっているとなれば、完全に無視するのは難しい。だからこそ、普段は政争に巻き込まれるのを忌避する中立主義のお偉方も、私の挑発に乗ってこざるを得なかった。

もっとも、そこで本当に蒼崎橙子を冠位決議グランド・ロールの 代理人に仕立て上げるとは、あまり私も思っていなかったのだけ ど。

我が兄の思念は、少しの間息を止めてから、こう返す。

(.....だったら、いつから、ミス蒼崎にハートレスの弟子捜索を依頼したのが中立主義だと知ってた?)

(半分は勘だよ)

正直に、私は打ち明けた。

見栄を張りたいところだが、この場面向きではない。

単純な話で、彼女の思想からして貴族主義は最初から排除していた。たとえば法政科がまた彼女を封印指定にしないよう再度依頼しているなどはありえるが、これまでの橙子の性質から唯い々い諾だく々だくと従うというのが考えにくい。

ついで民主主義だが、橙子を使ってるとなれば、マグダネルにせよイノライにせよ、もう少し隠しておくだろう。うっかり私たちと接触して情報が漏れる可能性は避けたいはずだ。放置しておくには、私たちとの利害関係が密にすぎるのだ。

ゆえに、消去法で中立主義と見た。

冠位決議グランド・ロールに直接関わる気はなくても、彼らだって情報は欲しいはずだ。ドクター・ハートレスに対して、すでに双貌塔で間接的に接触のあった蒼崎橙子に白羽の矢がたったのは、当然のなりゆきでもあっただろう。

(.....もっとも)

と、思う。

(まさか、化野菱理を連れてくるとは思ってなかったが)

法政科の女魔術師は、橙子の後ろで、静かに微笑していた。

そうしていると、ロード・トランベリオの後ろに控えている、ドクター・ハートレス最後の弟子──アシェアラと似通う立ち位置だった。普段は表には出てこず、しかし必殺の一撃を隠し持つ、そんなポジションだ。

۲.....

低い音が、聞こえた気がした。

場のバランスがぎしりと軋む、音なき音だった。

権力としては、蒼崎橙子など時計塔において塵にも等しい。もとより風来坊のフリーランスだ。複雑に絡み合った時計塔の権力抗争

で、まともな後ろ盾をもたない橙子の言葉など、一切聞くに値しない。

しかし同時に、純粋な魔術師としては、時計塔においてさえ瞠目に値する相手なのだ。なにしろ冠位グランド。この場に座る資格を持つほとんどの君主ロードたちでさえ、単純な位階としてはこれに劣る色位までしか到達していない。

霊墓アルビオンの再開発において、貴族主義も民主主義も、魔術師が神秘へ近づく手段を確保するためだと説く以上、彼女の意見を完全に無視することは難しくなったのである。

(.....前提潰しというやつだ)

政治的な論争の上では基本。しかし、冠位決議グランド・ロールという場で、こうも嵌まったことはそうあるまい。

はたして、彼女を迎えた会議はどんな風に転換するのか。

そう考えている間に、マグダネルが促す。

「……では、ルフレウス翁。さきほどの話の続きを」

「ああ、ああ。そういう眠いのはもういいよ」

と、白い手を振って、いきなり橙子が制止したのだ。

「何ですって!」

眦まなじりを決したオルガマリーに、橙子は軽く肩をすくめる。

「どうせ、いつもの貴族主義と民主主義のやりあいだろ? 新世代ニューエイジを含めて時計塔とみなしつつ拡大路線を維持するか、いっそ時計塔自体を縮小してしみったれた延命路線を目指すかだ。そんなの最後は趣味になるんだから、私としてはもっと別の視点を聞いておきたいね。 一ああ、せっかくここに着いたんだ。そろそろ用意ができてるんだろう、エルメロイ?」

最後に、いきなりこちらへと水を向けた。

思わず吹き出しそうになるのを堪えながら、

「何のことですか」

私が訊き返すと、橙子はくすりと笑った。

死せる竜の魔術回路からこぼれた光が、その唇を淡く彩った。

「とぼけるなよ。だってこれは事件だ。ここに来て、まだ目に嚙みつく意志が残ってるってことは、お前たちにはひとつの結末が見えているってことだろう?」

(一おい、兄上)

(一分かってる)

私の思念に、兄は隠しきれぬ焦りとともに応えた。

(──あいつはこう言ってるんだ。この冠位決議グランド・ロールで、推理ショーをやれって)

それは、なんという傲慢か。

仮にも時計塔の運命を決めようという冠位決議グランド・ロール を、己の愉しみのために引っくり返せと、彼女は暗に告げているの だった。

同時に、納得もさせられた。

たかが政治劇などに、蒼崎橙子は何の興味もない。

二千年を総括する魔術世界の趨勢ですら、彼女の関心を引くには 至らない。

ここにやってきたのは、中立主義派によって君主ロードの代行を 委ねられたからではなく、自らの関わった事件の結末を見届けるた めなのだと。

(─ それに、気づいてるか。お前たちと言ったぞ)

(私と兄が念話でつながってることも、当然ご承知というわけだな)

隠し通せると思っていたわけではないが、あまりに当たり前に一瞥で看破されてしまうと、居心地が悪い。

さすがは蒼崎橙子。

ジョーカーにもほどがある。けして都合よく利用されてくれるような相手じゃない。というか、このままルフレウス翁を爆発させたら、同じ貴族主義だろうがおかまいなしに、全力で取り潰されかねない。

(──じゃあ、前のときみたいに、トリムマウの一部を使って兄の身体うつわをつくるか)

目立たないようにしているが、運んできたトランクの中にトリムマウは入っている。探偵としての兄に出てもらって、推理を開陳してもらうしかあるまい。

そう考えたところで、

(一駄目だ)

と、兄は否定した。

(──それでは、説得力を保持できない。仮にも冠位決議グランド・ロールだ。この場に出席しているという形式抜きにどんな推理を並べたところで、ほかの君主ロードどもが納得するものか)

確かに、理屈ではある。

そもそも、冠位決議グランド・ロールをこんな地の底で行うの だって、投票までにそれだけの過程を経ることによって、全員が納 得するだけの権威を保つためだ。

かつてこの場で、大魔術儀式がいくつも行われたというが、たとえ実際に魔術を行使せずとも、繰り返されてきた大掛かりな行為にはそれだけで呪的な意味がこもるのだ。たとえば、教皇を選出するコンクラーベでは、次代の教皇が決定するまで、何日もシスティーナ礼拝堂に候補者全員が閉じ込められていたという。枢機卿たちには体力の落ちた高齢者が多いことを考えれば、これもまた命がけの選挙だろう。

権威と伝統とは、それ自体が人を縛る術式であった。

(─おいおい。じゃあ、どうしろというんだ)

(一お前がやれ)

兄の言葉に、一瞬思考が固まった。

「.....っは」

一瞬、大きな声がこぼれそうになって、やっと抑える。おいお い、こんな場で、何を言いだすんだ我が兄。

(─お前がやるんだ、ライネス)

もう一度、兄の思念が言った。

(─ふざけてる、わけじゃないな。兄上)

(もちろんだとも)

「どうした? エルメロイ」

橙子が楽しそうに、再度呼びかけた。

くそ、たった今、こっちがとんでもない提案を押し付けられていることまで、見抜いているんじゃあるまいな。

「いいえ。どう話を切り出したものか、悩んでまして」

無理にでも胸を張って、前を見据える。

もちろん、百パーセント混じり気なしのハッタリだ。 虚勢しか使 えないなんて綱渡りは、幼少期で卒業してしまいたかったが。

兄の思念が、続けて言う。

(─私からの推理は順番に伝える。お前の言葉で整理しながら喋れ)

(─無茶苦茶言うな、我が兄?!)

たったいま頭を抱えて、叫びたかった。周囲が全員、私の隙を 窺って、舌なめずりしている場でなければ、きっとそうしていただ ろう。

だいたい、この場の全員が探偵の推理を大人しく聞いているだけ

なんてありえない。推理結果をそれぞれの有利につなげるべく、常に干渉し続けてくるはずだ。ハートレスの起こした弟子の失踪事件が、冠位決議グランド・ロールに関わっているとしても、冠位決議グランド・ロールはその犯人を突き止めるための場ではないからだ。

つまり、全員とは言わぬまでも、会議の過半数の興味は常に煽り つづけねばならぬ。

それも、兄の推理によって、犯人を追い詰めるだけの論理構造を 維持しつつだ。こんなもの、地上の観客を喜ばせるように曲芸飛行 をしながら、敵の戦闘機を追い詰めて撃墜しろっていうようなもの だぞ。

ため息を我慢しながら、思念を返す。

(一兄よ、そっちはハートレスを追い詰められるか)

(──可能な限りは急ぐ)

(─頼みたくはないが頼むぞ。最大限うまくやって、ハートレスの 共犯者を炙り出したところで、肝心のハートレスを追い詰めてなければ、意味がないからな)

共犯者を炙り出した結果、開き直られて、時計塔全体でハートレスを支援しましょうとか持っていかれる可能性だってあるのだ。結局のところ、ハートレスを止める目処がつかなければ、話の持っていきようがない。

私たちにとって、この冠位決議グランド・ロールは逃げられなかった『過程』であり、ハートレスの阻止こそが『目的』なのだから。

二度ほど、拳を握ったり開いたりしてから、覚悟を決める。

「ええ、ここから始めるのがいいでしょうね」

と、なるべくゆっくり私は切り出した。

ひとりずつ視線を巡らせながら、言葉を続ける。

「皆さま、現ノ代ー魔リ術ッ科ジにおいて、以前の学部長であった

ドクター・ハートレスはご存じですか?」

「.....残念ながら、私は名前しか存じ上げないわね。物心付いたころには、すでに時計塔を離れていたもの」

オルガマリーがかすかに眉を寄せる。

ここで、その名前があがった理由が分からないのだろう。まあ、 その表情が真実か演技かはともかくとして。

兄からの思念をふまえて、慎重に言葉を選択する。

「ここ数ヶ月で、かの元学部長ハートレスの弟子が、次々に失踪していました。ええ、もちろんアシェアラさんはご存じでしょう。その内のひとり──あなたの同僚であるキャルグ・イスレッドは、秘骸解剖局内で殺されましたからね。殺人現場については、そこの化野菱理さんが検証されてます」

「確かに、検証いたしました」

菱理が肯定する。

この美女も目的が不明だ。ハートレスとは、同じノーリッジの養子だったそうだが、そのよしみで追っているのだろうか。

ともあれ、こちらの話を全員が咀嚼するだけの間をおきつつ、続ける。

「私は、この犯人をドクター・ハートレスであると考えています」

「.....おや、あいつが」

と、こぼしたのは老女イノライであった。

「何か?」

「いや、意外な気持ちがしただけさ。彼はずいぶん弟子たちと親密 だったように思っていたからね」

肩をすくめて、イノライが述懐する。

これまた厄介な証言だ。十年前の、元学部長としてのハートレスを、私はほとんど知らない。なにしろ、当時の私はエルメロイの後

継者になるなんて、夢にも思ってなかったわけだから。

「そういえば、あなたは以前の現代魔術科とそれなりの親交があったな」

言ってから、マグダネルがもうひとりの君主ロードへ問いかける。

「ルフレウスどのはいかがでしたか」

「……君主ロードですらない学部長に……時間を使って何の意味がある……」

老人の答えはきっぱりしたものだ。何十年どころか、百年前から、その頑迷さは一度として変わらなかったように思える。

当時の現代魔術科は貴族主義ですらなかったわけで、ルフレウスが接触する意味など皆無だったろう。

「ああ……できそこないの新世代ニューエイジが師弟で殺し合おうが……知ったものか。そんな関係のないことで……この場の時間を奪うつもりか、エルメロイ……」

「いいえご老体。関係はありますよ」

さも分かってますともという顔で、私はうなずいた。ああくそ、今更兄の気持ちを痛感したが、こんなものは犬に食わせたい。他人の気持ちなど踏みにじる側でいたいのであって、共感したいわけじゃないんだ。

さあ。

なるようになれ。

「この冠位決議グランド・ロールの中に、ハートレスの共犯者がいるからですよ」

ハッタリの笑みを必死に維持しながら、私は言い切ったのであった。

「おい、冠位決議グランド・ロールはどうなってんだ?」

虚無の穴ナル・ピットを落ちながら、フリューが訊く。

師匠に答える余裕はなかった。

会議がどのように進行しているかは分からないが、その眉間の皺がますます深くなったところを見れば、けして順風満帆ではないということだけは明らかだ。

すると、同じく滑空している清玄が距離を寄せて、尋ねたのだ。

「エルメロイII世。あんさんの魔術回路に接続してもええか?」

「かまわん」

師匠がうなずくと、清玄がふるりと人差し指を振った。

すると、その指先に、羽に似たカタチが浮かび上がった。ついで、ふわりと師匠と清玄の間へと割り込んだ羽の表面に、魔術回路に似た輝きが灯る。

途端、会議の状況がすうっと染み渡るように、こちらの脳へ届いたのである。

「一っ、今のは?」

「情報共有用の、アッシュボーンの魔術や。剝離城アドラの天使魔術……この場合、魔力の使い方ぐらいのもんやけど、アッシュボーンの魔術特性は結局のところ共有というところに行き着くからな」

なんとなく、分かった。

剝離城アドラの魔術師は、魔術刻印の免疫問題を克服することによって、複数の魔術刻印を融合せしめる技術に至っていた。清玄の人格が魔術刻印に乗っ取られたことから、自分はこの技術に侵食や侵略といったイメージを抱いていたが、その魔術の本質は、今彼が口にしたような『共有』だったのだろう。

「あそこの魔術は、わいの内側でまだ息づいてるからな」

寂しそうな清玄の声音だが、しかし当人も自分たちも、師匠と共有した情報量に圧倒されていた。

「……まさか、冠位決議グランド・ロールに、蒼崎橙子と化野菱理とはよ」

フリューが呻く。

自分も、驚愕を飲み込むので精一杯だった。

冠位決議グランド・ロールは一筋縄でいくまいとは思っていたが、よもや参加者からしてこんなハプニングが起きるとは、まったく想像していなかったからだ。

時計塔の運営を決定する冠位決議グランド・ロールに、自分が知る中でも最も孤高の名にふさわしい蒼崎橙子が現れるとは。そのミスマッチぶりと、しかしどこか納得せざるを得ない組み合わせに、肌が粟立つほどの恐怖を感じていた。

「皆様」

と、ルヴィアが呼びかけたのだ。

彼女の表情には、別の種類の緊張が漲みなぎっていた。

ひょっとすると、この中で彼女だけは今回の展開も予想していたのかもしれなかった。あるいは、冠位決議グランド・ロールなどという極限の状況では、少々の予想なんか簡単に覆されるものだと、身にしみていたのかもしれない。

彼女を取り巻く五つの宝石に反応があったのだと、少し遅れて気づいた。

「こちらも、正念場かもしれませんわ」

刹那、フリューが動いたのだ。

「Lead導き me!たまえ」

投げ放たれたナイフは、けして敵を穿つためのものではなかった。

おそらく、占星術師としてのフリューが、最も安全な未来を占ったものだろう。その意図を理解した全員が、ナイフで示された通りの方向へと咄嗟に軌道をずらし、だからこそ致命傷を免れた。

凄まじい衝撃が、身体を撃った。

まるで、黒い稲妻であった。

入念に張り巡らせていたはずの防御魔術など紙よりもたやすく破り、虚無の穴ナル・ピットの底から上空へ向かって、逆しまに空気が沸騰する。対象の纏っていた紫電が闇を焼き払い、その余波だけで自分たちを大きく吹き飛ばした。

精霊根による右手で顔を覆い、清玄が叫ぶ。

「フリューはん!」

「大丈夫だ……!」

焼けただれた右手を押さえて、フリューが呻いた。

右手に比して、礼装の被害が少ないのはそちらを庇ったものだろう。この場で滑空用の礼装が失われたならば、無残に墜落して絶命するよりほかにない。

穴の上空を振り仰ぎ、ルヴィアが叫ぶ。

「竜!」

それは、骨だけでできあがった竜であった。

いいや。

竜だけではない。

二頭の骨竜が率いる戦車にこそ、師匠は目を奪われていた。

まるで、その戦車に、かつては己も乗っていたのだと言わんばか

りに。

「神威のゴルディアス車輪・ホイール……いいや、魔天のヘカ ティック車輪・ホイール……」

それは、あの魔眼収集列車レール・ツェッペリンで対峙した、 フェイカーの操る宝具。

フェイカーの主たるイスカンダルも用い、時に彼女へ預けたという戦車。サーヴァントとして、その真しん名めいとともに誇らしく 掲げられる、貴いノウブル・幻想ファンタズム。

フリューが、舌打ちする。

「ああ、そうか。まったく同じ経路かはともかく、この虚無の穴ナル・ピットの存在を、ハートレスも知っていて使ってやがったわけか……!」

考慮しておくべきだったかもしれない。

ハートレスも、時計塔に設定された裂け目ポータルを使わずに古 き心臓へ向かっている以上、同じショートカットを使う可能性があ ると。そして、自分たちの追撃を予期していたのなら、何らかの罠 を張っておくかもしれないと。

ハートレスの罠は、ここに正しく発動した。

しかし。

もうひとつの事実にも、自分たちは気づいていた。

骨の竜ではなく戦車の方であった。さきほどの宝具の定義からすれば、ありえない欠落がそこには生じていた。

「誰も、乗っていない......」

二頭の竜を操るべき乗り手は、戦車に騎乗していなかったのであ る。

「フェイカーの、魔術か」

と、師匠が悔しそうに呟いた。

戦車と対峙したまま、いまだその事実が受け容れられないという ように。

「一宝具の、自動制御だ」

*

「堰が開いた……」

低く、ハートレスが呟いた。

片目を、手で塞いでいる。その甲に令呪が輝いていた。フェイカーとの契約によって生じた令呪であった。

サーヴァントに対する、たった三度の絶対命令権。

すでに、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンでの事件で、一画を 消費してしまっている。

「彼も来てしまった。ああうん、やっぱりそうなりましたね。この 予測が外れればいいと思っていたけれど。──いいや、彼が僕を分 かってくれたなら、こんなに心強いことはなかったのに」

手を離さぬまま、片目の視線をあげる。

光の筒の内側で、サーヴァントの再臨は進行している。

圧縮された時間は、すでに百年を過ぎていた。まだ足りない。まだまだ足りない。ひとつの英霊を神霊に至らせようとするならば、 そこに必要なのは何百年、何千年という信仰に至るほどの年月だ。

霊基虚影再臨。

そのように、彼は呼んでいた。

アーサー王の肉体と精神と魂を模倣して、過去のアーサー王本人 を再現しようとした、かの墓守の土地の応用編。死と再生を司る、 迷宮の通過儀礼イニシエーションを用い、その先へと押し進めた ハートレスだけの独自魔術。 単に、英霊の限界を引き出すのではなく、そのありえぬ影を引きずり出して、神霊としての器を与える術式。

もしも、魔術師のための神霊が確立できれば、今の時計塔の魔術師も、神代と同じ形式の魔術を使うことが可能となる。もちろん、ほかの条件が全て揃うわけではない以上、神代そのままとはいかないが、限りなくそれに近い魔術が復活するはずだ。

それが許せぬ者は存在するだろう。

だから、ハートレスも覚悟を決めていた。

「勝負しよう。エルメロイII世」

それから、

「フェイカー」

改めて、光の内側の女を見つめた。

殺されるために来た女。自分の王を神霊として再臨させるため、 ろくにハートレスの説明も聞かず、身を捧げることを選んだ女。

なんて、己に似つかわしい女であったろう。

「君のためにも、約束を守ろう」

連動した時計を、片目で見やる。

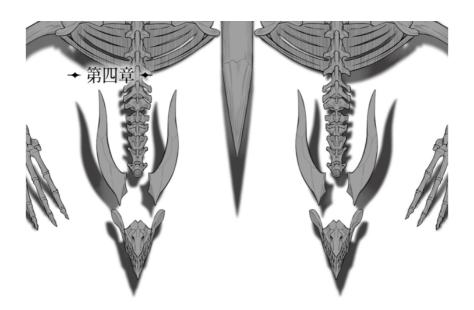
すでに、自分と相手の間で隔絶してしまった時間に、思いを馳せる。

それから、

「令呪をもって命ずる」

明滅する令呪を掲げて、ハートレスは短く、こう口にした。

「一僕のために、二千年を耐えてくれ。フェイカー」



「.....く.....かかかかか.....くかかかかかか.....」

ロード・ユリフィス──降霊科を統べるルフレウスの笑い声は、まるで冥界から吹く風のようだった。

あるいは、この霊墓アルビオンにふさわしかっただろうか。

「……犯人……だと。……おうおう。現ノ代-魔リ術ッ科ジの小娘が……ずいぶんと鼻っ柱が強い言葉を吐きよるわ……だが吐いた唾を吞み込むにはもう遅い……」

「もちろんです」

と、私はうなずいた。

自信たっぷりに見えたならいいが、もちろん必死の演技だ。内容があろうがなかろうが、まずこちらの言葉に耳を傾けてもらわないと、どうにもならない。

Г......

数秒、こちらを見つめてから、

「……いいや……聞く必要などない……」

言を翻して、老人は厳しい視線を円卓対面の君主ロードへと向けた。

「マグダネル。.....会議を進めよ......ここはくだらぬ探偵もどきの 推理を開陳するような......場ではない......」

(封殺か)

と、私は唇を嚙んだ。

ルフレウスがハートレスの共犯者にせよそうでないにせよ、これ

はありえる展開だった。ミステリ小説なら噴飯ものだが、時計塔の 運営会議で、わざわざ探偵の推理を聞かねばならない法律などな い。たとえ兄がどんな名推理を構築してようが、話せなければ意味 はないわけで、ある種潔いほど効果的な一手ではあった。

「たかが解剖局の局員が死んだところで……我らが知ったことではない。ハートレスの弟子も同様……冠位決議グランド・ロールでそのようなことに……時間を費やしてどうする……」

しかし、

「意義はあります」

と、端整な声が生まれたのだ。

唯一円卓に座らず、蒼崎橙子の後ろに佇んだ女性であった。

黄色い歯を軋らせて、ルフレウスがそちらを向いた。

「化野菱理……」

「法政科として、ハートレスの弟子たちの事件は、冠位決議グランド・ロールに影響を及ぼしうると進言いたします」

「おぬし……! 何のつもりだ……」

「職務を果たしているまでです」

と、菱理は口にした。

眼鏡を白い指で持ち上げ、振袖の美女は氷のごとく澄んだ瞳で、 私を含む君主ロードや君主ロード代行たちを見渡した。

「時計塔の秩序に関わる限り、私どもには最善を尽くす権利と義務があります。たとえ、それが冠位決議グランド・ロールの場であろうとも」

その通りだ。

だからこそ、ほかの十二科と違って、法政科には魔術を極めようともせぬ方針が許される。時計塔のよりよき秩序と運営こそが、法政科の存在意義なのだから。

「じゃあ、どんな意義があるって言うんだい?」

これは、マグダネルが問いかけたのだ。

「もちろん、投票結果に関わるからです」

と、菱理が言う。

ここに及んで、彼女の言葉にも態度にも、一切の怯みはなかった。いかな法政科とはいえ、居並ぶ君主ロードを前にして、これほどの胆力を維持できる者は稀だろう。

「そして、この冠位決議グランド・ロールこそがハートレス本人を 除く、すべての証言を集められる場だからです」

「……証言と来たか」

馬鹿馬鹿しいとばかりに喉を鳴らしたルフレウスだが、次の質問、その表情はわずかなりとも揺れ動くこととなった。

菱理が、こう問うたのである。

「ルフレウス様。マキリ・ゾォルケンという名を、ご存じありませんか」

「……夢見がちな魔術師の名さ」

「境界記録帯ゴーストライナーについての論文を、残していたはずです」

「おぬし……バルトメロイの伝言を渡すだけでなく……それをほじ り出すために……我がもとを訪ねたか……」

ルフレウスの滞在先を、菱理が訪ねていたということは、私も初 耳であった。彼女のその行動は、いずれ冠位決議グランド・ロール で必要になるからという布石だったのか。

「ハートレスは、フェイカーと呼ばれる境界記録帯ゴーストライナーを召喚しています。この術式や情報を、彼がどのように集めることが可能だったか、ということです。マキリ・ゾォルケンの論文は有力なひとつでしょう」

「なるほど、なるほど」

と、マグダネルが猪首を縦に動かす。

「スラーが宝具で襲撃されたという話は、ちらりと僕も聞いたけどね。時計塔の歴史においても、降霊科あたりのごく一部の接続アクセスではなく、完全なカタチで宝具を使えるほどの精度で、境界記録帯ゴーストライナーを召喚せしめた例は稀だろう。是非、ルフレウス翁の話は聞いておきたいね」

しれっと乗っかってきたな、民主主義のトップ。

もちろん、そういう風に菱理が誘導したのだ。

境界記録帯ゴーストライナーの具体的な論文までちらつかせれば、ルフレウスが封殺するにも話が大きすぎる。少なくとも、この場の誰かは興味を示すと踏んだわけだ。

天蓋から、しらじらと竜の魔術回路の光が降り落ちる。

ルフレウスは、手の甲の皺をなぞるように触れつつ、口を開いた。

「秘匿書庫に、古い論文ならあるにはあった……。七騎の英霊を召喚し……勝利者が聖杯を得る……そんなおとぎ話についての論文さ……。ハートレスなぞは知らんが……あるいは先代のロード・エルメロイがそんなおとぎ話に心を動かされたかもしれん……」

宝具と境界記録帯ゴーストライナーの実在には触れず、あくまで 論文のみで話を落としに来た。

確かに、これが最善手だ。

同時に、私はうっと声が出そうになるのを、耐えねばならなかった。

(──義兄ケイネスが、その論文を読んでいた?)

つまりは、疑いをルフレウス本人から、こちらへとなすりつける 手だ。その情報を漏らしたのは先代のエルメロイ派なんじゃないか と、直球に投げつけてきたのである。くそ、この爺い。本当にやり 口を選ばないな!

(一おい、兄)

と、呼びかける。

ここから先の戦術について相談すべく、情報をよこせと思念を飛ばす。

しかし、

(─戦闘中だ!)

悲鳴めいた兄の応えに、私は叫びを飲み込んだ。

どれだけ、状況がかき回されるのか。

以前の、交渉と調査が同時ぐらいはそんなこともあろうと考えていたが、冠位決議グランド・ロールと霊墓アルビオンでの戦闘が同時だなどと、夢にも思うまい。いや、正直に言えば、ちらりと頭をかすめなくはなかったが、そんな想像は廃棄しておきたかった。

どれだけ受け入れ難くても、これが現実。

いま私たちの前に立ちふさがっている、どうしようもない障害。

会議と戦闘と犯人探し──そのすべてが並列で行われる、メリーゴーラウンドのように目まぐるしい状況。

そして。

ルフレウスの濁った瞳が、こちらを捉えたのだ。

「そこの卑しい人形師が言っていたが……くだらないやりとりはうんざりだ……もしも、おぬしらが冠位決議グランド・ロールを止めてでも語らねばならないというならば……その結論をよこせ……ハートレスとやらの共犯に……一体何の意味がある……」

手札を切る覚悟を、決めねばならない。

場合によっては、この場の半数を生涯の敵に回しかねない覚悟 を。 ならば、どのように切るべきか。切る際に、何を目的とすべきか。

「ええ、私たちは答えに達しています」

言葉を紡ぎながら、出席者たちの反応を窺う。

「霊墓アルビオンの再開発に際して、ハートレスはその裏で──この 古き心臓の一角で、とある儀式を始めているのです」

事情を知る橙子は愉しげに唇をほころばせ、菱理は冷ややかにこちらを見つめた。

マグダネルとイノライは興味深げに。

ルフレウスは鬱陶しげに。

オルガマリーは硬い面持ちで。

それぞれに、いかにもといった反応ではあった。ハートレスの共 犯者が交じっているならば、その演技は見事と言っていいだろう。

しかし、

「彼は、この霊墓アルビオンで、魔術師のための神霊をつくりあげ ようとしています」

この一言でアシェアラが小さく息を止めたのを、私は見過ごさなかった。

*

「大丈夫ですか、師匠」

「……ああ、一瞬会議で意識を持っていかれた」

こちらの言葉に、胡乱に揺れた師匠の目が、正気を取り戻した。

頭痛をこらえるようにこめかみを押さえ、空中からこちらを睥睨

する戦車を仰ぐ。

「宝具を遠隔操作どころか、自動制御だと! くそFuck!、あいつじゃ逆立ちしてもできないタイプの器用さだな!」

師匠の叫びは、隠しきれない恐怖を秘めていた。

「英霊を神霊にする術式を起動する以上、フェイカーは直接戦えない。だから、ハートレスのところまで辿り着ければ、私たちだけでも阻止できるだろうと踏んでいたが、こんなイカサマがまだあったとは」

「竜種を長時間拘束して、宝具とともに自動制御させるとは、神代の魔術の名に恥じませんわ。なるほど、ここまでに届きますのね。 あの時代の魔術は」

ルヴィアの言葉も当然だったろう。

宝具はもちろんのこと、竜種は幻想種の中でも特別な存在だ。

このように、自分たちを食い止めるためだけの罠として使い潰す など、想像しているはずもなかった。

「ですが!」

滑空を平行に立て直しつつ、少女が吼える。

「神代の神秘といっても、所詮現代の魔術で召喚されたものでしょう!」

ルヴィアの周囲には五つと言わず、無数の宝石が浮き上がっていた。

この霊墓アルビオンを攻略するため、それだけの触媒カタリスト を彼女は持ち込んでいたのだろう。

魔術回路を走る強烈な魔力に、それだけの宝石が呼応している。 総量で言えば、さきほどの戦車の突撃チャージさえ凌駕するほど の、魔力量。 「Lead導き me!たまえ」

より良い未来を示すべく、フリューのナイフが閃いた。

その方向へと、ルヴィアは一ワン小節カウントの呪文を叩きつける。

「Call!目覚めよ」

ルヴィアの操る宝石たちが、あたかも万華鏡カレイドスコープの ごとき幾多の煌めきとともに、虹の剣となって迸ほとばしった。

同時、黒い稲妻が虚空を疾駆したのだ。

魔天のヘカティック車輪・ホイールの蹂躙。

虹色の宝石と漆黒の戦車とが、闇の中で相打ち、魔的な光芒を放った。

「アッド!」

固フ定ッ具クから外されたアッドが、たちまち変形する。

大盾になったアッドが、こちらへ拡散した衝撃を防ぐ。あくまで 余波だったはずだが、それでも滑空状態の自分たちの軌道を大きく 揺さぶるだけの威力があった。

だが、防ぎきった。

ルヴィアの宝石魔術は、戦車を傷つけるには至らなかったが、その疾駆を逸らして、自分たちの被害を最小限に止とどめるのには成功した。

ふと、思った。

神代と現代の違い。

かつて永遠のごとく循環していた神代と、何もかもを蕩尽する現 代。魔術においてさえ、たったいまルヴィアが浪費している宝石た ちは、その象徴ではあるまいか。あるいは、神代の名残である霊墓 アルビオンを採掘する自分たちそのものが。

「まあ、サーヴァントとやらがマスターの魔力の紐付きである以上、無限にこれを繰り返すわけじゃねえよな……」

いかにも考えたくないというように、フリューが呟く。

一応、自分も印象を口にしてみる。

「......拙たちが、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンで戦ったときよりは、威力は落ちていると思います」

真名解放もできぬ以上、あくまであれは戦車としての通常攻撃に 過ぎない。

それに対して、こちらは常に全力でなければ防げないが......けして防げないわけではないのだ。なんとも頼りない、到底つけいることはかなわぬほどの隙ではあったが。

一呼吸ほどの間をおいて、

「……ねえ、エルメロイII世」

と、ルヴィアが口を開いた。

「どうして、私が魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンに乗り、ここまでついてきたと思います?」

「さて。ありがたいとは思っているが」

「ご親切だこと。聞こえが悪いからって、分からないふりをしてく ださるの?」

微笑してから、少女は極めてシンプルな一言を叩き込む。

「むかついたからですわ」

彼女をよく知らぬ人物からすれば、耳を疑いかねないほどの悪態であった。

「ええ、神代の魔術形式を呼び覚ますのは、新世代ニューエイジの みならず多くの魔術師にとって救いになるでしょう。根源に至るな んて、もはや夢物語にもなりえません。それよりは、そもそも根源 と接続した神霊から、神秘をいただく方がよほど効率的で、確実で す」

ハートレスのやろうとしていること。

現代に、魔術師のための神霊をつくりだし、神代の魔術形式を復活させるという、いっそ荒唐無稽なまでの計画。それは確かに、多くの魔術師にとっての救済なのだと、師匠も同じことを話していた。

「それでもなお、私は何度でも主張します。──くそくらえ、と」 と、少女ははっきり告げる。

下町で投げかけられる罵声を、まるで何より誇らしい旗のごと く。

「それは、神々の時代と分かたれ、現代の魔術を選んだ私たちの歴 史を裏切る行為です。たとえかつての栄華には遠く及ばずとも、二 千年の間、営々と続けてきた進歩を打ち捨てる行為です」

いつか、師匠の講義で習った。

現代の魔術とは、神代が終わったときに始まった。学問となった 魔術は、かつてと目的を変えて根源へ至ることを望むようになっ た。何十代と血を重ねて、気が遠くなるほどの才能と資源を費やし て、夢の果てを思い描いた。

ひょっとすると、神代の魔術師からすれば、意味の分からぬ愚行かもしれぬ。

現に、あの蒼崎橙子ですら、フェイカーという神代の魔術師の前に「脆い」と言われていたと、ライネスから聞いたほどだ。

しかし、その変質にこそ、彼女は胸を張っていたのだ。

「たとえ、私のこの選択が、将来の子孫たちに恨まれ、呪われることになろうと、私は何度でもこれを選びます。魔術師たちの間に刻まれる影の歴史が、私を戦犯として裁くことになろうとも、この怒りをなくすことはできません」

宝石に囲まれ、ルヴィアの瞳が強い光を宿している。

いずれも強大な魔力を帯びた宝石たちの、いずれよりも強い光を。

「なぜならば、この怒りこそが私だからです」

いつか、師匠が言った。

この少女の在り方はあまりにも清廉だと。

魔術師でありながら、そのやり方は魔術師のみならず、いかなる 土地でも通用する正攻法だ。けして闇の奥底だけではなく、きらび やかな光の只中であろうとも、彼女の正しさは失われない。

そして、今思った。

なんて、美しく怒る人だろうと。

少女の猛々しい微笑は、この虚無の穴ナル・ピットにおいてさえ 美しかった。

「ですから、あなた方は先に行きなさい」

「先に?」

「言ったでしょう。この程度ならば、私たちでも凌ぎされます。ですが時間は惜しい。すでに冠位決議グランド・ロールは始まっているのですから、一秒だって無駄にはできません。するべきでありません」

明確に、明めい断せきに、ルヴィアが述べていく。

「ええ、この際自動制御というのも好都合ですわ。魔術によって縛っている結果、本来の知性を発揮しているようでもありません。

あの類の骨竜に知性があるものかは分かりませんけれど」

「つまり、君は」

問い返そうとした師匠に、ルヴィアは当然とばかりに、唇の端をつりあげた。

「エーデルフェルトの名が、目的を達成しないなどありえませんもの。ええ、だからここは引き受けて差し上げます。あなたがたは標的を捕らえなさい!」

「まあ、しゃあねえよな」

「ここまできて、何の成果もなしとか、わいもごめんやからな」 フリューと清玄が、続けて言う。

自分たちの方に、小さく手を振った。

「一仟せた!」

一瞬で、師匠は判断した。

穴の奥底に向けて、滑空用の礼装を操り、加速したのだ。

「拙も、行きます!」

自分も、その背中を追う。

追撃しようとした戦車へ、宝石の嵐が降り注ぐ。

衝撃と爆音を受けて、自分たちは虚無の穴ナル・ピットを潜る。

ちょうど、穴は狭まり、列車ほどの大きさとなっていた。

さきほどの戦車はこのスレスレを駆け抜けたのだろう。ならば、 ここを抜ければ、すぐさま追ってはこられまい。

狭隘な空間を抜けたところで、もう一度、派手な爆発音が背中で 轟いた。

おそらくは、ルヴィアが手持ちの宝石を使って、強大な魔術を仕掛けたのだ。

どれほどの戦いが、そこで繰り広げられているものか。フリューと清玄もいるなら、けして自動制御されているだけの宝具に引けを取らないと思うが、だからといって安心できるはずもなかった。

時々竜の魔術回路が照らす虚無の穴ナル・ピットを、再び自分たちは墜落していく。

風の圧力を全身に受けながら、

「一聞こえるか、ライネス」

声に出して、師匠が冠位決議グランド・ロールへと呼びかけた。

(─遅いぞ、我が兄!)

呼びかけに、私は勢い込んで応じた。

対して、

(─ おそらくだが、もうすぐハートレスと接触できる)

兄の返答は、ようやっとまともな成果を伝えてきた。

ひとつずつ、しかし徐々に連鎖して、急激に事態が進行している。まるで、感染爆発パンデミックのようだ。今ならまだ対応できるが、どこかで間違えたら、即座に手に負えなくなる予感があった。

石が坂道を転がりだしてしまえば、最早為すすべはない。

加速がつく前に、こちらの計画にはめてしまわなければ。

少しだけ深く息を吸って、兄に返す。

(─だったら好都合。こちらも手札を切ったところだ)

ハートレスが成そうとしていること。

魔術師のための神霊創造。

そのあらましについて、一気にぶちまけてやった。

普通の魔術師ならば一笑に付して終わりだろう。いかに魔術が超常現象とはいえ、自然と限度はある。でなければ、現代も魔術の世界となっていたはずだ。荒唐無稽と切って捨てて、さっさと会議を進行しようというのが、賢明な考えに違いない。

だが、この冠位決議グランド・ロールに、尋常な魔術師などひと りとして出席していない。 「なかなか面白い話だ」

マグダネルが太い指を組み合わせ、二度ほどうなずいた。

「魔術師のための神霊……そのようなものがつくれたら、僕たちが 根源を目指す意味も喪失する。あくまで本当だとしたらだが、なか なか優れた妙案ではないかな?」

民主主義派の考え方として、それは当然だったろう。

より多くの魔術師が、より高みの階梯へ足を踏み出すことを目的 とするならば、神代の魔術形式は間違いなく近道である。魔術師を 導く者として、マグダネルが肯定するのもむべなるかな。

「……いいけっ

と、否定の意志が会議を圧した。

それは、たったひとりの老人から溢れ出る、強大な意志であった。

「.....ふざけるな」

はっきりと、老人は口にした。

「我々が二千年積み重ねてきた歴史をすべて無視して……いまさら神代の魔術形式を復活させようだと……? ああ、極東や辺境の地域では……いまだにそんな方法をやるところもあろうよ……。だが、この時計塔で……? ありえるものか、そんなことが許されるものか……!」

それは、兄の思念から届けられた、ルヴィアの言葉と同質であった。

かたや誇らしく、かたや執念に満ちて、しかし彼らは同じ結論に 到達する。営々と続けてきた二千年を胸に、安易なる救済を拒絶す る。

これこそが魔術師だ、と思う。

けして合理的ではない。政治的ですらない。

そもそも、そんな理屈でものを考えられるならば、魔術師などという道を引き継がないだろう。貴族主義の魔術師として、ルフレウスが否定するのは、これまた至極自然の流れではあった。

「おぬしは……ハートレスの弟子だったな……」

ルフレウスが、ぎろりとアシェアラを睨めつけた。

ぎこちなく、アシェアラがうなずく。

「はい。ドクター・ハートレスの教えを受けました」

「ならば答えよ……かの愚かな元学部長は……本当にそんな術式を 成せるのか……?」

「つ.....」

一瞬、アシェアラの呼吸が止まる。

逡巡を破るかのように、穏やかにマグダネルが諭した。

「アシェアラ。解剖局の局員としての意見を開示してくれ」

おいおい、何が解剖局のアシェアラが自分にだけ有利なことを言うはずがない、だ。隠すつもりもなく、ベタベタじゃないか。

いずれにせよ、数秒の間をおいて、アシェアラは口を開いた。

「魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンで、境界記録帯ゴーストライナーを召喚したと仰いましたね。……それに、マキリの論文を読み、衛宮の封印術式を持ち出した可能性もあるとのこと。スラー地下の不安定な裂け目ポータルを使って、霊墓アルビオンへ潜入したということ」

アシェアラが要素をあげていく。

このあたりの材料は、グレイの故郷のことだけを抜かしてぶちまけた。ひとつずつ様子を見ながら手札を切っていくのがベターだが、そんな余裕はなかったからだ。

それに、私としてはもうひとつ理由がある。

「ならば、不可能ではないと考えます。彼がこれだけの神秘を集め

て、学部長の地位すら投げ捨てて十年の時間を費やしたなら、可能性はあるでしょう。極めて困難な術式となるでしょうが、ドクター・ハートレスにはそれに足る技術と異能があります」

「妖精の神隠しで……得たとかいう、正体不明の異能か……」

ルフレウスが、かすかに唸る。

傲慢極まりない降霊科ユリフィスの君主ロードをもってしても、 妖精の名前は無視しえないものだったからだ。英霊の宝具が魔術の 仕組みだけでは解析しきれないのと同様、妖精もまた現代の神秘の 外にいる。

あるいは......細々と続いた現代の魔術で、理解しきれることなど、神秘のごくごく一部に過ぎないとも言えるだろう。

(─よし、アシェアラに認めさせたな)

兄の思念が、こちらの脳に届く。

(*─*だが、ここからどうする?)

(─アシェアラを引きずりだしたなら、会議を次のポイントに持って行ける)

私ひとりで話を転がして、うまく尻尾を捕まえたところで、マグダネルに割り込まれれば終わりだ。マグダネルと私では格が違う以上、「それは冠位決議グランド・ロールと関係ない」と言われてしまえば、それ以上追及する手段がないからだ。しかし、同格のルフレウスが興味を示した今なら、そのまま会議とつなげていける。

くそ、蒼崎橙子が愉しそうに笑ってやがる。

こちらの思考も手数も読んだ上で、冠位決議グランド・ロールの 盤面を観戦しているのだ。

もっとも、だからといって、こちらに手を選ぶほどの余裕などないのだが。

「もうひとつ、質問させていただけますか」

と、私は持ちかけた。

「アシェアラさん。あなたから見て、ハートレスと、彼の弟子であるクロウはどのような関係でしたか」

「.....クロウ?」

ルフレウスの言葉に、疑問符がついたのも当然だ。

もとよりハートレス本人と接触がなかったのだから、いちいち弟子の名前など覚えていないだろう。とりわけルフレウスに至っては、後ろ盾になる家もない新世代ニューエイジの個体認識をする必要があるのかと思っていそうだ。

「愛弟子、でしょうか」

と、アシェアラは答えた。

「幾多の弟子の中でも、クロウは特別でした。本人に自覚があったかはわかりませんが、極めて多岐にわたるドクター・ハートレスの魔術およびその理論を、最も柔軟に受け止めていたのは間違いなくクロウです」

「弟子の中でも、というのは、あなたがた五人についてですか」

「.....つ」

アシェアラの表情に、かすかな緊張が渡った。

「今回殺害されたり誘拐されたりした──死体が発見されなかっただけで、後者も殺害されたのだろうと私は思っていますが──三人の弟子と、あなたと、クロウの五人は、かつて霊墓アルビオンでチームを組んでいましたね」

「隠していたわけではないですが」

よくも大嘘をつくものだ。

ハートレスの弟子になるのが不自然でないように、それまでの経歴を詐称した形跡はあちこちに残されていた。とはいえ、これは本題ではない。アシェアラもそのあたりを突っ込まれたところで、回避する手段はいくらも用意しているだろう。

だから、その先へと駒を進める。

こいつは、自爆覚悟の手になるんだがね?

「身内の恥を晒すようで恐縮ですが、あなたがたはその頃から、ア ルビオンからの密輸を成功させていたのでは ₁

「.....何?」

ルフレウスが、瞳を向ける。

「……アルビオンからの……密輸……? どういうことだ……?」

濁った瞳に、アシェアラの顔が映される。

この場合、すぐさま否定しなかったのは、さすがと言えただろう。狼狽うろたえてそんな手に出てくれれば、私はだいぶ楽だったのだけど。

「証拠はおありですか」

「状況証拠で申し訳ないが、スラーの帳簿をあたりまして」

帳簿の写しを、私は円卓の上へどさりと置いた。

「あちこちの数字に隠し入れてますが、万年赤字だったスラーの収入が、クロウとの接触があったと思われる五年間あたりに大きく改善している。ああ、うちの生徒には、まるで普段の授業には身が入らないが、こういう数字の不合理にはすぐ気づく変態がいましてね」

無論、フラットのことである。

いわく、嵌まらない数字って浮かび上がって見えるでしょ、とのことで、お前魔術回路だけじゃなくて脳が変態なんだな、と私が返したのは勘弁願いたい。

で、フラットが気づいた不合理な数字を、スヴィンがチェックして、誰でも分かりやすく変換するという、エルメロイ教室の双璧の面目躍如であった。

帳簿の写しにすっと目を通し、アシェアラはかすかに眉を顰めた きりだった。 なら、ここは押させてもらおう。

「無論、アルビオンは、本来密輸なんて不可能だから成立する場所です」

と、私は続けた。

「しかし、ドクター・ハートレスが不可能でないことを証明しました。そうでしょう? スラーの地底に、不安定ながらアルビオンへの裂け目が発生することを、ハートレスは見抜いたんですからね。 その時期も場所も完璧に」

でなければ、あのタイミングでスラーの地下まで宝具でぶち抜いて、アルビオンに移動するなど不可能だったろう。

「では、ハートレスはどうやって、そんな手段を手に入れたのか」

一拍の間をおいて、私は言う。

「あなたがた五人のチームという先達がいたからでは? いえ、おそらくはその中でも、あなたがハートレスの愛弟子と言ったクロウこそ、アルビオンとの密輸を成功させる要かなめだったのでは?」

Г......

アシェアラは沈黙した。

ああくそ、追い詰めているこちらも心臓に悪い。

なにしろ、仮説だらけ推測だらけ。

今にもちぎれそうなロープの上で、綱渡りをしているようなものだ。ある意味、こんな綱渡りが成立しているのは、容疑者を集めての推理ショーではなく、時計塔の運営を決定するための会議だからだ。

微妙な力関係の会話だからこそ、論理としては脆弱でも、逃げる アシェアラに食いついていられる。

「あなたがた五人のチームは、この密輸によって金銭を得て、正式 なルートでアルビオンから生還した。その後、密輸相手のハートレ スの庇護下に入るのは自然な流れだったでしょう。ハートレスにし ても、しばらくは手元に置いた方が安心ですからね」

だから、ここでもうひとつ手札を切らざるを得ない。

「なぜ、ハートレスがほかの弟子たちを失踪させたか」

可能な限り、感情を抑え、淡々と言葉を紡ぐ。

「私たちは、これを復讐と見ます」

「復讐?」

イノライの片眉があがった。

「師が、弟子にかい? なるほど辻褄は合うが」

納得しきってないのは当然だ。私がこれから言おうとしていることは、いささかニュアンスが異なってくる。

だから、アシェアラへと改めて問う。

「覚えはありますか。アシェアラさん」

「何も」

かぶりを振ったアシェアラについで、兄の思念が話しかけてきた。

(一おい、ライネス)

(──仕方ないだろう、兄上。これについては証拠が揃わない。無理筋でも、ここで自白を引きずり出す以外にない)

ああ、まだ証拠は揃ってない。

兄が築いてきた推理の要だというのに、こんなのは思いつきだと 謗られても仕方がない。だが、だからこそ、ここで突きつけるほか にない。

「十年前ですよ」

と、私は言う。

「十年前、愛弟子と選ばれたクロウを除くあなたがた四人が、ドクター・ハートレスを殺したからだ」

*

「**一**今の、は?」

話しかけると、師匠は渋面をつくった。

こうなると予想はしていたが、けして歓迎はしてなかったぞ、と 打ち明けるようだった。

「ライネスの賭けだ」

と、短く言う。

さきほどの清玄の魔術はまだ維持されている。距離が離れたルヴィアたちとは繋がってないようだが、自分と師匠の間ではある程度状況が共有されていた。

「確証を得ているわけじゃない。だが、あそこでアシェアラを揺さぶるしか道がない。ある意味、私よりライネスの方が適任だったかもしれないな」

「でも、ハートレスが死んだって、どういうことですか」

だったら、自分たちが追っているのは誰なのか。

幽霊を追ってるような気分になって、少しだけ、胸にざわつくものを感じた。墓守をやっていたころ、あれだけ恐れた対象に、ハートレスが成り果てていたとしたら?

「一応の答えはある。だが、現段階の冠位決議グランド・ロールではああ進めるしかない。──確証を得るためには、ここで私たちがハートレスを追い詰めてしまうのが一番の近道だ」

なるほど、と思う。

以前、ハートレスの弟子の工房の調査と、マグダネルとの会談を

同時に進めたときのように、今回もふたつの事象は結びついてしまっている。ざわめきたつ冠位決議グランド・ロールの盤面と、大 迷宮を彷徨う自分たちの運命は、ハートレスを取り巻く謎の重力に引き寄せられ、ぐるぐると衛星のように巡っている。

しかし、焦燥は徐々に退いていった。

自分たちは、地底の虚空をずっと墜落している。

まるで地底のジェットコースター。それとも流星に乗ってるかのよう。暗闇の中をただふたりで落ちていく。

「......きっと、もう少しなんですね」

「.....ああ」

師匠がうなずく。

逆しまに落ちていきながら、自分と師匠はなぜだか静かな心持ち を取り戻していた。

ルヴィアたちと分かれたことで、ひとつの踏ん切りがついたような一自分の故郷から始まっていた一連の事件に、ようやっと終わりのときが近づいているのだと、そんな予感を覚えていたのだった。

「イッヒヒヒ、気分出してるところ悪いが、俺もいるんだぜ!」 アッドの声に、つい笑みがこぼれてしまった。

「それで、いいんです」

と、返した。

「アッドがいないと、拙は困ります」

自分の言葉に、一瞬右肩の固フ定ッ具クの匣は黙りこくった。

「素直すぎると、調子が狂うぞ!」

アッドの文句に、苦笑をこぼす。

いくつもの事件を経て、こんな地の底までやってきて、ようやく、自分たちはそれなりのチームになれた気がした。

「ここまで来れば、私にもハートレスの居場所が追える」

師匠が、一枚の金貨を、懐から取り出した。

「あの時の、スターテル金貨」

橙子とフェイカーが戦った時に、ライネスが拾ったという金貨。

ハートレスが神霊イスカンダルを召喚しようとしている、と師匠 が看破したのも、その金貨ゆえであった。

「これは、直接フェイカーと──フェイカーが再臨する神霊イスカンダルとつながっている。魔力の流れを追っていけば、いやでもあいつらと会うことになるだろう」

「ヒヒヒ! いよいよってわけか! ヒヒヒヒヒヒザいぶん長かったな!」

アッドの笑い声が、不意に止まった。

その原因を、自分も察知していた。

逆しまになっている自分の頭上──つまり、虚無の穴ナル・ピットのさらに底であった。

「おい、なんだあれ.....」

アッドの声が、このように恐怖を含んだのは、初めてだったかも しれない。

数秒遅れて、師匠も同じ方向を向いた。

「もしも……」

呟く師匠の声は、かすれていた。

「もしも、この虚無の穴ナル・ピットが続いているのが、古き心臓 どころではなかったとしたら......?」

「師匠……?」

この霊墓アルビオンに潜ってから、最も絶望的な顔を師匠はして いた。 まだ、何も見えない。だというのに、その気配だけで自分たちは 完全に竦んでしまっていた。それこそ、神代の魔術師であるフェイ カーを前にしても、ここまでの無力感は味わわなかったというの に。

「この穴が……妖精域か、それに近しいどこかまで届いていたならば。ひょっとしたら、神代よりも危険なかの土地に」

やがて、自分と師匠は、闇の底に垣間見た。

光、だ。



より正確には、光を湛えた瞳であった。

光は六つあった。つまり、首は三つであった。

自分たちを根こそぎに喰らわんとする、三つ首の巨獣のあぎと。

「え.....」

おかしい。

距離感が、間違っている。

だいたい今だって落下している最中なのに、まるで怪物は近づいてこない。

「相手が……巨大すぎる……?」

だとすれば、あの眼球のひとつずつが数十メートルはあることになろう。巨獣の体格とこの虚無の穴の大きさとで矛盾が生じる。自分たちの感覚が、その矛盾を調整しきれなくて、混乱している。

「まさか、冥界の番犬ケルベロス……!」

師匠の叫びが、鼓膜を叩いた。

「いいや違う。番犬ケルベロスやアバドンと同じ源流を持ち、同じ元アーキ型タイプを持つ獣......? 場合によっては......これこそが......」

途切れた声音に、自分も喉が干上がるのを感じた。

駄目だ。

これ以上視界に入れたら、それだけで魂が消し飛びかねない。

あれは、幻獣どころか、神獣に足を踏み入れた怪物だ。霊墓アルビオンの寄生生物どころの話ではない。隔絶した権能を身に纏い、 もはや現代の魔術などでは絶対に伍せぬルールを内に蔵した規格外。

......覚えている。

一度だけ、似たモノと邂逅した記憶が、自分にはあった。

蒼崎橙子の匣。もしくは彼女の体内に潜んでいた、名状しがたい 怪物。

けして同一ではない。しかし、規格外という一点において同種 の、人間ごときの認識では追いつかない化け物が、穴の底にはわだ かまっていた。

霊墓アルビオンの主ヌシとでもいうべき、ケモノ。

「師、匠.....」

ひきつった喉が、かろうじてその名をこぼした。

「息を、止めろ……」

と、師匠は返した。

「絶対に……絶対に、気づかれるな……」

金貨を片手に、滑空する師匠が必死に奥歯を嚙み締めた。

(─おい、どうした兄?)

再び兄の応答が途切れたことに、私は歯嚙みした。

焦りが、心臓を鷲摑みにする。

ただ、思念自体はまだつながっていた。こちらと会話していられない事態になったということだろう。くそ、あっちもこっちも厄介事だらけか。おおよその推理の内容は聞いたが、ここからは孤立無援に等しいじゃないか。

そんな私へと、

「ドクター・ハートレスの弟子である私たちが、師を殺した……?」

声に出して、アシェアラはくすりと笑った。

褐色の肌が、死せる竜の魔術回路によって、妖しく艶めく。

「とんでもないことを仰いますね。でしたら、あなたが言い出した、失踪事件の犯人がドクター・ハートレスだとか、ハートレスが魔術師のための神霊を創り出そうとしているだとかのお話が、すべて意味をなくすのでは?」

「それについては、後からお答えしましょう。今はその事実を確認 させていただければ」

「事実ですって。どうやら、まだ言い張るつもりのようですが、そんなことをして弟子の私たちに何の得が? 確かに、愛弟子だったクロウを除いて、私たちはすでに次の道へと進んでいましたが、それではただ師の後ろ盾をなくすだけでは?」

「利益ならありますとも」

と、私はさも儲け話を見つけた商人のように請け合った。

「あなたがたは、愛弟子であるクロウを除いて、最初からドクター・ハートレスの弟子なんかではなかったからですよ」

「ほう。どういうことだい?」

訊いたのは、イノライだった。

老女に視線を向けて、私はさらに続ける。

「霊墓アルビオンの探索者には、あらかじめ時計塔の派閥の命を受けて、潜入している工作員が交じっているからです」

橙子が看破して、兄が辿り着いた仮説。

ルフレウスが口を出さなかったあたり、本人もやっているか、も しくは近い派閥がやっていることを耳にしているのだろう。

「五人の弟子の中でも、少なくとも、殺害されたキャルグはこれで した」

兄弟だったキャルグとジョレクが入れ替わっていた可能性については、ひとまずおく。話を進ませず、君主ロードたちの気を惹きつけられなくなれば、すぐさまこの場を降ろされかねないからだ。

「そうそう、今の話を調べていたのは私だけじゃない。そちらの蒼 崎橙子さんもですよ」

「私にパスを投げてきたか。そういえば、ハートレスとの会話を聞いていたんだったな」

苦笑して、橙子が細い肩をすくめた。

ハートレスの弟子が他人のスパイであることは、私たちよりも先 に橙子が辿り着いた事実だったからだ。

──『彼らは誰の弟子だったのかなって訊いてるんだ、元学部長』

スラーの地下で、フェイカーと橙子が戦ったときのことである。

だが、今重大なのは、彼女の口からその事実を追認させることだった。

「仕方ない。隠れて聞かれていたとはいえ、事実は事実だ。責任上肯定しておこうか。うん、私はそのようにハートレスを問い詰めたよ。返事はこうだ。――私は彼らに、君の人生を最も輝かしいものに捧げたまえと話した。彼らには捧げるべきものがあった。だから落ち着くべきところに落ち着いたんだ、とね」

「.....つ」

アシェアラの視線が、一瞬揺れた。

冠位魔術師が追認した以上、もはやこの事実は動かしがたい。迂 闊に否定して、一気に立場を失うことを恐れたのだろう。

「仮にそれが本当だとして、どうかしたのですか」

開き直ってきた。

なるほど、否定よりも賢い戦術だ。発言力の低下が最低限で済む。

「だいたい、我が師──ドクター・ハートレスを密やかに殺すなんて 不可能です。ロンドンでメイン学科の学部長が死んだりしたら、す ぐにバレるでしょう」

話題の焦点をずらしてきた。

ああ、まだまだ向こうの方が有利なのだ。

こちらは綱渡りを成功させなければならないが、向こうはぼろぼ ろなロープのどこか一点でも切り裂いてしまえば勝ちなのだから。

だから、慎重にうなずきつつ、私も会話に次の毒を仕込む。

「そうですね。ロンドンのどこにも時計塔の目が光っています。暗 殺までは可能かもしれないが、魔術戦の痕跡はどこかに残ってしま う。学部長を殺しておいて、誰にもバレないというのは難しいで しょう」

「分かっていただけて、何よりです」

「ですが、あなたがたには誰にもバレない場所がある」

円卓を指先で触れた。

全員に言葉が浸透するのを待ってから、私はこう言ったのだ。

「あなたは、十年前、霊墓アルビオンへとハートレスを招き入れたんじゃないですか」

「それって、密輸を可能にした仕掛け?」

オルガマリーが、軽く目を見開いた。

うなずいて、続ける。

「ええ、ハートレスがスラーの地下で、不安定な裂け目ポータルを使ったように、アシェアラ・ミストラスは十年前もこの仕掛けを使ったのでしょう。クロウを除く弟子のほとんどは、ハートレスのもとを去りました。調査した限り、あなたが最後になったようですね。だったら、師への報恩として、霊墓アルビオンに案内したいなどと言ったのかもしれません。魔術師にしてみれば、解剖局抜きでアルビオンに降り立つ機会は逃せない。さぞハートレスは喜んだことでしょうね。

同時に、時計塔の監視もこの場には及ばない。霊墓アルビオンは アルビオン独自のルールで動いているからです。そして、そのルー ルはあなた方の領域でしょう。もちろん、魔術師としては学部長で あるハートレスの方が上手でしょうが、その点でも、あなた方は霊 墓アルビオンで鍛えてきたチームだ。研究畑の魔術師を殺す手段な ど、いくらでも用意できるでしょう」

Г......

再び、アシェアラが沈黙する。

だが、今度は反論しようという気配が窺えなかった。

ルフレウスと蒼崎橙子の双方が興味を示しているこの環境では、 迂闊な抗弁がよりまずい状況を招くと悟ったのだろう。

「ああ、この際、愛弟子のクロウは反対したのでしょう。だった ら、クロウを連れていかなければすむのですが、おそらく裂け目 ポータルを探す上において、かの愛弟子は不可欠だった。まあ、裂け目ポータルがある程度の時間とどまっているのは、スラーをフェイカーが襲ったときのことで分かっているのですから、アルビオンに移動してしまえば、さっさとハートレスもクロウも殺してしまえばいい。ひょっとしたら、説得ぐらいはしようとしたかもしれませんが、これも裂け目ポータルの持続時間からすれば、ほとんど意味がなかったでしょう」

「……さすがに暴論がすぎるのでは」

ようやく、絞り出すようにアシェアラが言った。

もちろんその通りだ。百も承知だとも。正論が通じる場だなんて 思っていたのか、と問い返したい。

「ただ、だから、その短時間では死体の確認をできなかったのでは?」

「……何の、ことですか?」

「さっき、あなたが尋ねたことですよ。今のハートレスが誰かということです。死体をきちんと確認できなかったなら、今のハートレスが何者か絞り込めます。だって、今のハートレスは、以前愛弟子のクロウしか特定できなかった、不安定な裂け目ポータルの位置と時間を特定したわけじゃないですか」

「あなた……」

アシェアラが、低い呻きとともに絶句する。

マグダネルは不気味なほど静かに、娘のその様子を見守っていた。

「あなたはまさか……今のハートレスがクロウだって言うの……?」

「ハートレス─いまハートレスを名乗っている魔術師の変身術については、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンで私どもも一泡吹かさ

れましてねっ

カウレスになりすまされたせいで、どれだけこちらが迷惑を被っ たか。

あれだけの変身術があれば、長い付き合いのある師の姿になりすますことなど、極めてたやすかったはずだ。

「.....ありえない!」

アシェアラの声音は、悲痛なほどに歪んでいた。

「だから聞きました。死体を確認しましたか、と」

Г......

女の顔色から、みるみる内に血の気が引いていた。

無論アシェアラも優れた魔術師であるのだから、その程度の身体機能は自在に制御できるはずだ。逆に言えば、その程度の身体操作も忘れるほどの衝撃を、今アシェアラは受けているのであった。

「そんなの.....なにもかも、仮説に仮説を重ねたデタラメじゃない!」

「もちろん」

と、私も認めた。

さすがに、肯定しておかないと始まらない。あくまで、ここまではお膳立て。会話を進めるための欠片ピースに過ぎないのだから。

「ですが、次は仮説じゃない。霊墓アルビオンで懇意にしている魔 術師が裏付けをとってくれました」

アルビオンの魔術使いゲラフ。

兄が調べてほしいと言ったのは、まさしくこの一点だった。

「ハートレスの弟子、クロウのフルネームですよ」

「クロウの?」

アシェアラが、細い眉をひそめる。

確か、ふたりは同じアルビオン生まれだったはずだ。ひょっとすると幼馴染みだったかもしれない。それでも、裏切るときは裏切るのが魔術師というものだろう。はたして、裏切らせたのはマグダネルだったかどうか。

「これは、あなたも知らなかったんじゃないですか。この土地では 姓がなくても誰も気にしないでしょう。もしも知っていたら、何か の記録に残っていた可能性が高いですしね」

ゲラフには感謝するしかない。

私にとって、この会議で欠かせざる銀の弾丸だったのだから。

「あなたがたは、ハートレスの殺害に反対したクロウを、殺しきれなかった。おそらく、何らかの手段で死体を偽装したのでしょう。 これも、私どもは得意な方をひとり知っていまして」

私は、橙子の背後へと目を向ける。

彼女が連れてきた、法政科の女魔術師へと。

「あら、ひょっとして私のことですか?」

菱理が、驚いたように瞬きした。

演技にどんな評点を与えるべきかは分からない。ああ、菱理あなたもこのために、万難を排して冠位決議グランド・ロールへやってきたのだろうに。

「彼の名は、クロウ・アダシノ」

しん、と音が絶えた。

その意味に、皆が気づいたためであろう。

アシェアラは硬直し、オルガマリーが唾を飲み込んだ。

マグダネルは、太い首に手を添えた。

ルフレウスは、乾いた咳をこぼしたきりだった。

イノライと橙子は、どこか似た表情で目を光らせた。

「東洋の姓名順に並べ替えると、化あだし野の九く郎ろうとなるで しょう」

言った私の方が、ため息をつきたくなった。

まったく、どこからつながっていたのか。時計塔の陰謀劇においては、十年越し百年越しの策略だってありえるのだが、複雑さにおいてこれはとびきりだ。

ここまで隠し通したことを、さすが法政科と褒めるべきなのだろうか。

「あなたが隠していた手札はこれですね。──ええ、グレイから聞きましたよ、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの事件において、あなたは自分の兄を追ってると言っていたんだ。ドクター・ハートレスは同じノーリッジの養子だからとか言ってましたが、この事実が分かってしまえば、ひどい言い訳だ」

ああ、あのときの菱理の言葉はこんなにもシンプルだった。

今のハートレスは、本当に自分と血を分けた兄だと、菱理は気づいていたのだから。

「いかがですか、ミス化野」

化野菱理は、淡い微笑を浮かべていた。

極東の芸術であるという能面を、私は思い出していた。

*

いくつも連なる螺旋の光の中で、ハートレスはふと唇を動かした。

やはり、片目は塞いだままだ。

残り一画となった手で、半顔を覆っていた。

「.....来てしまいましたか」

足元へ、視線を落とす。

術式を起動するために、そこにはいくつかの品が配されていた。

まず、かつて衛宮と呼ばれた魔術師であった、生ける魔術礼装。 この術式を管理するための時計。そして、周囲におびただしく並べ られたスターテル金貨。

その金貨が、震えていたのだ。

おそらく、エルメロイII世は十分に近づいてから、彼の拾ったスターテル金貨を使って、こちらの居場所を探ろうとしているのだろう。

だが、ハートレスもまた、金貨を拾われたことに気づかぬわけではなかった。

向こうが金貨の経パ路スを通じて、こちらを探るなら、当然ハートレスも同じことができる。万が一、エルメロイII世が追いついてきたときの保険として、ハートレスはこの金貨を利用するつもりだったのだ。

万が一とは、今このときであった。

金貨の表面を指で撫でながら、彼は口にする。

「僕ができる、最後で最大の妨害がこれです」

ひどく疲れたように、声が落ちる。

フェイカーが今味わっている莫大な時間を、魔術師も経験しているかに思えた。

「あるいは……僕が落ちた最後の陥かん穽せいが」

声と魔力が、捻れた光の空間に広がっていく。

「おやすみなさい.....エルメロイII世」

そう言って、赤い髪の魔術師は、開いていた片目を閉じた。

*

静かに、静かに、自分たちは滑空している。

魔力の消費も最低限に、虚無の穴ナル・ピットを必死に潜行している。

冠位決議グランド・ロールで明らかにされたいくつもの衝撃さ え、今の自分たちには絵空事より薄っぺらかった。胸をひたひたと 満たした黒いものが、何もかもを覆い隠していたからだ。

すなわち、恐怖である。

今なら、自分たちがどこからやってきたか、断言できる。

この黒くて重くて救いのない空白から、自分たちは生まれた。闇よりも一層暗い深淵こそが揺り籠だ。まるで宇宙の真空にひとりで放り出されたみたい。凍えて死にそうになっているのは、肉体でも精神でもなく、遥かに重大な魂の問題だった。

壁のギリギリで、そろそろと滑空を続ける。

いくつか、横穴が見えていた。

おそらくは、そのひとつがハートレスへとつながっているのだろ う。

蒼白を通り越してもはや土気色になった表情で、震えを堪えながら、師匠は手元の金貨を凝視している。無様と謗る者もいるだろう。 哀れだと嘆く者もいるだろう。 しかし、同じ恐怖の渦中にある自分からすれば、これだけの恐怖の中で、なお最善を尽くして動けることの方がよほど心強く、星の欠片のように尊かった。

「もう少し……もう少し、で」

呟きさえ、懸命に押さえ込んでいる。

穴の底を見る勇気は、自分にも師匠にもなかった。

向ケこモうノからすれば、自分たちは芥け子し粒つぶ程度の存在だろう。存在としての級位が異なりすぎている。次元が違うとはこのことだ。霊墓アルビオンのさらに底、古き心臓よりさらに向こう側のルールの具現。師匠が口走りかけたように、冥界の番犬なんて神話が存在するのは、かのケモノの存在を人が忘れられなかったからではあるまいか。

ほんのかすかに、風が悪臭を運んでくる。

けして大きな音ではないのに、唸り声は虚無の穴ナル・ピットすべてを軋ませる。

そのいずれも、まともに意識するだけで気絶してしまいそうだ。 ありとあらゆる意思力を総動員して、認識をもぎ離しているだけ で、自分は精一杯だった。

金貨を握りしめた師匠の視線が、揺れる。

「グレイ……!」

あの横穴だと、仕草で示した。

ほんの一瞬、希望が灯ったかに思えた。

そのときだった。

三つの頭──六つの目のひとつが、こちらに向いたのだ。

••••••

時間が消し飛んだ。

霊墓アルビオンの怪ケ物モノは、何もしなかった。

ただ、見つめただけだ。魔眼でも邪眼でも何でもない。なのに、 存在としての格差がこちらの魂を拉ひしいだ。爪も骨も皮膚も筋肉 も肺も胃も心臓も脊髄も血管も脳も、何もかもを一度に握り潰され たようだった。 呼吸が止まる。

血流が止まる。

細胞のひとつずつが、最初から石のごとく停止する。

恐怖とは未知から生まれると、誰かが言った。きっと、ほんの少しだけ違う。知らないからではなく、知り得ないからだ。絶大すぎる存在を前にして、こちらの認識センサーがすべて振り切れ、主人より先に自死を選んだのだ。

ああ、それは、なんて正しい。

「師……匠……」

無論、師匠も同様の状態だった。

「視線を……誘導したんだ……」

喘ぐように、言う。

水中で、死の直前に溢れ出る吐息のように。

「やはり……ハートレスは……あいつの持つ魔眼は……」

意識が途絶える直前、やっと自分は納得した。

一つまるところ。

あれほどの準備をしてなお、自分たちは、霊墓アルビオンをなめていた。

やがて、感心したように、菱理は小さくうなずいた。

「本当に、よく調べがつきましたね」

「我が兄──エルメロイII世は、最初から違和感を持っていたようです。ひとりだけ姓が分からないのは、それが分かると何かしら特色がはっきりするからじゃないかと」

だから、隠蔽していたのではと考えたらしい。

私も似たような考え方はするが、兄の場合はモノよりもヒトを基準にした思考方法だった。もっと相手に寄り添っている、とでも言えばいいか。

この場合、クロウという弟子と、化野菱理の双方に疑問を抱いていたらしい。

「魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの際もそうでしたが、あなたは単に法政科というよりは積極的に関わりすぎていた。ハートレスが同じノーリッジの養子だからと言ってはいたが、正直ノーリッジの養子はほかにいくらでもいる。ハートレスにそこまで執着する理由とは思えない」

「嘘はついてなかったでしょう」

菱理の微笑は、どこか悪戯っぽくもあった。

「当時から、今のハートレスは、私の実の兄である可能性が高かったからです。ああ、実の兄といっても異母兄弟ではあるのですけどね。なんでも、生まれたばかりの我が子と前妻をおいて、私の父はひとりだけ霊墓アルビオンから生還したそうで」

「父が生還者サヴァイバーだったのか」

「ふふ、金を掻き集めて、やっとひとりだけ出てきたということで

すから、腕は大したことなかったのでしょうね。魔術師として命脈 をつなぐためとはいえ、実に愚かしいと思いませんか?」

と、菱理はおかしそうに振袖の肩を震わせた。

「まあ、妻を置いてきてしまったショックで、地上に出た父はずいぶん腑抜けてたそうです。結果、新しい妻に私を生ませてすぐに死にましたし、おかげで私もノーリッジの養子に潜り込むまではずいぶんと苦労しました。―それはまあ兄だって、自分の姓を名乗りたくなくなるのではないでしょうか」

いっそ清々しい物言いで、女は言い募る。

私にしてからが、まさかという思いを隠しきれなかった。

しかし、考えてみれば暗示はあった。ノーリッジの養子だと言いつつ、もともとの化野姓を使っていたのは、おそらく兄を探すためだったろう。ひょっとしたら、法政科に入ったのも似たような心理の働きだったかもしれぬ。

少しだけ、息を深く吸って問いかける。

「いつから、その可能性を?」

「ご想像どおりかもしれませんが、法政科に所属して、しばらくした頃です。残念ながらハートレスもクロウもすでに姿をくらましていましたが」

ふたりの失踪が十年前。

菱理の年齢を考えれば、辻褄は合う。

「じゃあ、あなたはクロウの秘密を知っているんですか」

「ええ。おそらくという但ただし書がきはつきますが」

眼鏡の蔓をつうと撫でて、菱理が言う。

「ですが、私は兄と実際に会っていたわけではありません。そこは、兄とアルビオンで組んでいたチームメイトに語っていただいた方がいいのでは」

その瞳は、獲物を見定める蛇のように、とある人物へ吸い付いた。

もちろん、アシェアラである。

冠位決議グランド・ロールに現れたときとはまったく異なる苦悩が、褐色の肌の眉間に刻まれていた。

「.....クロウは」

言いかけて、一瞬言葉を区切る。

「クロウは、確かに、ある種の異能を持っていました。霊墓アルビオンと、地上を行き来するための、不安定で一時的な裂け目ポータルを見つけ出す才能を」

「ほう.....」

ルフレウスが、皺をさらに深くする。

そうすると、ただでさえ不吉な君主ロードは、なおさら老ろう獪かいな悪魔のごとく映るのであった。

「最初からそうだったわけじゃ、ありません。ただ、ある日、裂け 目ポータルを見つけたときに、彼のその才能が芽生えました」

「裂け目ポータルを見つけたとき?」

私が質問すると、アシェアラはかすかな躊躇とともにうなずいた。

「探索者以外にはほとんど知られてませんけどね。アルビオンには それなりの頻度で裂け目ポータルが発生するんですよ。ただ、クロ ウはこの裂け目ポータルと出会う頻度が半端じゃなかった。本人は 恥ずかしがっていたけれど、どうしてこんなものを見つけられるの かと聞いてみたら、自分でも分からないけれど、紐を引っ張り出す みたいなものだって」

「魔眼の一種ですね」

と、菱理が言う。

「化野の家系で、稀に発現する才能と聞きます。対になったものを見つけ出す魔術──というよりも、失せ物探しのおまじないと言った方がいいでしょうか」

.....ああ、やはりそうだったか。

当然、そういうパーツがないと、このパズルは完結しない。

おそらく、魔眼の格としては大したことがない。私の、やたら魔力に過剰反応する魔眼と一緒だ。しかし、たまたまクロウの魔眼はアルビオンにはまっていた。今菱理が話していたように、魔眼といっても、極東の土俗の魔術に近いのだろう。

すると、橙子が口を挟んだのである。

「なるほど、化野の魔術とは蛇に由来するものだったかな?」

「その通りですが、何か」

菱理が返す。以前の事件でも、何度か菱理の魔術を目にすることはあったが、確かに本人と同様、蛇の印象は強かった。

「いや、蛇と失せ物探しは縁深いからだ。とりわけ、落とした金が見つかりますようにだとか、そういう類はね。これは蛇のピット器官など、古代は正体不明だった能力について、人間が神聖視していたからもあるだろう。……そして、蛇は竜に近いというか、時には同一視される存在だ」

納得した、というように、何度か橙子はうなずく。

「だったら、この土地に馴染むほど、クロウの異能は発展していっただろう。それは、死せる竜の視界に、クロウという蛇の魔眼が同一化していくようなものだ」

「ほう。我が弟子には、何か思い当たることがあったかね」

そんな橙子に、ちらとイノライが視線をやって問いかける。

橙子は、肩をすくめたきりであった。

「いえ、よくできたものだなと。いろいろ得心しましたよ」

そこに含まれたものは、私にも判然としない。

君主ロードと冠位魔術師の師弟。時計塔広しといえども、これに 匹敵する組み合わせはそうあるまい。同時に、かたや弟子の封印指 定を推薦した魔術師であり、かたやその封印指定から流れて、何年 も俗世を彷徨ってきた魔術師でもあった。

(……まあ、考えるだけ無駄か)

政治的な部分ならともかく、魔術的なところでこのふたりに張り合おうとしても仕方がない。そういう無益な努力は、我が兄が復帰したら任せるとしよう。

思考を切り替えようとしたところで、アシェアラが口を開いたのである。

「ですが、ライネス様の主張には、明らかな間違いがあります」

「何?」

どきり、と胸が跳ねるのを感じた。

必死で綱渡りしてきたロープがちぎれとぶ、あってはならない予 感。

「……どういうことです?」

۲.....

数秒躊躇ってから、アシェアラは再度口を開いた。

「申し訳ありません、お父さん。──私が、私たちが勝手にやったことです」

先に、マグダネルへと謝罪する。

それから、

「ライネス様。あなたが言った通り、私たちは、霊墓アルビオンで チームを組んでいたときから地上とつながっていました」

「.....それは」

駄目だ。

嫌な予感しかしない。

今更、彼女がそこを認めてくるということは。

間をおいて、はたしてアシェアラはこう切り出したのである。

「ですが、十年前私たちが手にかけたのは、ハートレスではなくクロウの方です」

一瞬、何を言われてるのか分からなかった。

最終ラウンド近くまでもつれこんで、相打ち覚悟のクロスカウンターをもらった気分。

それでは、確かにこちらの主張が根本から成り立たない。なのに、苦し紛れの言い訳ではなくて、向こうも苦渋の判断で告白したのが、表情から読み取れてしまった。

「.....なぜ?」

「十年前の事件の流れで、ハートレスが成功しすぎる可能性があったからです。そして、君主ロードでなくても、メイン学科ふたつの 学部長が一度にいなくなるのは混乱を招きすぎます」

アシェアラの言葉に、私は思わず天井を仰ぎたくなってしまっ た。

十年前に起きた、時計塔を揺るがすような事件。

そんなもの、ひとつしかないじゃないか。

「つまり……先代のロード・エルメロイが亡くなったからだね」

「……その通りです」

ああくそ、彼女がそう考えるのも当然だ。

実際、先代のロード・エルメロイ―我が義兄であるケイネスが亡くなったことで、時計塔は大騒ぎとなった。エルメロイ派は現代魔術科へと追いやられ、メルアステア派は考古学科と鉱石科のふたつを独占することになったのだから、当時のアシェアラの考えは極めて正確であったと褒めるべきだろう。

あのタイミングでハートレスが行方をくらまさなければ、メルアステアがふたつの科を独占するなどという異常事態よりも、ハートレスが鉱石科の学部長におさまるという流れの方が、よほど自然だったはずなのだから。

「ハートレスにとって片腕のクロウを殺すことで、彼の躍進を止められると思ったか」

私の質問に、アシェアラはしばらく詰まってからうなずいた。

「そうよ……その通り」

「しかし、ある意味で予想を裏切り、ある意味で予測以上の成果があがった。片腕を失ったハートレスは、時計塔での地位を失うばかりか、そのまま失踪してしまった……ということか」

それは、誰も想像しない成果だったのだ。

ばくばくと心臓が鳴っている。どういうことだ? 私は何を間違えた? すぐ兄と相談したいのに、いまだ返事は戻ってこない。何があった? 辻褄が合わなくないか? この土壇場で、わけのわからないうちに、私は何を逆転されてしまった?

「いささか、想像しない流れだったが、これで終わりかね?」

マグダネルが、問いかけた。

真摯そのものとしか言いようのない態度でうなずく。ここまで、 ほとんど口出ししなかった民主主義派のトップの言葉は、裁判所で 振り下ろされる槌の響きに似ていた。

「もちろん、我が娘の罪は明らかだ。ドクター・ハートレスの弟子を奪ったとなれば、同等の賠償を用意しなければならないだろう」

(......捕まえ、そこねた)

ここまできて、私の脳裏は絶望で満たされていた。

学部長であるハートレスを殺したとなれば、いくら時計塔ではまともな法が機能していないとはいえ、大問題として糾弾することができる。

しかし、相手が弟子のひとりでしかないクロウとなれば、主犯であるアシェアラを出せばそこで終わってしまうのだ。このあたり、時計塔の倫理観はマフィアの仁義に近い。目には目を、歯には歯を、とはつまり対等以上の代償は必要ないということだ。

君主ロードの肯定を受けて、イノライが水を向けた。

「同等の賠償とはどういうことだい? マグダネル」

「彼女は私の娘だと言っただろう。ならば私の失態だ」

と、マグダネルは認めた。

逞しい拳を膝におき、頭を下げたのである。

「彼女の独断でも、私の差金でも同じことだ。彼女は私の娘なのだから、私が全責任を負うとも。この非については全面的に認めよう」

これも、想像外の展開であった。

魔術師としての気概も、娘への愛も、すべて真実。

どれほど悪辣な計画を練ろうとも、それらの要素がけして偽りなわけではないのだ。そして、だからこそこの君主ロードは恐ろしい。

面白そうに、イノライは顎をしゃくる。

「ほう。責任、ね。具体的には?」

「ハートレスの現ノ代ー魔リ術ッ科ジを、現在運営しているのはエルメロイ派だろう。ならば、私が持つ今回の冠位決議グランド・ロールの投票権を預けよう」

「な.....っ!」

その言葉に、絶句させられた。

俗世の考え方とは、それはまるで違う。

個人に補償しようなどとは、欠片も思っていない。たとえ死んだのがハートレスの弟子であろうと、被害を受けたのがハートレスであろうと、時計塔の君主ロードである限り、そのツケを返すのは派閥同士であるべきだという論理。

「おや、必要ないなら取り下げるが」

なんだ、これは。

罪状を突きつけたはずなのに、今追い詰められているのは、こちらだ。

無論、条件としては遥かに有利になったはずだ。なのに、フリーハンドで預けられた権利の重さに、精神こころの方が圧倒されている。

「ハートレスとの共犯とやらは……どうなった……?」

今度は、ルフレウスが問いかけたのだ。

「今の話なら……この大馬鹿者だろう……! だいたい、魔術師のための神霊をつくるなどという馬鹿げた計画に……妙案などと言いおったぞこやつは……」

敵意を隠さず、老人が言い募る。

対して、睨まれたマグダネルの側は大げさに肩をすくめた。

「おっと、確かに妙案とは言いましたが、それだけでハートレスと 共犯と言われても。だいたい、今の話だと、彼の力を削そごうとし たのは僕の娘です。それに、ハートレスの弟子のひとりやふたり死 のうがどうでもいいと仰ったのは、ご老体ではありませんか」

会議の押し引きが、さらに速度をあげている。

この場の有利と不利を表現して、見えない天秤は忙しく傾き続け

ている。一瞬もとどまらず、ぐらぐらと揺れ続けている。

私は、その中でベストを見つけなければならない。

(……ハートレスを止めると言ったな、我が兄よ)

連絡を絶っている兄に、思いを馳せる。

一応まだ経パ路スはつながっている。死亡数秒前という可能性 だってあるが、張るとしたらここだ。ギャンブルなしで勝てるよう な会議ではないと、たった今も思い知ったところなのだから。

「……少しだけ、確認させてください」

と、アシェアラに持ちかけた。

「なんです?」

「あなたは、マグダネルとつながっていて、クロウの異能を知りつつ誘導した。ひょっとして、最初はマグダネルのもとへ誘うつもりだったのではないでしょうか」

「……、その通りよ」

逡巡を含みつつ、アシェアラが答える。

養父であるマグダネルを気にしてのことだろう。

「しかし、いくつかの偶然から彼はハートレスとつながってしまった。違いますか?」

「それも、その通りです」

認めたアシェアラを前に、私は必死に思考する。

指先で引っ掛けた思考のきっかけを、かなうかぎりの全力で引きずり出す。

(.....兄の推理が的確だったとしたら)

今の私は、兄の考えのすべてを聞いたわけではない。そもそも、 兄の推測もこの段階で完成しきっていたわけではないからだ。会議 の進行を見ながら、情報を整理していくはずが、さきほどから兄の 返信が途絶えてこの有様だ。

(.....なら、こう切るしかない)

息を吸う。

もう三秒だけ、会議の未来図をシミュレーションしてから、こう 言い放った。

「私は、ここでドクター・ハートレスの共犯者探しを放棄します」

「え……?! ちょっとライネス、何を言ってるの!」

オルガマリーが、目を見開く。

私もそう思うとも。

どこの世界に、大詰め近くまできた挙げ句、推理をやめてしまう 探偵がいるだろう。いや、もちろん数あるミステリにはそんな展開 もきっとあるのだろうが、多くの読者や視聴者が期待する王道とは そうではあるまい。

だからこそ。

「もう一度言います。犯人探しはここで放棄します」

「ここまでかき回しておいて、かね? なかなか勝手かつ面白いことを」

イノライが言う。

弟子である橙子は、口元を押さえていた。

ああ、今にも笑い出しそうなのを堪えつつ、こちらの次の手を待ちあぐねているのだろう。推理ショーの挙げ句、冠位決議グランド・ロールがどこへ辿り着くのか、まるで映画でも鑑賞するみたいに観察している。

だったら、満足してもらえるよう、叩き込むまでだ。

「もうひとつ提案があります」

と、私は持ちかけた。

「トランベリオは、私に投票権を預けると言いましたね」

「ああ、確かに言ったとも」

うなずいたマグダネルを確認してから、私は続けて手札を切った。

「ならば、エルメロイ派は、トランベリオともども冠位決議の投票 権を放棄します」

「......おぬし......!」

今度こそ、ルフレウスは眼球をこぼれださんばかりに目を見開いた。

正直、呪いで心臓が止まるのではと思った。

君主ロードともなれば、その感情ひとつで魔術が成立してもおか しくない。叫びだしそうな恐怖を腹腔にねじ込みつつ、私はさらに 言う。

「全員がそうすればいい」

絞り出すように、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「この会議をなかったことにするんです」

「冠位決議グランド・ロール……を……?」

「もともと、冠位決議グランド・ロールは君主ロードと一部の関係 者のみにしか、知らされていません。私たちがすべて権利を放棄し て、そんなものはなかったと言い張れば、問題ないでしょう」

これが、目指したゴール地点。

全員に弱みを見出し、代わりに強みを諦めてもらうという決着。

(貴族主義にとっては、アルビオンの再開発を阻止するという大目的を達成できて、民主主義にとっては、君主ロードの娘が学部長の弟子を殺したという汚点を払拭できる)

今ならば、この瞬間ならば、そこで妥結できるはずだ。

まして、橙子が投票権を預かった中立主義は、この会議において 死守せねばならぬ条件がない。

「まさか、そんな風に打つとは」

くつくつと肩を揺らして、イノライが言う。

創造科バリュエの老女は、この会議においても独特の立ち位置を 保持したままであった。マグダネルの覇気とも、ルフレウスの老獪 とも異なる、これもまた君主ロードの気風であろうか。

「だが、共犯は気になるな」

「それは、兄がしかるべき相手に言うでしょう」

「しかるべき相手だって? そもそもハートレスの術式はどうする 気だ?」

これは、マグダネルが口を挟んだ。

「君が言っているとおりなら、ドクター・ハートレスの術式は今に も発動しそうなわけじゃないか。そうなってしまえば、冠位決議グ ランド・ロールをなかったことにするなど不可能だぞ?」

「ですから、我が兄がそれを阻止するため、霊墓アルビオンに潜っ ています」

私が答えると、ルフレウスがかつんと杖を鳴らした。

「あの……新世代ニューエイジの……君主ロードが……か……」

「それって、アルビオンを攻略してるってこと? でも、さっきの話だと、この古き心臓で儀式を行うとか言ってたわよね。そんなの辿り着けるわけないでしょ!」

オルガマリーの疑問も当然だ。

だから、ここは素直に打ち明けておく。

「すでに古き心臓近くまで、潜行しております」

「あら。相変わらず、恐れを知らないことですね。あの方は」

どこまで本気やら、菱理が淡く微笑する。

法政科の彼女が、何を考えているかは分からない。ハートレスが兄のクロウだと明かされたり、そのはずだったのに、もうクロウは死んでいると告白されたり……一体、今、この極東の美女の胸中はどのような思いが揺曳しているのか。

もちろん、その古き心臓まで潜った兄の音信は途絶えているわけ だが、ひとまず古き心臓近くに辿り着いたことまでは嘘じゃない。

「ですが、エルメロイII世がドクター・ハートレスを止められると?」

「もちろんです。その程度に兄を信じられないようでは、エルメロイの名に封じた甲斐がありません。先代であるケイネスであれば、あっさり止めたでしょうからね」

うん、大嘘である。

残念ながら菱理には通じてないようだが、ここは押し通させても らおう。ああ、もちろんグレイのことは信じてるがね?

「ここは政治の場じゃないですか。だから、正々堂々政治をしま しょうよ。そのつもりで私は来ています」

「いい詭弁だね」

と、イノライは鷹揚にうなずいた。

ゆっくりと隣を見やり、囁いたのである。

「マグダネル坊や。どうせ、投票権を預けるつもりなのは変わらないんだろう?」

「もちろんです。ミズ・イノライ」

「なら三十分」

と、イノライが指をあげた。

懐中時計を取り出して、円卓へと置く。

「エルメロイII世が近くまで潜っていると言ったからには、ハート

レスを止めた際には状況が分かるんだろう? だったら、三十分だけ待とうじゃないか」

「……エルメロイと……トランベリオの投票権があるなら……こちらが……わざわざ退く道理はないが……」

「おいおい降霊科ユリフィス。エルメロイのお姫様は放棄するって言ってるんだぞ。お互い、いらん意地の張り方はしないほうがいいだろう?」

ウィンクして、イノライがルフレウスを牽制する。

今回の冠位決議グランド・ロールでは最高齢になるふたりは、いずれも譲らない。血液の代わりに、権力のエキスがふたりの血管を流れているように思えた。もちろん、私も人のことを言えた柄ではないだろう。

そのときだった。

不意に、魔力の流れが変化した。

連絡はなくとも、かろうじて我が兄とつながっていた経パ路スが、突然断ち切られたのだ。

(一兄上?!)

悲鳴を押し殺すので、私は精一杯だった。

その断絶は、まるで死の宣告のように思えたのだった。



- 一秒ごとに、何時間も過ぎていく。
- 一分は加速して数十日。
- 一時間はさらに加速して数十年ほどにも。

矛盾した時間は、ハートレスが用意した封印指定の術式がつくり あげたものだ。元来は固有結界内において、時間差をつくりだし、 宇ソ宙ラの果てを見る魔術。いまは神霊に至るまで、彼女を加速さ せるロケット。

フェイカーは、時間の揺りかごに揺蕩たゆたっている。

長く、遠く、果てなく。

人類の誰も、まともに体感することはない年月を。

それでいて、彼女の基底を成す怒りは変わっていなかった。

(......どうして、そんな遺言を残した)

(......どうして、そんな遺言を真に受けて、殺し合った)

(......どうして、そのときに自分は生きて、止めることができなかった)

繰り返す自問自答は、もはや何百万、何千万を超えた。

そのたびに、怒りがエーテルの血管を駆け巡り、ふつふつと脳を 煮えたぎらせる。

これだけの繰り返しに耐えられるのが、自分がサーヴァントであ

るためかどうかも、フェイカーには分からなかった。もちろん、生前ならば肉体が朽ち果てるゆえに、これほどの回数とはならなかっただろう。あるいは、マスターによる令呪が、精神を固定させているからこそ、無限にも思える時間に耐えられるのかもしれない。

ただ、生前になかったものがひとつだけあった。

祈るように、ずっとこちらを見上げている男だ。

フェイカーの視点からすれば、すでに百年以上、彼は自分へと祈り続けている。ともすれば滑稽で、同時に──ほんの少し、心が揺らいだ。

(.....馬鹿だな)

と、思う。

(そんな泣きそうな顔をしなくていいのに)

ハートレスなんて、誰がつけたあだ名だろう。

本人だとしたら、あまりにも己のことを分かっていなすぎだ。こんなにも感情豊かな相手を、フェイカーは知らない。いや、付き合った時間でいえば、これほど長い相手は存在しないわけだが。

現実として、ともにいた時間はわずか二ヶ月ほど。

一方的にフェイカーが見つめている時間は、もはや百数十年。

その百数十年を──ハートレスにとっての二時間ほどを──瞬き以外には視線を外すこともなく、彼は祈り続けているのだった。

令呪まで使って、彼女に耐えてくれと願ったのだ。

۲......

信仰が、フェイカーを神にするという。

たったひとりの信仰は、すでにこの身に行き渡っている。

無論、そのためにハートレスが揃えた多くの触媒カタリストや霊 墓アルビオンに満ちた魔力も大きな要因だが、やはりその方向性ベ クトルを決定づけているのは、あまりにも真摯な彼の信仰だろう。 そして、彼の出発点となったのは--

(一君にとって、それだけ大事な出来事だったんだろう)

だったら、いいだろうと思う。

まだ、彼がこちらに隠し事をしているぐらいは分かっている。それでも、二百年も祈ってくれたんだから、騙されてやってもいい。 真実など、それほどの祈りより優先されるようなことではない。

(......君のために、愚かな神ぐらいにはなってやってもいい.....)

ひどく静かに、フェイカーはそう考えていた。

時は加速する。

二時間は百数十年。

三時間は……千年を超えて。

神霊として安定するにいたって、彼女の認識は広がっていく。

英霊はいざしらず、根源の渦と直接つながっている神霊にとって、時間は決定的な隔たりにならない。

だから、彼女は現い在まに存在しながら、過去のその瞬間を視ていた。

過去視というのではなく、もっと遍在する視点だ。神霊としての 霊基が、再び境界記録帯ゴーストライナーとして矮小化されるま で、彼女の知覚はほんの一瞬万能に近しい。

無論、限度はある。

あらゆる時空間を認識できようが、演算できる範囲は神霊として の規模が上限となる。フェイカーから再臨しようとしている彼女 は、神霊としてはなりたてだ。演算可能な座標は、自分とそれなり に縁のある地点に限られる。

それでも、だからこそ、今の彼女は視た。

かすかな驚きと同時に、

(そうか.....)と、納得していた。(そうだったのか.....君は.....)

たったひとりの信者の、真実。

そして、もうひとつ視てしまったのだ。自分とたったひとりの信者に関わり深い、もうひとつの運命を。

(未来の.....)

と、彼女は思った。

(未来の王が......やってくる.....!)

暗闇であった。

それケモノに見つめられれば、人はそうなるしかない。なぜならば、それは死の先触れ。すでにして人理版図テクスチャから引き剝がされた、消滅の象徴。

消えていく。

消えていく。

かつてグレイと呼ばれていた人間の歴史すべてが消えていくの を、自分は感じていた。そんな残滓などあるはずもないほどに、怪 ケ物モノは絶大だった。

(.....)

砕ける。千切れる。溶けていく。

霊墓アルビオンに座していたケモノに、ただ視られただけで、自 分はほどけていく。

『一おう』

.....ああ。

なのに。

声が、した。

けして、届くはずのない声が。

『一問おう』

実体としての声ではない。

遥か彼方、地球の裏側ほどにも遠い。しかし、霊脈レイラインを 通じてつながっている場所。

『──問おう、貴方が、私のマスターか』

その国で、誰かが契約をなしたのだと、自分の五体が叫んでいた。

凄まじい活力が、体中を漲った。

細胞のひとつずつが、まるで別物にすげかえられる感覚。人間という器に許される限界を大きく超えて、魂の奥底からつきあがったエネルギーは、確かに死んでいたはずの自分の意識を揺さぶり起こした。

(.....ああ)

思い出した。

夢の中で、サー・ケイが伝えてくれた言葉。

──『お前が巻き込まれたのは、ああ、あいつがこっち側に近づい てるからか』

あれは、こういうことだったのか。

ならば、もうひとつの言葉は。自分にとって、逃れ難い運命と は。 ― 『決着はすぐだが、その運命はお前に厳しいかもしれない』

指先まで燃えるようだった。

吐息が数千度の炎となって、体を駆け巡るかと思えた。

見開いた瞳から普段に十倍する情報量が送り込まれ、賦活した脳はそれを十全に受け止めた。

その迸りに任せるまま、自分は背中の礼装に魔力を回す。単なる 自由落下になっていたのははたして何秒だったか。この場では、時 間も場所も曖昧といった師匠の言葉に従うならば、自分が死んでい た間は、時の流れも停止していたかもしれない。

すぐ真下に、落下していく師匠が見えたのだ。

「師匠―!」

叫びに、反応はなかった。

このまま見られ続ければ、それだけで師匠が死ぬ。

人間はあれほどの怪物の認識に耐えられない。さきほどの自分と 同じように、魂までも砕かれて、無に還るしかない。

「おい、グレイ! 何を遠慮してやがる!」

右肩の固フ定ッ具クから、きんきんとした金切り声があがった。

「アッド」

「解放しろ! いまなら行けるだろ!」

その意味は、問うまでもなかった。

信じられぬほどの魔力に後押しされながら、自分は戦慄で子鹿のように狼狽えた。

「拙、は……」

「吹っ飛ばせ、グレイ!」

「それでも、あなたは─」

「あの故郷を出たんだから、胸を張らなきゃいけないんだろうが!」

かつて、たったひとりであった友人の叱咤が、胸を叩いた。

あらゆる感情を込めて、自分は右手を振り上げた。掲げた匣は一瞬で分解し、光の槍となって、自分の頭上に渦巻く。

「Gray暗くて……Rave浮かれて……Crave望んで……Deprave堕落 させて……」

自己暗示の呪句が、こぼれだす。

それでも、いつものように、すぐさまトランス状態にはなれなかった。故郷の墓地で、あのベルサック・ブラックモアに叩き込まれた秘法は、今この時だけ思い通りにならない。

それでも、なお唇が動く。

教え込まれた通りに、言葉を紡ぐ。

「Grave刻んで.....me私に.....」

「──疑似人格停止。魔力の収集率、規定値を突破。第二段階限定解 除を開始」

アッドの声が、いつもの自動音声に切り替わった。

人格を停止させ、存分に周囲の大マ源ナを喰らう。地上と異なる 霊墓アルビオンの魔力も、関係なくアッドが吸収していく。

「十三拘束解放シール・サーティーン――円卓議決デシジョン―」

(一駄目一!)

懸命に、食い止める。

ギリギリのところで、かの聖槍を拘束し続ける。

「Grave墓を掘ろう.....for youあなたに.....」

解放されるはずだった魔力が、自分の魔術回路を逆流し、近くの筋肉を引き裂いて、右肩から血を噴き出した。さきほど流れ込んだ『力』が無ければ、それだけで絶命していたかもしれない。

生暖かく右手を滴る血液を感じながら、自分はかの槍の真名を告げる。

「一最果てにてロンゴ」

ああ、こんな絶望的な気持ちで、槍の名を口にするのは初めて だ。

凶暴極まりない光が自分の右手を包んでいる。世界を繋ぎ止める 錨。最果ての塔。幾多の概念を包括し、古代の魔力がごうごうと吼 え猛る。神秘の薄まった現代では存在できぬはずの対城宝具が、こ こに封印を解かれて、再現される。

「──輝ける槍ミニアド──!」

撃ち出される光の槍は、ほんの数秒、虚無の穴ナル・ピットを輝きで満たした。

空気の分子を焼き、周囲の魔力さえ根こそぎに薙ぎ払い──そして。

─そして、槍から、かすかな異音が伝わった。

破壊の規模からすれば絶対に聞こえないはずの、ひどくささやか な音を、自分の聴覚は確かに捉えた。捉えてしまった。

それは、決定的な傷だ。

はっきりと分かる。

心臓を裂かれたようなものだ。いくら他のところを繕っても取り 返しのつかぬ、どうしようもないダメージ。ガラスの城塞が砕けた ところを、自分は想像した。二度と元に戻らないその城を、どれだ け自分は愛していたか。

凄絶なる光芒が闇に消えていく。

この宝具でさえ、底に棲まうケモノは傷つけられなかった──と思う。

ただ、視線を逸らしただけだ。

しかし、それで十分。

落下最中の師匠を抱きとめ、そのまま横穴へと滑り込んだのであった。

*

横穴へと入り込んで、自分はぐらりと膝をついた。

「痛.....っ!」

ごりごり、と身体の内側を削られ、肉も骨も組み替えられている 気分。

成長痛を百倍にしたようなものだろうか。一秒ごとに、自分は自分でないものへと成り果てていく。ああ、もはや自分の外側ひょうめんは彼女と同一なのだから、今変えられているのは、神秘へとつながる内か面くなのだ。

自分にない臓器が生まれ、自分にない因子が組み込まれる。

腹腔にマグマでも埋め込まれたみたいに、呼吸のひとつずつで制御不能の魔力が生み出されていく。

だけど、そんなことはどうでもよかった。

何より早く、話しかけねばならない相手がいた。

「.....アッド!」

「おう」

返事があった。

いつもとまるで変わらない、しかし、どうしようもない疲れが貼りついた声音であった。

「なんだよ。泣きそうな声して」

「.....いいえ、いいえ」

かぶりを振る。

もう分かっている。分かってしまっている。

いくら隠そうとしたところで、使い手である自分には、伝わって しまう。

アッドのこれが、ほんの一時的に、奇跡的なほどのギリギリで、 喋れるカタチを保っているだけと分かってしまっている。もしも十 三拘束を解放していれば、いまこの奇妙な匣は跡形も残っていな かったろう。

横合いで、身をもたげる気配があった。

「.....グレイ.....」

尻餅をついた格好の師匠が、ひどく強張った表情で、こちらを見 つめていた。

何を言ったらいいか分からない。

そんな顔だった。

本当に、時々、この人は愚かだと思う。あなたのせいなど何ひと つないのに。

自分も親友もこうなるかもしれないと思って、この迷宮へやってきて、その通りになっただけなのだ。だいたい逆の立場だったら、何ひとつ犠牲なしに終われると思っていたのか馬鹿者、ぐらいは言い出すくせに。

「師匠」

だから、わざと間違える。

この人が尋ねてないことを、口にする。

「多分、極東の第五次聖杯戦争に最後のサーヴァントが召喚されました。それも、拙と縁のある─」

アーサー王が、と口にはできなかった。

それでも、この人には伝わった。

「……君の故郷は、かの英雄の再来を信じていたな。過去の王にして未来の王を」

アトラス院の院長に見守られていた自分の故郷は、もうすぐアー サー王が召喚されると盲信していた。

そして、祈りはここに聞き届けられた。もはや、意味をもたない としても。

「……拙は、また変わっていっています」

十年前と同じように。

かつての顔を失ったときのように。

これからの自分はどうなっていくのだろう。

それから、師匠は決意を固めたように、視線を落として口を開い た。

「アッド。君は.....」

「おいおい、辛気臭い顔してんなよ、先生! いやあんたはいつも そんな顔だったか、こりゃ失礼。イヒヒヒヒ!」

アッドの声に、師匠の唇が泣き出しそうに震えた。

きっと、十代の頃から、この人はこんな顔をしていたんだろう。 現い在まがそうでないとしたら、それは演技が上手くなっただけ だ。

「グレイ……」

「大丈夫です。師匠」

精一杯、自分は口角をあげてみせた。

この瞬間だけでもそうできた自分が、少し誇らしかった。

「申し訳ありませんが、疲れてしまったみたいです。師匠に、先に 行っていただいてかまいませんか」

「.....分かった」

うなずいて、立ち上がった師匠が歩き出す。

無論、ハートレスが待ち構えている以上、すぐに追わなくてはならない。幸い、この身体から溢れ出る活力は今も止まっていなかった。むしろ、その量と質を、怖いほどに向上させ続けている。

まっすぐな横穴で、まだ師匠の背中が見えるうちに、囁く。

「……少しだけ、自うぬ惚ぼれさせてもらってもいいですか」

「なんなりと。お嬢様」

アッドの軽口が、痛々しくも、耳に優しかった。

いつも皮肉たっぷりなこの声音に、十年も励まされてきたのだった。はたして彼がいなければ、師匠が故郷を訪れるまでの間、自分はどのように暮らしていただろう。いいや、そもそも生きていられただろうか。

生きているとは、身体が動いているというだけではないと、自分は彼から教わったのではなかったろうか。

「……拙たちは、とても、とても誠実なふたりでしたね」

「……そう思うさ」

まるで皮肉のない、匣の言葉を聞くのは、いつぶりだったか。

ここに来るまで、自分たちは十年をかけたのだった。

「悪いな、愚図グレイ。俺は少し寝るわ」

「.....はい」

うなずいて、自分も立ち上がる。

右手の匣が死神の鎌グリム・リーパーへと変化したが、アッドの 声はもう聞こえなかった。

二度と聞くことがかなわないかも、とそんな思考を封じ込める。 今考えるべきは、この迷宮にまでやってきた目標だ。自分もアッド も、そのためならば燃え尽きてもよいと思った──誓った果て。

腹部を、押さえる。

「.....痛.....」

自分も、はたしてどこまでもつのか。

いつまで、自分は灰色グレイでいられるのか。

それでも戦えるように、友達が死神の鎌グリム・リーパーの形態 を残してくれたことに感謝しつつ、急いで師匠の背中を追った。

*

「おい、今の光は──!」

「あの槍を使ったのでしょうね」

フリューに答えながらも、ルヴィアは敵方から目を離さなかった。

漆黒の戦車。

骨の竜によって虚空を飛ぶ、魔天のヘカティック車輪・ホイール。

「一体、何と出会ったんや。まさか、宝具を手放したまま、フェイカーが立ち寒がったわけでもないやろ」

これは清玄が言った。

三人の魔術師は、それぞれの立場で、あの少女の宝具を見たものであった。だからこそ、あの光がどれほどの破壊をもたらすか知っている。それこそ城ひとつを吹き飛ばすような代物だ。

「分かりませんわ。ここは霊墓アルビオンですもの。なんだって起 こり得ます」

「―ルヴィアはん!」

叫びとともに、清玄の礼装の翼が翻った。

近くの壁面を蹴ったのは天狗飛び切りの法であったか。抱えられたルヴィアのすぐ最前までの空間を、紫電が迸る。イオン化された空気の臭いを嗅ぎながら、ルヴィアは直感の命ずるまま宝石を放った。

「Call!目覚めよ」

七色の光が、戦車に襲いかかり、ことごとく弾かれる。

まったく、傷つけられないわけではない。

現に、ライネスの話なら、蒼崎橙子はわずかなりともこの戦車を傷つけたはずだ。だとすれば、絶対に覆せないような神代の防御はないことになる。神秘は古いものほど強大だが、それはあくまで同質・同方向のものならばだ。

たとえば、ルヴィアの宝石魔術は、通常の魔術では不可能な蓄積を可能とする。人々の間を行き交い、多くの妄執を吸ってきた宝石ならば、より強大な魔術を行使できる。この骨の竜相手でも傷つけるぐらいはできるだろう。

つまり、滅ぼすには至らないという意味だ。

(……やはり、足止めが精一杯ですわね)

冷静に、ルヴィアは判断する。

戦車の突撃チャージのたび、貴重な宝石が砕け、フリューや清玄 の支援を受けても、何かしらが削られていく。

エルメロイII世と、あの内弟子も一緒だろう。

アルビオンの奥底へと潜り、あのハートレスと対峙することで、 あのふたりは何を失うのか。

(私の土産は、忘れてませんわね?)

胸中で、問いかける。

初めて出会った頃、最悪の魔術師だと思った。神秘の奥義に近づくことなどかなわないくせに、無様にしがみついている、浅ましい 新世代ニューエイジ。

しかし、かの魔術師は自らの価値を証明してみせた。

こともあろうにルヴィアの魔術を解体し、その先を示してみせた。

(だったら、なんとかなさい、指導役チューター!)

最後の舞台として、そこはふさわしかったかどうか。

少なくとも、自分は目を見開いて、茫然と天蓋を仰いだ。

渦巻く光がいくつも連なり、神話に出てくる世界樹を思わせた。 座標だけでいえば、マントルに食い入っているほどの地底なのに、 ちりばめられた光は星空のごとく華麗で、まるで宙ソラのただ中に いるようだった。

周囲には魔法円と、それを取り巻く金貨。ひとつの時計と、銀色のトランク。

Г......

赤い髪の魔術師が、魔法円の前に佇んでいた。

しばらく、こちらを振り返らぬままだった。

光の中に何がいるのかは分からない。

ただ、魔術師は、自分たちが空間に侵入してきたのを認識しながらも、すぐには振り返らなかった。それだけ大事なものが、光の内側にあるように思われた。

「冠位決議グランド・ロールはどうなりましたか」

と、背中を見せたまま、魔術師は口にした。

師匠も、そうなると予想していたかのように、自然に答えた。

「ミズ・イノライの申し出で中断しているそうです。残り十五分ほどですね。私があなたを止められるかどうかで、会議自体をなかったことにするか、決めるそうですよ」

「……おっと、その流れはびっくりしました」

「私もですよ」

師匠が苦笑いする。

ライネスとの通信が復帰して、最初に確認したのがそれだった。

古き心臓に入ったためか、一度経パ路スが途切れてしまったためか、清玄の情報共有魔術の精度もだいぶ低下していたが、会議のおおよその内容は自分にも伝わった。

それでも、いくつかの謎は残っている。

彼に会うまで、きっと明かされぬだろうと、師匠にも尋ねずにいた謎が。

「そうすると、その十五分ほどでずいぶんたくさんのことが決まりますね。.....ロード・エルメロイII世」

ゆっくりと魔術師が振り返った時、こうして素顔のハートレスと 向かい合うのは、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリン以来のまだ二 度目だったことに、ふと気付いた。

この魔術師に振り回されてきた時間と、現実に触れ合ってきた時間の落差。

一歩こちらに踏み出して、ハートレスが問いかける。

「何のために、来たんですか。僕を止めるためにですか」

「もちろん、その通りです」

と、師匠は肯定した。

不思議そうに、ハートレスが首を傾げる。

「何故です? 君なら、ホワイダニットに辿り着いたはずですよ。 魔術師の神をつくろうというのです。それも、神霊イスカンダル を。君が止める理由などないはずでは」

「きっと、それを確認に来たのです」

師匠の言葉には、よどみがなかった。

これまで、ずっとそのやりとりばかり考えていたみたいに。

「……なるほど」

と、ハートレスはうなずいた。

それから、人好きのする笑顔でこう続けた。

「 どうしてでしょうね。あのケモノでさえ、君たちは止められない 気がしていました 」

最果てにて輝ける槍ロンゴミニアドですら、視線を逸らすしかかなわなかった、霊墓アルビオン最奥の怪物。

思い出すだけで、体の芯から竦み上がる。

アーサー王の召喚によってかつてない活力が漲っている今でさ え、あのケモノに抗する術は考えることすらできない。

「十年前、あなたはあのケモノに食われたのですね」

と、師匠は告げたのだ。

۲.....

ハートレスは、答えない。

「それとも、もっと昔、三十年前に食われていたと言った方がいい でしょうか」

「……そこまで推察してましたか」

赤い髪の魔術師が、困ったように唇をほころばせる。

その表情が少しだけ師匠と似ていて、自分は息を詰まらせた。ど うして、このふたりは時々こんなにも印象を似通わせるのだろう。

「......今のは、どういうことですか」

「すぐに分かるとも」

尋ねた自分に、師匠は微苦笑した。

「確認しておくべきことがあるのですが」

前置きしてから、改めてハートレスへと尋ねる。

「あなたの術式はすでに自動的な段階になってますね?」

「ああ、ここまで来れば、僕が死んでも動き続ける。ふふ、分かってるかもしれないけれど、今回の術式で僕の貯蔵も尽き果てた。なにしろ、ここまでサーヴァントを連れてくる必要もあったからね。 何度も宝具を使わせて、すっからかんだ」

言ったハートレスが、銀色のトランクを見やった。

師匠もまた、そのトランクに視線を向けて、質問する。

「トランクの中身は、封印指定の魔術師と貯蔵していた魔眼保持者 ホルダーでしたか?」

「おや」

片眉をあげたハートレスに対して、自分はその意味が分からなく て師匠を見上げる。

師匠は、ゆっくりと話す。

「魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンで、ハートレスは魔眼保持者 を首ごと保存しているという話をしただろう」

確かに、そんな話をしていた。

魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンの前提になった出来事である。ハートレスが、極東の第四次聖杯戦争を調査する際に使った方法。

それは、魔眼保持者を首ごと切り離したまま生かして、その魔眼 に映った情報をひたすら解読するというものではなかったか。

「魔眼はそれ自体が魔力を生成する。魔術師にとっては外付けの魔 術回路のようなものだからこそ、魔眼はその性能にかかわりなく貴 重品として扱われる。ハートレスは、それをサーヴァントの維持や 大魔術のための燃料として焼くべていたんだ」 「……師匠……! それって……!」

さすがに、口を挟んでしまった。

ならば、あのトランクの中身は、いくつもの魔眼──いいや、魔眼保持者の生首でひしめいていたというのか。その魔眼保持者たちを炉に投げ込むようにして、ハートレスは霊墓アルビオンの道を切り開き、神霊イスカンダルをつくりだす大魔術を成立させたというのか。

しかし、その非道には触れず、師匠は続ける。

「残り十四分弱。私も、自分の考えが合ってるか確かめておきたい。構いませんか」

「どうぞ」

と、ハートレスは促した。

そのやりとりは、時を隔てた師弟のようにも思えた。

だからこそ、胸騒ぎを禁じ得なかった。踏み出してはならないところに、師匠が踏み込んでしまっているような気がして。

「最初はこう推理していました。……今のドクター・ハートレスは、ドクター・ハートレスではなく、十年前から行方不明になっていたハートレスの弟子のクロウだと」

それは、ライネスも冠位決議グランド・ロールで言っていたこと だ。

中盤から会議をその話で組み立てていって、アシェアラにひっく り返されたのである。アシェアラたちが殺したのは、ハートレスで はなく、弟子のクロウの方だと。

「なるほど。最初は、ということは今は違うのですか?」

「ええ。この説にはずっと違和感を持っていました」

と、師匠が認める。

「もしも、クロウが入れ替わったのだとしたら、幾多の事件の裏

で、ハートレスの動きがあまりにも巧みすぎる。今回の術式を紐解いても、さすが現代魔術科の学部長と唸らされた。正式な授業を数年ほどしか受けてない弟子が、できるようなものじゃない」

「君のことですから、クロウの出生についても確認されたので は?」

「化野九郎のことですね。そちらはもちろん化野菱理に確認を取りましたとも。確かに、化野の家系はいささか魔術師としても特殊でしたが、学部長に匹敵するような高度な術式を扱うようなものではない」

冠位決議グランド・ロールの流れで、最も驚かされた事実がこれだろう。

化野九郎。

ハートレスの弟子が、まさかあの化野菱理の実の兄だったとは。

そんな前提を、先に置きながら、師匠は話の矛先を変えた。

「ドクター・ハートレス。あなたを救った医者、ミスター・グロットとも会いましたよ」

師匠の言葉に、一瞬、ハートレスの返答は遅れた。

「.....よく、そんなものをつきとめましたね」

「私の友人が教えてくれました」

友人という言葉にどれほどの重みが詰まっていたか。

アトラム・ガリアスタが、最後に残したビデオレター。──けして、好意的になれるような出会いではなかった。傲慢な貴族としての態度を崩さぬアトラムと、師匠とで、反りがあっていたわけでもない。

それでも、何かしら残るものはあった。

片方が死しても無には帰らぬだけの、触れ合いがあった。

「自分の人生を最も輝かしいものに捧げたまえ、と彼はあなたに話

したそうですね」

「ああ、その通りだ」

「そのとき、妙な話が紛れていました」

と、師匠が指を立てたのだ。

「あなたを匿っていた頃、その医者が奇病にかかっていて、断続的 に視覚を失ったと」

確かに、そんな話はあった。

隣で聞いていた自分は、なるほどそんな病気もあるのか程度にしか考えていなかったが、師匠は別の感想を覚えていたのだろうか。

「ですが、あなたが触れたら治ったそうですね」

今度こそ、初めてハートレスの表情が揺れた。

間をおかず、師匠が尋ねる。

「これこそ、あなたが神隠しで得た異能ではないですか?」

空間に、言葉が揺れた。

「あなたが何らかの異能を神隠しによって得たことは、時計塔で知られていた。しかしその正体について、詳しく知る者はいなかった。ひょっとしたら、あなたを迎え入れたノーリッジ卿ならご存じかもしれないが、あの方はどのような事情があろうとも、養子の不利になるようなことは話さないでしょう」

「......ええ、ノーリッジ卿はそういう方ですね」

ハートレスが、小さくうなずく。現代魔術科の名の由来ともなったノーリッジ卿は、このふたりも認めるだけの人格者であるらしい。

しかし、今は話題となった異能の方が気になった。

「どういう、ことですか。魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンで

は」

魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンで、ハートレスは確かに妖精によると思われる異能を発揮したことはあった。どこからか腑海林アインナッシュの仔を出現させ、列車の進路を阻んだのである。

──『虚数属性とは違いますが、僕も似たことができる。この心臓の代わりに』

確か、そんな風に言っていたはずだ。

「ハートレスの言葉の通りだよ。神隠しでさらわれた子供には、祝福と呪いがつきものだが、そちらは祝福ではなく、単なる呪いそのものだ。医者が話していましたが、どんな機器にかけてもあなたの心臓は見つからなかったとか。おそらく失われた心臓の場所には、虚数魔術で扱うような――裂け目ポータルにも似た、ある種の異空間が保持されているのでは?」

「正解」

と、ハートレスがこれも認める。

「ははは、だからあれは毎回死にそうになるんですよ。心臓を切り 開いているようなものですからね。ハートレスなんて名前なのに、 心臓が壊れる苦しみを味わうなんて、理不尽だと思いませんか?」

「もう少し、話を進めましょう」

と、師匠が言う。

空間にそびえ立つ光の柱が、その横顔に薄い影を落としていた。

「医者が視覚を失ったのは、失ったのではなく、簒さん奪だつされ たのだと私は考えます」

「簒奪……?」

自分の疑問に、師匠は柔らかく笑った。

「そういう魔眼だよ。そういう魔眼に成ったというべきか。ああ、 魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンで、私は致命的な見落としをし ていた。──グレイ、あの列車でオルガマリーの従者が話していたこ とを覚えているか?」

「あの……殺された、未来視の方ですか?」

「そうだ。彼女は言っていただろう。──オークションには、虹の魔 眼が出品されると」

一瞬、息が詰まった。

虹の魔眼。確か、魔眼における最高位。

結局、当時の魔眼オークションでは、カラボーの泡影の魔眼──宝石の位までしか出品されなかったのである。

「ですが、トリシャの未来視は、確か予測だとか話してませんでしたか。可能性が高い未来を視るだけ、とか」

そう。

そんな風に、話していたはずだ。

だから、高位である宝石の魔眼のことを、虹の魔眼と間違えただけ。そのはずだ。

「私もそう思った。だから騙された。……ハートレス。あなたにしてみれば、さぞおかしかったでしょうね」

۲ ا

ハートレスは、答えない。

だから、師匠の側から踏み込む。

「さきほども話しましたが、あの事件で、あなたは魔眼保持者を首 ごと保存しているのが判明しました」

「それが何か?」

銀色のトランクを、もう一度ハートレスが見やる。

「この場合、首ごとというのがキモだ。あのときは、魔眼保持者を 首ごと保存してるのだから、てっきり魔眼で得た情報も本人に喋ら せているものだと思っていました。しかし、そんな必要はなかっ た。そんなまわりくどい方法はいらなかった。あなたにはもっと 手っ取り早い手段があったんだから」

ぞくり、と背筋を怖いものが走った。

まだ、その話には先があったのか。想像もしたくなかった真実が。

指をつきつけて、師匠が言う。

「あなたが、他人の視界を簒奪する魔眼を持っているとしたら?」

言葉は、刃に似ていた。

医者が断続的に失った視覚。若きハートレスが触れたら治ったという証言。一気にこれまでの要素が結びついた。あれは魔眼の正体 そのものだったのか。

「安直だが、簒奪の魔眼とでも名付けましょうか。そばにいれば、 虹の魔眼の視界さえ、簒奪しうる魔眼だ。さきほど、ケモノが私た ちのような芥子粒に視線を向けたのは、まさしくこれだ。あなたが ケモノの視界を簒奪したからでしょう」

「.....つ」

息を潜めていた自分たちを、ケモノが見咎めたのも、また同じ神 秘。

だから、あのときの師匠は、ハートレスの持つ魔眼と言っていた のか。視線を誘導したのだとも。

「だからこそ、オークションに虹の魔眼が出品されると、トリシャ も予測してしまった。無意識を活用して、未来を読み解く予測の魔 眼は、こうした混線を防ぎ難い。なにしろ理性で論理を組み立ててるわけではないですからね。本来の虹の魔眼保持者と、虹の魔眼の 視界を簒奪しうる魔眼保持者を、区別しきれない」

「……やれやれ、隠せない相手だ」

と、ハートレスは苦笑した。

つまりそれは、師匠の言葉を認めるという意味だった。

「その魔眼を、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリンで使わなかった のは、制御の問題ですか」

「戦闘中、気軽に使えるほど、扱いやすい魔眼ではないんですよ。 仮に使えたところで、かえって戦況を混乱させて、フェイカーの不 利に働く可能性も高かった。だいたい、あの盤面で、僕が勝つ必要 はなかったですからね」

そうだった。

ドクター・ハートレスは、フェイカーを召喚した時点で、あの事件での目的を達成していた。自分たちと交戦に至ったのは、猛るフェイカーが止まらなかったためでしかない。

一呼吸の間をおいて、師匠はさらなる言葉を紡ぐ。

「残り十分。話を最初に戻しましょう」

時間は、おそらく魔術回路によって計測しているのだろう。師匠の性能でも、それぐらいはできると、以前話していたことがあった。

「冠位決議グランド・ロールで蒼崎橙子が看破していましたが、アルビオンにおける裂け目ポータルを見つけるクロウの異能は、おそらく化野家における魔眼が、死せる竜の瞳と同調したものでしょう。ええ、あなたの簒奪の魔眼と、この同調する魔眼は、神隠しによって変質こそしたものの、基本的に同じ能力だ」

「.....え?」

駄目だ。

混乱してしまう。

だって、裂け目ポータルを見つける異能とはクロウの異能ではなかったか。ハートレスとは関係がない。

関係がない、はずだ。

「師匠、あの、何を?」

「確信を得るまで時間がかかりました。実際のところ、この結論に 至ったのはアルビオンに潜ってからですよ。ライネスが冠位決議グ ランド・ロールで言った、今のハートレスは弟子のクロウがなりす ましているというのは、けして間違ってないが、正確ではない」

Г......

ハートレスは沈黙のまま、微笑していた。

「もともと、ドクター・ハートレスはクロウだったんだ」

二転三転というが、今回の事態はもはや自分には把握しきれなかった。

あれほど紆余曲折のあった冠位決議グランド・ロールで、クロウがハートレスになりすましている可能性が示唆され、しかしそれもアシェアラの告白によって否定されたはずだった。

なのに、ここにきて、再びその可能性が戻ってきたのか? いや、違う。

師匠は、もともとと言った。

だけど、その真意が判然としない。眼前に提示されても、自分では受け止めきれない。

「三十年ほど前、かの医者に助けられたハートレスは、傷だらけで 記憶を失っていた、と聞きました」

師匠が言う。

「それが、十年前、かつての仲間に裏切られて傷を負ったクロウだ としたらどうです?」

「.....は?」

思わず、隣で聞いていた自分が、声をあげてしまった。

やはり、師匠が何を言っているか分からない。

順序があべこべだ。三十年前の出来事に、十年前に裏切られた事件をあてこんで、一体どうしようというのか。

「そう、順序が逆だ」

こちらの考えを読んだように、師匠が言う。

「問題は、クロウがアルビオンと地上を行き来する手段を持っていたことだ。そして、アシェアラの告白どおりなら、裏切りはアルビオンで行われた。―ならば、死ぬ直前、クロウは別の裂け目ポータルを見つけてしまったのではないですか。ただし、クロウは地上に逃げようとして果たせなかった。ええ、逆に行ったのです」

指を、下へと師匠は向けた。

「おそらくは、虚無の穴ナル・ピットにつながる裂け目ポータルから、妖精域へ」

妖精域。

霊墓アルビオンの最奥。この古き心臓の、さらに底。

「そこで、実際に何が起きたかは分からない。妖精の起こす神秘はいまだ魔術師にとって未知の領域です。しかし、分かっていることはある。たとえば、神隠しは時代も地域も飛び越えることがあるだとか」

神隠しは、時代も場所も超えることがある。

確かに、師匠はそう言っていた。ハートレスを匿った医者と話したとき、診察室で講義してくれたのだった。

―『極東には浦島太郎なんて話があるそうだが、あれは典型的な神隠しだ。攫われた人間は、時代も場所も異なるどこかに連れて行かれる』

そして、このアルビオンの探索中も話していた。師匠だけではなく、サー・ケイにしてからが同じことを言っていたではないか。

ここでは、時間も空間も曖昧だ、と。

だけど、だからといって、こんなデタラメがまかりとおるのか。

「もちろん荒唐無稽そのものだ。こんなものを真顔で言われても、困惑するしかあるまい。だからこそ、ライネスにも伝えなかった。

冠位決議グランド・ロールでこんな情報を切り出したところで、一 笑に付されて終わりだからな」

ライネスにすべてを伝えなかった理由。もちろん、師匠も今回の 考えについて確信まで至ってなかったからもあるだろう。

「だけど、この場は違う。ここにいるのは、ふたりの魔術師だ」

眼光鋭く、師匠がハートレスを見つめた。

「ああ、付け加えますと、妖精域へつながる裂け目ポータルを見つけたのがクロウだったとは限りません。もともと、あなたハートレスがクロウだったとしたら、同じ能力でそうした裂け目ポータルは自分で見つけられるでしょうし、一度くぐっているわけですから発見も容易でしょう」

「つまり……ハートレスが、瀕死のクロウを妖精域へ送り込んだ?」

「そうだ。十年前、あのケモノに食われた化野九郎 = クロウは、神隠しによって三十年前へと移動した。この神隠しによってあなたが受けた変異のすべては、推し量ることも難しい。一体、どのタイミングですべてを思い出しました? ハートレスと名乗ったときですか? それとも、自分の過去であるクロウと対面したときですか? いいや、ひょっとしたら仲間に裏切られて、クロウが殺されかかったときではないですか?」

自分は、茫然としていた。

事象だけを見れば、自分の故郷で起きた出来事にも近い部分は あったろう。アトラスの七大兵器のひとつ、ロゴスリアクトは過去 を再演し、その世界へと自分と師匠を送り込んだのだから。

しかし、これは現実だ。

霊墓アルビオンという人智を絶する場所を経由しているとはいえ、七大兵器の演算世界などではなく、現実の出来事ではないか。なのに、こんなことが起き得るのか。仮に起き得るとして、タイムパラドックスはどうなるのか。

そして、

「……よく辿り着きましたね」

と、ハートレスはため息をついたのだ。

化野九郎=クロウ=ドクター・ハートレス。

ひとつの式が、ここに完成する。遠い日に定められた円環のように。

「時間遡行は魔法の領域です。私たちの魔術では辿り着けないが、神秘として存在しないわけじゃない。五つの魔法にはそうした作用を持つものも存在しますし、何よりグレイの故郷でロゴスリアクトを見ました」

「ふむ。あれは単に過去の再演ではなかったですか」

「ええ、あれ自体は再演にすぎない」

自分と同じ疑問を、ハートレスが口にして、師匠もうなずいた。

「しかし、同時に可能性は垣間見ました。あの再演で見つけたあなたの論文には、神霊イスカンダルを再臨させる術式のほかにも、いくつか研究している形跡があったからです。その意味に気づいたのは、残念ながらこの迷宮に降りてきてからですが」

「……なるほど。ただ、それは早々に諦めたんですよ。過去を観測して行う、レイシフトとでもいうべき逆召喚による時間遡行は、理論上はありえるでしょう。ですが、この時間遡行を安定させるためには、最低でもアトラス院の全面的協力に、時計塔でも君主ロードを輩出する名門の秘術が必要だろうと出ました。ふふふ、これだけですでに不可能ごとです。さらには新たな施設や実験に必要な、天文学的な費用を考えれば、それこそ聖杯戦争にでも勝利しなければなりません。そして、そこまでしてもなお、時間遡行可能な人間の資質は限られるでしょう」

淡々と、ハートレスが告白する。

そのひとつずつが、真正の魔術師ならば驚天動地の内容に違いない。

師匠は、ただ小さく息をついたきりだった。

「良かった。正直、妄想のそしりは免れないかと思っていました よ」

「なら、僕の共犯者ももうお分かりですね?」

「冠位決議グランド・ロールの共犯者でしたら、イノライでしょう」

あっさりと、師匠が暴露する。

「こんなのは単なる消去法です。マグダネルの娘が、ハートレスの弟子を殺害しようとした以上、こちらと手を結ぶのは難しい。生粋の貴族主義であるルフレウスには、神代の魔術形式などに賛成する余地がない。オルガマリーとイノライは、実のところかなり悩みましたが、もしも天体科アニムスフィアと手を組んでいるなら、出てくるのは君主ロード本人であるマリスビリーでしょう。

そして、ミズ・イノライならば複雑な思想も何も持たず、単に有利だからというだけで、あなたの側に張ります。ええ、彼女は呼吸するように、権力と親しんでいる。何の悪意もなく、固執もせず、陰謀の糸を張り巡らせる」

「昔から、イノライ師はよくしてくださってましたから」

「今の現代魔術科に対しても、しょっちゅう民主主義に乗り換える とうるさいですからね」

ハートレスが言い、師匠が片目をつむる。

「とはいえ、ミズ・イノライは、あなたを成功させようとしていたわけじゃない。……あなたが成功してしまっても失敗してしまってもいいように、盤面をコントロールしていただけだ。マグダネルにしたところで、イノライがあなたと組んでいるあたりは薄々気づいていたでしょう」

「マグダネルさんも、気づいてた......?」

自分が鸚鵡返しに言うと、師匠がうなずく。

「だから、ライネスは犯人探しをやめたんだ。特定できたところ

で、相手の退路を断って完全に敵に回してしまうだけだからな。無論、最悪の場合、マグダネルには騙されたという不名誉が残るが、この程度ならなんとでも政治的なリカバリがきく。君主ロードとなれば、当然の判断だろう」

一体、あの会議では何重に思惑や陰謀が絡み合っていたのか。

こうしてほどかれても、自分には半分も分かった気がしなかった。

そして、ハートレスは天蓋を仰いだ。光が彼の顔へと落ちて、瞼 をつむった。

「君は探偵じゃない。事件を断罪する役柄ではない。.....ただ、必要だから事件を解体するだけだ」

だから、犯人を暴かない。

だから、罪を追及しない。

ただ、事件を解体していく。まるで機械の歯車を外すように。まるで愛する神秘の根幹を無意味化してしまうように。

「だったら、僕にはどのようなホワイダニットがありえるかな」

どこか悪戯っぽく、ハートレスが尋ねた。

前に会ったときも、この魔術師には奇妙な二面性があるように思った。ひょっとしたらそれは、クロウとしての性質と、ハートレスとしての性質ゆえだったのだろうか。

「あなたは、時間遡行によって、弟子であるクロウと師であるハートレスの双方の視点から、時計塔やアルビオンを見つめることとなった。そして、仲間であり弟子であるアシェアラたちから、二度 裏切られた」

厳かに、師匠が言う。

「そこから得られる教訓ホワイダニットは、何度やっても同じこと になる、です」

「御名答」

パチパチ、とハートレスの拍手クラップ。

「間違っているのは、僕じゃない。もちろんアシェアラでもゲセル ツでもジョレクでもキャルグでもない」

後に続いたのは、かつてクロウと組んでいたチームメイトだ。

クロウを裏切り、殺そうとした魔術師たちの名前。そして、ア シェアラ以外は、この事件にあたって、おそらくクロウ=ハートレ スが復讐した魔術師たちの名前。

「……いいチームでしたよ。アシェアラは僕の幼馴染みでした。ゲセルツは頼もしい魔術薬を使う錬金術師で、ジョレクとキャルグの兄弟は僕の足りないところを補って、戦闘メンバーとしてもムードメーカーとしても活躍していました。そして、その全員が、僕にとって愛しい弟子たちだったんです」

双方から、クロウェハートレスは彼らと付き合ったのだ。

生死をともにしたかけがえのない仲間として、はたまた同じ教室で魔術の深淵について討議した師弟として、彼らはクロウェハートレスと付き合い、そして、結局のところは二度ともクロウェハートレスを裏切った。

「だったら、間違っているのは、彼らが裏切るように仕向けた、現代の魔術師の世界でしょう。どうやっても、ここに辿り着いてしまう魔術世界こそが宿しゅく痾あだ」

.....ああ。

ようやっと、ここに至った。

ドクター・ハートレスのホワイダニット。何故、彼がこうしたか という動機。神代の魔術形式も、霊墓アルビオンという大舞台も、 そのための手段に過ぎぬ。

数秒沈黙してから、

「……あなたは、神代の魔術形式によって、新世代ニューエイジを 救済したいわけじゃない」

と、師匠が続ける。

「君の人生を、最も輝かしいものに捧げたまえ。そう言ったあなたにとって、最も輝かしいものはすでに失われている。だから、あなたはその代償行為をせざるを得なくなった。失われたものを取り戻すのではなく、失わせてしまった愚か者たちを憎んだ。その対象が人でなく、魔術師という世界だっただけのことだ。神代の魔術形式という爆弾によって、既存の魔術師の世界を、何もかも壊してしまいたいだけなんだ」

(......それ、は)

と、自分は思う。

かつて、二度、フェイカーと話したことがあった。

王の死後、後継者ディアドコイ戦争を始めた戦友を彼女は憎んでいた。おそらく、憎んだ戦友が亡くなっているからこそ、彼女はその代償として王を神にすることを望んだ。

ならば、彼女が身に宿していた怒りと、ハートレスのそれはまる で同質ではないか。

「その通りです」

再び、ハートレスはうなずく。

「だったら、何か問題でも?」

「いいえ」

と、師匠がかぶりを振った。

「ですが、それなら止めねばならない。崇高な理念も、賭けるに値する見返りもない。ただの破壊衝動に、私の弟子たちの未来を委ねられるはずもない」

「止める、か」

おかしなことを聞いたように、ハートレスは笑った。

「その意味では、僕はとっくに停止しています。とっくにバトンは 彼女に手渡しているんですから。そう、後は僕の神がすべてを成し てくれる」

ちょうど、ハートレスが言い切ったときであった。

背後の光の柱から、何かが立ち上がった。

それは、ひどくゆっくりと目を開いた。

瞼を開くだけで、軽く数年はかかったはずだった。

人ひ間とと神霊とでは時間感覚が違う。生きている時間も次元も違う。人間が為すことに対して、神霊は正しく認識したりしないし、もしくは正しく認識しすぎるからこそ、人間とは大きくズレてしまう。

それの自認も、すでに人ひ間ととは違っていた。

霊基虑影再臨。

ハートレスがそう呼んだ術式は、サーヴァントをもう一度座と接続するものである。

フェイカーというクラスで括られていた境界記録帯ゴーストライナーは、この術式によって、フェイカーとしての記録、イスカンダルとしての記録を同時に入力されることとなった。

本来、英雄の一側面の再現しか許されぬサーヴァントの限度を大きく超えて、信仰対象としての現象――神霊の規模まで、記録の規模が拡大される。それはイスカンダルが辿ってきた実際の歴史であり、幾多の民衆にイスカンダルという英雄が信仰されてきた二千数百年であり、その陰でフェイカーが経験した歴史であり、たったひとりの魔術師がフェイカーを信仰した数時間であった。

そして、それは、世界を視た。

一瞬で、すべてが置き換わった。

ハートレスが魔法円を敷いていた霊墓アルビオンの空間は刹那に 消し飛んで、自分たちが佇んでいるのは赤い荒野であった。

「え.....っ?!」

突然の変化に、周囲を見回す。

土地だけではない。

いつのまにか、自分たちは数多の兵士たちに囲まれていた。

さまざまな文化の鎧に身を包み、あるいは槍を持ち、あるいは騎馬に乗り、地平線まで続くのではないかという恐るべき数の影法師が並んでいたのである。

「王のアイオニオン軍勢・ヘタイロイだ……」

師匠が、呻いた。

その名前は聞いたことがあった。イスカンダルがサーヴァントとして現界した際に行使した規格外の宝具。固有結界とともに、自らが絆を結んだ数万の兵士たちを召喚するという、常識はずれの神秘の軍勢。

神霊イスカンダルの目覚めを、かの軍勢の兵士たちが祝福するの は必然でもあったか。

はたして、影法師の兵士たちの中心に、一際大きな騎影があった。

いいや、おびただしい影法師の中で、その存在だけが光を放っていた。

神霊イスカンダル。

自分には、その姿を正しく認識できない。

まるで身長も体格も異なるのに、あのフェイカーのようにも、話に聞いただけの巨漢イスカンダルのようにも思えた。アーサー王の召喚によって、サーヴァントに限りなく近づいた自分の視覚ですら、その存在を直視できない。認識しきれない過剰な情報を、自分の視覚が眩い光だと誤認しているのだ。

「……ああ、これが神霊の訪れだ」

ハートレスの声音に、隠しきれぬ喜悦があった。

彼の思惑通り、世界には神代の魔術形式が訪れる。かくして、時計塔・貴族主義による魔術師の世界は、終わりを告げる。

しばらくして、師匠が口を開く。

「確認しておきたい。聖杯戦争において、マスターはサーヴァントの要石です。いかに強大な魔力があろうとも、マスターを失えば早々に枯渇して消滅するでしょう。この場合の神霊も同様ではないですか?」

「ああ、僕を殺せば神霊イスカンダルは消滅するかもしれないってことかな? それは、君にしてはいささか愚鈍な問いだろう。それではまるで意味がない。いくつかのルートを通してすでに金貨を分け与えた地上の新世代ニューエイジたちも、納得すまいよ」

と、ハートレスが苦笑する。

「スターテル金貨を持っている魔術師は、すべてマスターと同様の 経パ路スで結ばれる。もちろん要石としての機能も併せ持つとも」

「......つまり、私も神霊イスカンダルのマスターのひとりというわけか」

金貨を手にした師匠が、唇を嚙む。

「あてが外れたかな?」

「いいえ、やっと安心しました」

ゆっくりと、師匠がスーツの埃を払う。

神霊イスカンダルへと、その視線を向ける。

「どうする気です?」

「ライダー……」

そう言って、師匠は光り輝くイスカンダルへと歩き出したのだ。

「そのイスカンダルには、あなたと第四次聖杯戦争を駆けた記憶などありませんよ。いえ、そもそも英霊イスカンダルと神霊イスカンダルは、源を同じくするだけの別物だ。あなたが何かしらの感傷を覚えたとしても、神はそんなものに目をとめたりしない」

ハートレスの言葉が、はたして届いていたかどうか。

師匠の足取りには何の変化もない。

浮かされるような歩みは、あたかも砂漠で渇き死ぬ寸前に、聖地 を見出した信仰者のごとく。たとえその聖地が、死の間際の幻だと しても、彼が感じた救いが幻のはずはなく。

ああ、本当に幻ではなかったのだ。

霊墓アルビオンに潜る前からずっとしていた手袋を、師匠がねじりとったのである。

「な……っ!」

「え.....」

ハートレスも、自分も絶句した。

ありえないものが、そこには存在していた。

たった一画。赤々と輝く、奇怪なカタチを描く紋様が。

―たった一画きりの令呪が!

「そんな……エルメロイII世。その令呪をどこから……」

「第三次聖杯戦争」

言葉は、けして答えではなかった。

しかし、自分には分かった。その場面を見ていたからだ。

ルヴィアゼリッタ・エーデルフェルトが授業料と言い張って渡した宝石箱のこと。エーデルフェルトの血族が第三次聖杯戦争に参加していたという、その際の話。

ああ、ならば。

世界で最も華麗な狩人と自負し、ハイエナと謗られても胸を張る彼女の血族であれば、令呪を保存して持ち帰っていたというのは、十分ありえることではなかっただろうか。

「今、私もマスターのひとりだと言ったな、ハートレス……!」

「やめろ!」

その意味を悟って、初めてハートレスが叫んだ。

持ち上がった手から、魔弾が放たれる。

「―っ、させません!」

自分の足が地を蹴った。

ハートレスの魔弾を、ことごとく死神の鎌グリム・リーパーで斬りふせる。いままでにないほどの俊敏さと同時に、体に激烈な痛みが走った。アーサー王にならんとしている体はかつてない活力に満ちて、しかし今も変化の代償を支払い続けている。

神霊イスカンダルも、その要因だった。

再臨したばかりの神霊が放つ魔力が、こちらの魔術回路を焼く。

師匠にはなお苦しかっただろう。自分ほどの頑強な魔術回路を持たぬ以上、それこそ地獄の苦痛が全身を苛さいなんでいたはずだ。 神霊に近づかんとする一歩ずつが、それこそ煉獄の炎に炙られるの と変わらなかったはずだ。

「……お前、昔、受肉したかった、とか言ってたな」

師匠の顔が見えなかった。

だけど、研ぎ澄まされた感覚は、その頰に伝う雫を察知した。

「すまん、ライダー。お前の望みを叶えてやりたかった」

「やめろ! やめろ、エルメロイII世!」

ハートレスの叫びなど、師匠は聞こえてもいないようだった。

「師匠.....っ 」

以前、師匠は話していた。

第五次聖杯戦争で、イスカンダルを呼ぼうとしたのは、かのサーヴァントが聖杯戦争で勝ち残れる器だと証明したかったからだと。 けして、それは嘘ではあるまい。かつての未熟で愚かだった己の贖 罪として、ずっと考えていたのだろう。

しかし、その奥にはもうひとつの願いがあった。

ハートレスは、道具として使いたいから神霊イスカンダルを再臨 させようとした。

フェイカーは、神として崇めるために、神霊イスカンダルを再臨させようとした。

だけど、結局のところ、師匠の場合は。

「本当に、ボクは、お前の望みを叶えてやりたかったんだ」

と、師匠が言う。

ひどく、静かな声音だった。

この人がこんな風に喋るのを、自分も初めて聞いた。

影法師の兵士たちは、一切動かない。主人の命令がないからだ。 神霊イスカンダルも呼び出されたまま、身じろぎもしない。ただそ こにあるだけだ。生まれたての神霊とはそういうものなのだろう。

ハートレスも、走り出す。

その行く手に、自分は回り込む。

せめてこの一瞬だけは、師匠のために守り抜きたかった。そのために、ここまでついてきたのだと、心底思えた。

「だからさ、お前はいつもせっかちなんだ。いつもこっちの準備ができていないうちにやってきて、気ままに侵略だけして去っていってさ」

歩きながら、師匠が言う。

魔術回路の痛みなどより、今心から沸き上がる何かの方がよほど 大切だというように。



「ああ、今回ぐらいは大人しく待っている。いつもみたいに大雑把に笑って、人のやることを見守ってろよ。いつかは座そこに行って やるから、人の話を適当に聞いて、背中でも叩いてくれればいいん だ馬鹿」

もっと、違うやり方があったかもしれない。

魔術がまともならとか、ほかの君主ロードのようにできたならとか、何度師匠が言ったか分からない泣き言。

それでも。

「約束する。誰が信じなくても、ボクだって信じられなくても、ボクがどうやっても英霊の器なんかじゃなくても」

一言ずつ、血を吐くように、師匠が口にする。

「命が燃え尽きるまで、ボクはあなたに近づいていく」

一歩ずつ、命を差し出すように、師匠が進んでいく。

「だってさ。ボクはお前のマスターで……お前の臣下で……お前は ボクの王で……」

今度はその顔が見えた。

泣き崩れそうな顔で、師匠が言った。

「お前は……ボクの、友達なんだから……」

ゆっくりと、右手があがった。

ぱろぽろと涙をこぼしながら、最後の一画が赤く輝く。

「令呪をもって命ずる」

「やめろ! ウェイバー・ベルベット!」

ハートレスの手もあがった。

彼も令呪を使おうとしたのだろう。こちらも最後の一画を用いて、神霊に何らかの指令を下そうとしたに違いない。

刹那、その手が宙を舞った。

自分の鎌が切り裂いたのだ。千切れ飛んだ手が、血飛沫とともに 虚空を飛んだ。

「退去せよ、ライダー!」

ライダー、と言った。

現在の神霊イスカンダルではなく、かつて師匠が召喚したときの 霊基で。

しかし、その意味は神霊となったモノへと、正しく届いた。

「あ.....」

声を、聞いた気がした。

それは、きっと師匠には聞こえない。

霊に敏感すぎる、ブラックモアの墓守である自分だけが感じた思 念。

生まれて初めて、自分の体質に感謝したその『声』は一

変化したのが一瞬なら、すべてが元に戻るのもやはり一瞬だった。

「師匠!」

呼びかけた先で、赤い荒野はすでに消えていた。自分たちは霊墓 アルビオンの古き心臓へと戻っていた。死せる竜の魔術回路が、 白々と周囲を照らしあげ、この場では何も起こらなかったと惚とぼ けているかのようだった。

「.....馬鹿め」

と、古き心臓の天蓋を仰いで、師匠が言った。

「いつも人の言うことを聞かないくせに、こんなときだけ素直に聞くのか」

言葉面だけ取れば軽口のようで、しかしひどく重い声音であった。

それから、ゆっくりと振り返る。

「……エルメロイII世……!」

倒れたハートレスが、失った片手を押さえていた。

その隣で、もうひとつ、この空間に戻っているものがあった。

「なぜだ.....っ」

と、彼女は呻いたのだ。

「なぜ、最後の令呪で私を呼んだ。ハートレス」

「フェイカー……!」

自分も、目を見張らざるを得なかった。

ハートレスの身体を、黒い髪の女戦士が支えていたのだ。

腕を切り裂かれる直前、もしくは切り裂かれてもなお経パ路スを 強引につないで、ハートレスは命令を終えていた。最後の令呪を 使って、神霊イスカンダルから、核になったフェイカーを分離させ たのである。

そんなことが可能なのか、自分には分からない。

ただ、あの瞬間ハートレスは成し得たのだ、とだけ思った。

「半々か、それより分が悪くとも、お前が令呪で命じれば、エルメロイII世など無視して、神代の魔術形式が成立する可能性は十分にあった。なぜだ?」

「なぜでしょうね.....」

血まみれのハートレスが、眉び宇うを寄せた。

「エルメロイII世を止められないと思ったとき、どうして大魔術の 完遂よりも、あなたの顔をもう一度見たいなんて考えたんでしょ う」

少しだけ、分かる気がした。

霊墓アルビオンのチームに、二度もクロウ = ハートレスは裏切られた。仲間としても、弟子としても裏切られ、だからこそそんな風にならざるを得ない、魔術師の世界を憎んだ。

その名に反して、フェイカーは初めて、彼を裏切らない相手だったのではなかろうか。

あるいは、本当にハートレスが求めていた.....

「......師匠」

身構えて、死神の鎌グリム・リーパーを持ち替える。

しかし、師匠はこちらの肩に触れて、かぶりを振った。

「もういい、グレイ。今の大魔術でハートレスは……」

「……はは、さすがよくお分かりになる」

ハートレスが唇を歪める。

霊墓アルビオンを突破し、サーヴァントに何度も宝具を使わせ、 今回の大魔術を立ち上げる。確かに魔眼保持者を焼べることによっ て、魔力は補充したのだろうが、けして術者本人も無傷で済むよう なものではなかった。とっくにハートレスも限界を迎えていたので ある。

でなければ、さきほど師匠を止める際に、単純な魔弾を放つだけのような愚策には陥らなかっただろう。

「十年──いえ、三十年を費やしたあなたの大魔術は終わった」

と、師匠が告げる。

「あなたの申し出があれば、エルメロイ派で身柄を預かってもいい。少なくとも、ほかの派閥よりはマシな処遇を約束できるかと思います」

「お優しいことですね。それこそミズ・イノライなら同じことを言いながら、次の陰謀にどう使うか考えてるでしょうが、あなたは単純な善意で言ってしまっている。それは、時計塔においての美徳ではありませんよ?」

「重々承知しています」

渋い顔で師匠が言うと、くつくつとハートレスは笑った。

「ですが、こんなところで無様に朽ちるのを見せるのも業腹です。 ええ、あなたにだけは見られたくないと、どうやらそんなことを僕 は思っているみたいです。.....フェイカー」

「なんだ」

「立たせてください」

フェイカーの肩を借りて、ハートレスが立ち上がる。

切断された前腕を、スーツの胸に当てる。

こぼれた囁きは、確かこうだった。

【裏返れ、僕の心臓】

その呪句とともに、ふたりが消え去っていたのである。

心臓の代わりに封じ込まれた裂け目ポータルによる瞬間移動。しかし、それは……

「……あの神秘を使えば、万全でも死にかけると言っていたな」 師匠の呟きは、自分の考えと一致していた。

「ならば、もう結果は出ているだろう」

結末おわりを、ハートレスは選んだ。

フェイカーと一緒に、彼はどんな景色を見るのだろう。クロウであり、ハートレスであった奇怪な人生の最後に、何を見ようと思ったのだろう。

魔術回路を焼かれた痛みが残るのか、師匠が二の腕を押さえた。

「残り二分。おそらくは契約通り、冠位決議グランド・ロールは放棄されるだろう。何もなかったことになるというのに……失ったものばかりが多すぎるな」

「拙は……あのふたりが……」

言いかけたときだった。

自分の手で、異変が生じたのだ。

それに気づいたのか、師匠が振り向いた。

「どうした?」

「アッドが.....」

淡く発光する死神の鎌グリム・リーパーを持ち上げ、自分の手は 小刻みに震えていた。

*

地上の研究棟で、とある少年が視線を落とした。

床である。

より厳密には、床よりも遥かに下──まるで地底を見つめているようであった。

「ん、ル・シアンくんどうかしたの?」

フラットが、小首を傾げる。

ライネスが言いつけた、書庫の整理の途中であった。

冠位決議グランド・ロールの結果に備えて、あれこれの書類整理なり――部の証拠隠滅なりを頼まれたとは、講師たちにも言えぬ事柄だ。

もちろん、冠位決議グランド・ロールの如何によっては、これらの努力も水泡に帰して、下手すれば現代魔術科そのものがお取り潰しなわけだが、そんな真面目なことはもちろん考えていない。というか、そういうことを考えないフラットと、少々の道義よりも恩師を優先するスヴィンの組み合わせだから、この任務に選ばれたといっていいだろう。

すると、スヴィン・グラシュエートは不服そうに唇を尖らせる。

「ル・シアンっていうな。......いま、終わった香りを嗅いだ気がした」

「終わった香り」

このクラスメイトは、実のところ香りを嗅いでいるのではない

と、フラットは考えている。彼が嗅いでいるのは、因果のもつれそのものだ。香りだと思っているのは、あくまで彼の知覚に対応して、脳が変換しているに過ぎない。

だから、至極素直に、フラットはうなずいてみせた。

「ル・シアンくんが言うなら、きっとそうだろうね!」

そう断言した少年の背後で。

窓の外の夜空に、一条の星が流れた。

*

ロンドンの、バーの一角であった。

知る人ぞ知る、というのは神秘に関係の深い者の間で、よく使われる酒場だからだ。

光源は極端に少なく、視覚の『強化』を行えるような者でなければ、店内の移動にも差し支える。席の間隔も十分に開けられ、必要とあらば隣の相手が誰かも分からぬように、カモフラージュ用の魔術が使えるようになっていた。

今回の場合、テーブル席にいたのは、珍しい組み合わせではあった。

片方は、星形の眼帯をつけて、ピンク色に髪を染めた少女。

片方は、バイオリンケースを足元に置いた、銀色の髪の青年。

イヴェット・L \Box レーマンに、メルヴィン・ウェインズであった。

「あー、そろそろ終わった頃よね、冠位決議グランド・ロール」 「そんな頃合いだね」

と、ワイングラスを片手に、メルヴィンがうなずく。

なおテーブルの隅に、朱色に染まったハンカチーフが置いてあるのは、例に漏れず吐血した後だからである。

「あなたなら、民主主義派の情況ぐらいは聞いてるんじゃない の? なにしろ、トランベリオの分家じゃない」

「残念ながら、今回はなるべく情報をいれないようにしててね」

メルヴィンの返事に、イヴェットが下から覗き込むように、視線 を動かした。

「それって、うっかり自分が裏切って、友人の邪魔にならないよう に?」

「ああ! なにせ私は友情に篤あついからね!」

「友情に篤い人間は、うっかり裏切ったりしないと思うけど」

至極当然のツッコミをしつつ、イヴェットは背筋を伸ばした。

「でも、困ったことに、今のだけは本当。というか、ばったり会ったからってバーなんかに誘ったの、あたし相手だったら、いつ裏切っても罪の意識を感じないからでしょ」

「うん。君だって、いつでも私を裏切るだろう?」

「もちろんよ。だって魔術師だもの」

時計塔の住人ならば、ごく普通の考え方だ。

今更そんな己を恥じることもないし、だからこそ、そうじゃない 人間に惹かれるのかもしれない、とイヴェットは思った。

エルメロイII世にせよ、グレイにせよ、魔術師としては異端だ。

「クリスマス前、雪の夜にグレイと話したよ」

と、メルヴィンが言った。

「うん、少しだけ意地悪をした。ウェイバーがエルメロイII世なんてやってるのは、けして彼の本意じゃないってバラした。それどころか、ライネスに唯々諾々と従ってるのは、ベルベット家のできの悪い魔術刻印を担保にされてるからだぞって」

「グレイは、どう返したの?」

「なんにも」

呆れたように、メルヴィンは肩をそびやかせる。

「ただ、この先ウェイバーがロード・エルメロイII世をやめたとしても、自分にとって師匠なのは変わらない。ほかの生徒にとってもそうだってさ」

「子供みたい」

歌うように、イヴェットが感想を口にした。

どこか、羨ましそうに。

「バカみたい」

もう一度言ったが、返事をせず、メルヴィンはグラスを持ち上げる。

貴腐ワインの黄金色に口づけて、

「ねえ、ウェイバー」

と、囁いた。

「君は、君の夢に追いつけたかい? どうしてもやりたいことがあるから金を貸してくれなんて、私を驚かせた、あの時の夢に」

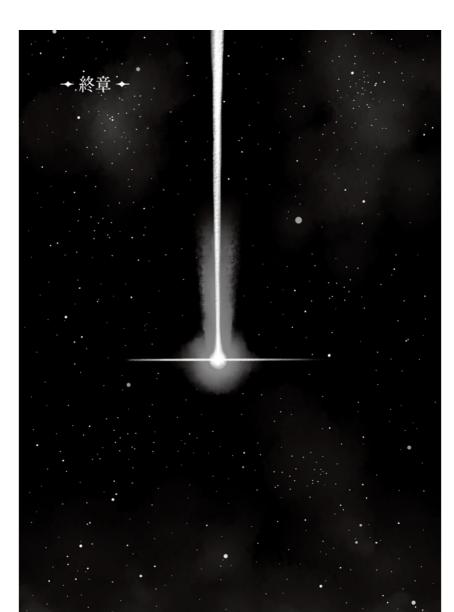
囁きが途切れるか否か。

ちょうどそんな時、窓の外に、一条の星が流れた。

静かな夜だった。

とても静かな、冬の夜であった。

そして、まるで夢の涙のように、一条の流星が夜空を渡っていっ た。



アルビオンにも、昼と夜はある。

正確には、第一層である採掘都市にも、というべきか。あくまで 天蓋の光量の変化に過ぎないが、秘骸解剖局はこのあたりを弄っ て、より効率よく労働者を働かせようなんて論文さえ提出してい る。

今は、夜だ。

採掘都市から離れた小高い丘に、人影が佇んでいた。

「ここでいいのか」

と、フェイカーは背負っていた男を下ろした。

荒っぽい仕草に見えながら、岩に背中をもたせかけた手は優しかった。今にも途切れそうなほど細い息を続けるハートレスは、うっすらと目を開けた。

「綺麗ですね」

と、唇をほころばせた。

採掘都市からこぼれる明かりが、まるで大地にひっくりかえした 星空のようだ。採掘都市の天蓋に星がない分、そういった印象が増 幅されるのもあるだろう。

「昔のクロウはこの光景を愛して、しかし同時に本物の空に憧れて いました」

ハートレスが言う。

「……ああ、だから、初めてロンドンに出たときは嬉しかったな。 まさか、出会った学部長が自分だなんて思わなかったですが」

いかにもおかしそうに、背中を震わせる。

運命だとすれば、あまりにも皮肉であった。

同一人物の若クき口頃ウと、年八老ーいトたレ頃スと。どちらも 特別なものを感じたのは当然だったろう。青年にとっての少年はか つて失った過去そのものであり、少年にとっての青年はいずれ失っ てしまう未来そのものだったのだから。

「感慨にふけるのは勝手だがな」

フェイカーが腰を下ろした。

ハートレスと同じ視点で、採掘都市を見つめながら、言う。

「お前が死ねば、私もすぐに消えるんだぞ」

「……ええ、そうですね。神霊イスカンダルの術式がほどけた以上、再び私だけがあなたのマスターです。要石である私が死ねば、あなたは消えるしかありません」

「お前は最悪のマスターだ」

表情を変えず、フェイカーが罵倒した。

「聖杯戦争ですらない事件にサーヴァントを引きずり回して、お前の願いを叶えてやるとか言いながら、肝心のところで腰が引けて、 私なんかを救い出した。せめて一矢報いるのかと思えば、逃げ出し てこんなところだ。一体どう申し開きしてくれる」

「ははは、何も言えません」

否定なんかできるはずはない、とハートレスはうなずいた。

その横顔から、みるみる生気が失せていった。限界まで精才気ド を消耗し尽くしたあげく、禁じ手とでもいうべき心臓の裂け目ポー タルを使った結果であった。

びし、と軽い音がした。

フェイカーの人差し指が、額を弾いた音だった。

「その弱々しい顔は嫌いじゃないから、酒盛りのときにでも見せる と言ったな」

びっくりした表情のハートレスの懐から、フェイカーがスキットルを取り出した。

「なら、飲め。約束しただろう」

「約束じゃ仕方ありませんね」

促されるままに、ハートレスがほんの一口だけ酒を飲んだ。

それで満足して、フェイカーもスキットルを呷る。

「お前と出会ってよかったことは、結局この酒の味ぐらいだな」

夜風が、丘を撫でた。

女戦士の黒い髪を揺らし、吹き抜けていく。

また酒を飲んで、ふと尋ねた。

「クロウと自分の関係を、私にまで秘密にしていたのは、信頼できなかったからか。まるで他人みたいな、下手な小芝居までしたな」

「正直な気持ちだからですよ。クロウの記憶は鮮明ですが、前世のようなものです。ははは、僕は前世に突き動かされた亡霊みたいな ものです。こんな馬鹿な話、誰にも打ち明けられませんしね」

苦しそうな吐息で、ハートレスが告白する。

あらゆる色を失っていく顔色で、しかしほんのかすかに嬉しそうにも見えた。

「ああ、だから、あなたの前では悪くない気分だったんです。亡霊 であることを肯定されたように思えて」

「そうだな、悪くはなかった」

と、フェイカーもうなずいた。

マスターの苦しげな素振りなんか一顧だにせず──していないような態度で、つとめて夜景に見入っていた。

「ここだって、最果てのひとつだろう。我が王さえ見なかった果てを、お前とは共有した。ほんの一時で破れたとはいえ、我が王を神霊に仕立てるなどという夢も見た。次に召喚された私は、おそらくこんな記憶は保持していられまい。だけど......」

戦士が、振り返る。

フェイカーの金銀妖瞳へテロクロミアが、ハートレスを映した。

「だけど、たとえ私もお前も、誰にも思い出してもらえぬ亡霊だと しても、お前との旅に意味はあった。意味はあったんだよ、ハート レス」

「.....嬉しいですね」

口角をあげる力さえ残ってないのか、返事は地面を這った。

それでも、

「……でも、ちょっとだけ違いますよ」

と、ハートレスは否定した。

うつむいたまま、ただ平凡な教師のように、彼は穏やかな声音で続けたのだ。

「今、そう言ってくれたあなたが、意味をくれたんです。ここで消えるあなたが、ここで死ぬ僕に。とっくに死んでいた僕に」

「つ.....」

息を止めて、フェイカーは何かを言おうとした。

だけど、その声が発されることはなかった。

Г......

もう、ハートレスは口を開かなかったからだ。

白い指が、その瞼を優しく下ろしてから、

「おやすみ。夢を忘れた男ハートレス」

スキットルに残った最後の酒を口に含んで、フェイカーの唇が ハートレスのそれへと重なった。

一度だけ、こくりと喉が動いた。

やがて、丘を覆う夜霧に、すべてが溶けていった。

時計塔の騒動は、さほどの時をおかず終息していった。

貴族主義と民主主義と中立主義で、全面一致して「なかったことにする」と取り決めたせいだろう。橙子がどんな風に中立主義へ説明したのかは分からないが、少なくともこの件に関して時計塔が─極めて珍しいことに──丸となったのは、事実だった。

荒れ果てていたスラーにも、貴族主義から工事の人員と魔術師が派遣され、わずか数日ですっかり元通りにして去っていったものである。

恐るべきは貴族主義の底力というか、またぞろ力の差を見せつけられたというべきか。

いずれにせよ、ここしばらくずっとそうしているように、私は執 務室のデスクでぐたーっと疲労困憊をアピールしていた。

「なあ、我が兄よ」

過労で悲鳴を訴える肩をさすりつつ、私は口を開く。

「そろそろ私は死にそうなんだが、ひとつ、残った仕事は代わって もらえないかな」

「私の妹なら、死ぬまで働いてくれると思っていたが」

おお、冷たい返事だこと。

かたや会議、かたや迷宮探索で生死をともにした義妹に、あまりにも酷薄な台詞ではなかろうか。ひょっとして血管にドライアイスでも流れてらっしゃる?

冠位決議グランド・ロールの終わった後、兄とその仲間たちは古き心臓で合流して、私と同じ裂け目ポータルを利用して帰還したものであった。もちろん霊墓アルビオンから地上へのルートでは、解剖局の検問も入るのだが、それは冠位決議グランド・ロールをな

かったことにするという大前提によって処理された。ハートレスが持ちこんだ呪体やらトランクやらも、のきなみ回収されたということだ。

それから一週間ほどは、霊墓アルビオンから新しい細菌を持ち込んだりしてないかと、あれこれ検査されていたが、ようやく兄も現場復帰した次第である。

いつものように、あるいはいつも以上に深く眉間に刻まれた皺だけが、私にとっては憩いの泉であった。

「何にせよ、あのまま地底で朽ち果てるよりはマシと考えるべきだろう」

大量の書類に目を通しつつ、兄が唇を尖らせる。

こういうまともな整理術は兄もそれなりのもので、私も文句を言いつつ、大いに効率はあがっている。

ただ、今回の問題は別にあった。

いくつかの書類にサインをしてから、兄の視線が、眼前のソファ へと投げられたのだ。

「だろう? 化野菱理」

「さて、どうでしょう。朽ち果てるならアルビオンがいい、という 魔術師もいらっしゃいますから」

ソファに、振袖姿の女が座っていた。

彼女の、法政科としての報告書を受け取り、精査していたのである。

といっても、形式上のものに過ぎない。今回の冠位決議グランド・ロールは葬り去ると決めたのだから、ここに並んでいる数字はすべて偽物だ。なのに精査しなきゃいけないというのは馬鹿馬鹿しい話だが、えてして偽物こそきちんとしなきゃいけないのが世の常だ。

なにしろ本物は本物ってだけで偉そうな顔をできるが、偽物には 人を騙せるだけの看板がいるからね? 少し間をおいて、兄が尋ねた。

「これで、君は満足できたかな」

「不満が終わった……が正解かもしれませんね」

菱理の返事は、かすかな憂いを秘めていた。

なんでも、ハートレスの死体は結局見つからなかったらしい。最後にどこへ跳んだのかは分からないが、霊墓アルビオンの内部ならそれも当然ではあったろう。神代の魔術形式なんてものを再興しようとした以上、事情を知った派閥は目の色を変えて、彼の工房やら遺物やらを漁っているだろうが、さて鬼が出るか蛇が出るか。

ともあれ、兄はいつもと同じように尋ねた。

「化野九郎を見つけたら、どうするつもりだったんです」

「今となっては、私にもよく分かりません。おかしいと思いますか?」

「いいえ」

師匠の言葉に微笑して、菱理の唇が動いた。

「ハートレスの弟子が兄かもしれないと気づいたのは、法政科になってからのことです。新人に任せられることなんて知れていますからね。たまたま私に回されたのが、現代魔術科の担当だったんです」

なるほど、と耳をそばだてつつ、私も納得する。

そうすると、ノーリッジ卿の養子である彼女の経歴も判断材料にされたのだろう。名前が付いているだけあって、いまだに現代魔術科とノーリッジ卿は縁深い。直接的なパイプではないにせよ、こうしたコネクションは社会では必須の代物だ。

「過去の案件を探っていくうちに、クロウという弟子が化野九郎であるらしいというのはすぐに辿り着きました。これは私の立場からすれば当然ですね。兄と同時期にハートレスが失踪してるのもすぐに分かりました。あとは、どうしてでしょうね、失踪した兄について知りたいと思いました。……ええ、ハートレスと兄が入れ替わっ

ているかもなんて考えたのは、魔眼蒐集列車レール・ツェッペリン でのことですよ」

「血族について知りたいと思うのは、当然と思います」

陳腐な兄の台詞だが、今このときは悪くなかった。

少なくとも、無駄に後味の悪さを嚙み締めなくてもすむ。

「エルメロイII世」

と、菱理が呼びかけた。

「化野九郎は──もしくはハートレスは、私のことをどう思っていた でしょうね」

「それは……」

一瞬口ごもり、サインの手を止めた兄が、何かを口にしようとし た。

そのときであった。

「お嬢様、来客です」

トリムマウが発声したのだ。

はたして、数秒ほどで執務室の扉が開いた。

「やあ、君もいたのか」

新たな登場人物は、菱理を見やって、快笑した。

立ち上がった兄が、すぐさま一礼する。

「ミズ・イノライもご壮健のようで何より」

「おいおい皮肉か。さすがに今回は疲れたよ」

うなじを擦って、創造科バリュエの老女は一枚の書類を差し出し た。

「で、今日はつまらない報告でね。秘骸解剖局と協議した上、こん

な方針がかたまった。現代魔術科でも、よかったら協力してもらえないかと思ってね」

「霊墓アルビオンの再調査依頼、および探索者の増員を時計塔内部 に求める……ですか」

なるほど、そういうことになったらしい。

再開発を議案とした冠位決議グランド・ロールはなかったことに なった。

しかし、なかったことになったなら、否定されたわけではない。 よって、民主主義からの寝技は続行中というわけだ。転んでもただ ではおきないあたり、いかにも民主主義派らしい。貴族っぽい潔さ なんて糞食らえ、ということだろう。

「承りました。生徒には話しておきましょう」

「ほう、ありがたい。エルメロイ教室の生徒には、オレも期待する ところでね」

「ええ、ああいう環境こそが、学ぶのに一番という生徒もいるで しょう。ならば、私が止めるところではありません」

言ってから、兄がふと尋ねた。

「あなたにとって、冠位決議グランド・ロールはなんだったのですか」

「そいつはなかったことになっただろう?」

片目をつむったイノライが、言わずもがなのことを確認する。

それから、こめかみをつついて、続けた。

「とはいえ、答えておくか。今更な質問だがね。──お祭りだよ。長 い人生なんだから、たまには刺激が必要だろう?」

それぐらいの気持ちで、この老女は人を追い詰める。あるいは、 同じ気持ちで誰かを助けることもあるのだろう。

何もかも、彼女にしてみれば、盤面のひとつだ。

だってこうした方が有利だろうと、駒を動かす。たとえ自分の命や人生が乗っていても、そこに躊躇がない。機械だって自己保存の原則は保持しているのだから、いっそその在り方は人間的だった。

ハートレスの共犯者として、兄を嵌めておきながら、次の手番ではにこやかに協力を求めるように。

「さて、これから第一科ミスティールにも顔出ししなきゃならなく てね。悪いが、すぐさまお暇だ」

「マグダネル氏にもよろしく」

「もちろんだとも」

踵を返したところで、ソファから菱理が立ち上がった。

「では、私も失礼します。ミズ・イノライ、少しかまいませんか?」

「おや、法政科からお誘いとは怖いね。―もちろん冗談だ。よかったら、近くのモダンチャイナはどうだい? 最近知り合ったシェフでね。気に入ったんで出資させてもらってるんだ」

「光栄ですわ。是非」

うなずきあって、ふたりが去っていく。

この後も、あのふたりの間で、虚々実々の駆け引きが続くのだろう。

冠位決議グランド・ロールがなかったことになっても、陰謀劇が 潰えたわけじゃない。いつまでも、時計塔ある限り、くだらない権 力抗争は続いていく。

いささか舞台を変えただけで、魔術師の舞踏会は終わらない、というわけだ。

つい、私が肩をすくめたところで、

「エルメロイII世」

部屋を出る寸前で、菱理が振り返った。

「ありがとうございます。一また、すぐにお会いしましょう」

極東のエキゾチックな笑みとともに、法政科の妖女は去っていっ たのであった。

*

「まったく、縁が切れそうにないな」

ふたりの気配が遠ざかった後、私は心底うんざりした顔で言った。

「あれはそういう目だぞ。厄介な相手にばかり気に入られるのは、 君の悪い癖だな!」

「お前にだけは言われたくないが」

閉口した兄に、まあ同情しないわけではない。もちろん、私は性 夕質チの悪い女なので、今後も搾り尽くすつもり満々なのである。 隙を見せた自分が悪いのだと、観念していただきたい。

「さよならをI don't knowどう言えばいいかhow to say分からない goodbye.。言葉がI can't think出てこないのof any words.」

「黙れ、トリム」

ここで『ローマの休日』は気が利いてるが、こんなときだけピタリとはまるあたり、こいつの自動知性はどんな発達をしてるのか。 人型なりの知性を施したのは、兄のアドバイスを受けた上での私だが、知性の土台となっているのはケイネスのつくりあげた月霊ヴォールメン・髄液ハイドラグラムそのものの演算機能なので、今後こやつがどのような成長をしそうかは、実のところ私にも分かっていないのだった。

ともあれ、もうひとつ、気にかかることもあった。

(.....聖杯戦争、か)

全員が牽制しあった結果、極東の第五次聖杯戦争にすぐさま干渉 するなんてことはなくなった。

しかし、もしも第六次聖杯戦争なんてものがあれば、そうはいくまい。以前はハートレスが情報操作していたが、もう隠蔽する人物はいない。聖杯戦争を守ってきたヴェールは、もはや存在しないのだ。

今度こそ、時計塔の手はかの戦争へ伸びる。

その結末は、いかなる災厄を招くのか。

英霊なんて、魔術師にも手にあまる現象を前にして、どうしても 楽観的でいられなくなったのは本当だった。

あるいは、この冠位決議グランド・ロールすら前哨戦なのではないか、とそんな思いにかられてしまったのであった。

「……まあ、気にし過ぎても仕方ないか」

立ち上がり、クローゼットからお気に入りのコートを取り出す。

「ライネス。まだ、書類は残ってるだろう」

「うむ、ひとまずお休みだよ。というか、大変重大なミッションなので、我が兄もついてきたまえ」

*

――待っているのは、嫌いじゃなかった。

とりわけ冬の雰囲気は、自分にとって親しみ深いものだった。もちろん校舎の廊下にはセントラルヒーティングも入っているのだが、ほんのりと冷えた空気に身を晒し、指先に息を吐きかける時間が、自分にはお気に入りなのだ。

あるいは、誰かを待っている、という気分が好きなのかもしれな

110

待っている間は、期待ができるから。きっと誰かが来てくれるという、そんな感じが自分にとっては愛おしいのであった。

少し前から、窓の外にちらほらと白いものが映っていた。

(.....雪が)

それも、きっと、あの霊墓アルビオンにはないものだろう。

音もなく降りしきる欠片に、しばらく見惚れていた。そうしていると、自分も半端な灰色グレイから真っ白になれるような気がしたから。

鳥籠を片手に、ぼんやりしていると、廊下に三つの影が現れた。

「師匠、ライネスさん」

「やあ!」

背後に水銀メイドを従え、少女が陽気に手をあげる。

師匠は相変わらず不機嫌そうな顔だったが、こちらを見ると、少しだけ相好を崩した。

「なんだ、グレイまで」

「あの、ええっと」

「もちろん、重大ミッションだからさ。君、内弟子なしに対応できるつもりかい?」

言葉に詰まったところに、ライネスが助け舟を出してくれた。

「ほら、いいからふたりともついてきたまえ」

頼もしくも、ライネスが自分と師匠の手を引っ張ってくれる。

自分も、これぐらいできた方がいいのだろうけど、今はその指先 の温度が嬉しかった。

はたして、廊下の角を曲がったところで、新たなふたりの生徒が

待っていた。

「教授!」

「先生!」

フラットとスヴィンである。

「む、お前らふたり揃って」

いかにも面倒そうに師匠が眉の皺を深くしたところで、くるりと フラットが回った。

「おっと教授、答えは C M の後すぐに発表ですから推測しちゃだめですよ? そうれ3、2、1、ひゅー!」

バレエよろしく爪ポ先ワ立ンちトで回転したフラットがふわりと 両手を開くや、廊下の右から左へ、派手な垂れ幕が流れて吊りさ がったのである。

『スラー再建&退院おめでとうございます!』

垂れ幕に合わせて、同じ祝福の言葉が、廊下の向こう側からあがった。

ご丁寧に、さきほどまで隠身魔術で気配を隠していた生徒たちが、廊下に詰めかけて、笑っていたのである。後ろにはシャルダン翁をはじめとした講師たちも揃って、まちまちに拍手していた。

「お前ら.....」

と、師匠が顔を押さえた。

「さすがに、これぐらいの息抜きはよろしいでしょう?」

と、横合いからもうひとつの美しい影が口にした。

麗しい縦ロールばかりは、ほかの誰と交ざっても間違えようがない。

「ルヴィアもか」

「清玄とフリューも誘ったのですけどね。さすがに部外者だから遠慮するということで。代わりに、ふたりからはお祝いの言葉を預かってますわよ。フリューは、あのゲラフにもう一度会っていたそうですしね」

「……そうか」

師匠の声音に、温かなものが揺れた。

霊墓アルビオンを脱出して以来、顔を合わせることはなかったが、どうやら師匠なりに気を揉んでいたらしい。とりわけ、あの老魔術使いゲラフと会っていたということで、自分もようやくほっと息をつくことができた。

「あ、一応そのふたりにはちゃんとアルビオンの件での謝礼を渡してあるぞ。ひょっとして、我が兄は、愛しい妹が無償で人を酷使するような鬼畜と思ってはいまいな」

「心配するな。お前はきちんと報酬を渡して、長く細くこきつかう タイプだ」

「おっと、そんな必要以上の理解はいらないな!」

否定はせずに、続く会話をライネスがかわす。

(.....ああ)

やっと、帰ってきた心持ちがした。

どうしよう。

おかしなことに、泣きたくなってしまったのだ。悲しいことなんて、もうないはずなのに。嬉しいはずなのに。長い長い旅で、置いてけぼりにしてしまった気持ちが、自分たちにようやく追いついてきたような感じ。

r...... ا

くん、と鼻をうごめかせて、スヴィンが言った。

「……ん、じゃあ先生とグレイたんは後から来てください! 僕 ら、先に教室で準備してますからね!」

「え、でもこのまま案内する予定だったんじゃ、ル・シアンくん —」

「はいはい、いいから! 絶対来てくださいね!」

フラットの背中を押して、スヴィンが廊下の先を行く。

それにつられて、ほかの生徒や講師たちも一緒に進んでいった。 今回だけだからね、と唇を動かして、イヴェットがこちらに指をつ きつけているのも見えた。

「じゃあ、師匠」

「慌ただしくて疲れたな。少し回り道をして行こうか」

と、残された師匠は口にした。

*

やがて、雪の隙間から、陽光が差してきた。

「ひとつ、訊きたいことがあったんです」

静かになった廊下を歩きながら、自分は切り出した。

かつん、かつん、と靴音が響く。ここしばらくきちんと磨けてなかったな、と思い出した。そろそろ、クリームとワックスも買い足さなければ。

「なんなりと。我が麗しの淑女マイフェアレディ」

師匠の促しをくすぐったく思いつつ、こう尋ねる。

「やっと分かったんですけれど、師匠は、あの王様と会うことをまるで諦めてなかったんですね」

「.....ん、む i

小さく、師匠が呻く。

「バレたか……というか、君には聞かれたな」

それはそうだろう。どうしてバレないなんて思えるのか。

──『命が燃え尽きるまで、ボクはあなたに近づいていく』

あんな台詞、その場の勢いで、師匠が言うとは思えない。

だったら、こちらには秘密にしていたけれど、師匠には師匠の考えがあったのだ。

諦めたように立ち止まって、師匠はスーツの懐から葉巻を取り出 した。

「一服して、かまわないかね?」

「もちろんです」

うなずくと、シガーカッターで先端を断ち切り、マッチで炙ってから唇に咥えた。煙と香りとがゆっくり広がっていく。

ああ、その香りも久しぶりのことだった。

「王のアイオニオン軍勢・ヘタイロイは、数万からの英霊を呼び出す」

やがて、煙とともに、師匠が言葉を吐き出した。

いつもの魔術講義みたいに、台詞を連ねる。

煙を纏い、ひとつひとつ、大切な思い出の写真を見つめるように

続けていく。

「なら、きっと順番が逆なんだ。英雄たる部下たちがイスカンダルと絆を結んだのではなく──彼らは、大英雄であるイスカンダルと絆を結んだからこそ、英雄として座に刻まれたんだ」

師匠が胸に秘めてきた考察。

「だったら、ひょっとしたら、王の部下である私にも何か裏技があるかもしれない。私が英霊に至れるような器などではなくてもね」

「ずっと、そんなことを考えてたんですか」

「……悪いかね」

恥ずかしそうに、師匠が言った。

親に落書きを見つけられた子供みたいな、ばつの悪い顔だった。 この人は、時々こういう表情をするからズルいと思う。

つい吹き出してしまったのも、この人が悪い。

「悪いはず、ありません」

口元を押さえたまま、自分は何度かうなずいた。

ちょうど、その仕草が窓ガラスに映り込んで、はっと髪の毛を押さえてしまった。

フードからこぼれた髪に、一房だけ、金色が交じっていたから だ。

「グレイ……」

「拙の体の状態は、まだ進行しています」

アーサー王になりかけたこの肉体は、まだ変貌の途中だったのだ。

霊墓アルビオンを出てから、どうやらある程度安定してくれているようだが、いつ再び進行が再開するか分からない状態である。もしも、再開したならば、どのような異変が起きるのか想像もつかない。

「……この先、どんな迷惑をかけるか、分かりません」

正直に、言う。

「ですが、拙は、師匠と一緒にいてもかまわないでしょうか」

「君がいなければ困る、といつも言っている」

すぐさま、師匠は返してくれた。

葉巻の煙を纏い、もう一度歩き出す。

自分もその隣に連れだった。許してくれたことで、どれだけ安心しただろう。この人に、この場所に、迷惑をかけることはこんなに怖いのに、だけど今は──迷惑をかけないことも自分勝手なんだと、分かってしまった。

多分、あの故郷からロンドンに渡って、自分が学んだ数少ないことのひとつ。

少し、間をおいて、

「いい加減な期待は持たせないつもりだったが」

と、前置きしてから、師匠が続けた。

「ハートレスの術式には、君とアーサー王の繋がりについてのものが多々あった。ケイネス師が残した秘術と組み合わせれば、進行を断つものができるかもしれん。無論、私の手には余るから、フラットなりスヴィンなりの助けは必要になるだろうが……ふん、悪いがフィールドワークには付き合ってもらうぞ」

「.....っ、はい!」

強く、うなずく。

そして、

「イッヒヒヒヒ! 迷惑かけてかけられて、一人前ってな!」 けたたましい声が、廊下にあがった。 一ああ、最後にひとつだけ。

これだけは、師匠にも話してない秘密なのだ--

*

あの、霊墓アルビオンの戦い。

神霊が消える刹那、豪放磊落な笑い声を聞いた気がした。

『坊主め。よくも余の影武者を追い詰めおった』

本当に、そんな声を聞いたかは分からない。

自分の願望が、幻聴をつくりあげただけかもしれない。

だって、本来なら新たに召喚されたイスカンダルは、師匠の記憶など失っているはずだろう。魔術においては無意識が複雑に作用するため、自分の感じたものが本当に霊的な対象か、それとも脳がつくりだしただけの錯覚かを峻別しなければならないと、師匠の講義でもよく言われていた。

いや。

後から思い返せば、それは神霊としての性能だったのかもしれない。時間と空間を超える認識能力。だからこそ、師匠のことを思い出す──というよりも、新たに知ったのかもしれない。

いずれにせよ、こんな大切なことを、曖昧なまま師匠に話せるは

ずもない。

『さて。臣下の功労には報いねばならんが、今の余は存在さえ心も とない』

『よって、ほんの一瞬神霊になりおおせたがゆえの、奇跡をもって 褒美としよう。何、どうせ坊主はこの手の願いしかせんわい』

はたして、夢だったのか、どうか。

手の平の奇跡を、自分は壊れ物のように見つめていた。

淡く発光していた死神の鎌グリム・リーパーが複雑にパーツを組み終え、小さな匣に戻っていた。十年の間、ずっと減らず口を叩いていた匣だった。愛を打ち明けられなかった母の代わりに、自分を見守ってくれた匣であった。

自分を守って、機能停止したはずの匣であった。

「グレイ.....」

師匠の声が、背中でした。

その語尾が、ただならぬ衝撃で掠れていたのも当然だろう。

何より自分が信じられなかった。もはや、どうやってもこの運命 は覆らないと、諦めていたのだから。

「.....アッド」

「んんん?」

眠そうに、匣の表面の目が、瞼を開いたのだ。

「なんだ、グレイかよ......俺は眠いって......」

「アッド!」

たまらず、胸元に匣を抱きしめていた。

「アッド! アッド……!」

「な、なんだ愚図グレイ! こら振り回すな! やめろっておい!」

古き心臓に響いた親友の声が、この事件最後の一自分にとって最大の祝福であった。

〈完〉



解説

奈須きのこ

平均的な才能、平均的な見識をもった、

人間として平凡な (だからこそ魔術世界では孤独なのだが) 少年が、

見失った『星』にもう一度触れようと願い続けた。

これはそれだけの話。

どちらも同じ。どちらも同じ夢と責務を負った、

一枚の金貨の表と裏のような、ある魔術師たちの話だった。

♦

この巻をもって『ロード・エルメロイII世の事件簿』は完結しました。

初めに、その内容とかけられた時間に賛辞と感謝を述べさせていただきます。

魔術世界を舞台にした五つの怪奇譚。

理論と神秘、意志と数奇が織りなすホワイダニットの旅。

その、終わってしまえばあっという間だった『一連の事件簿』の 最後に待つ、思いも寄らなかった合わせ鏡シンメトリー。 すべての伏線が地の底で収束し、闇においてもなお光を放つ一等 星になる......

この物語は、彼と彼の事件は、そんな結末を迎えました。

作品世界の設定を預かるものとして、これほど嬉しい事はありません。

また一つ、素晴らしい作者と作品によって『Fate』における魔術世界は広がったのですから。

この時代と、読者の皆様と、三田誠氏に感謝を。

さて。

ここで今さらではありますが、『事件簿』の成り立ちを解説させていただきます。

『事件簿』はPCゲームである『Fate/stay night』のスピンアウトとして始まりました。

2008年の冬の事です。TYPE-MOON BOOKSを立ち上げたい、 という武内の要望を聞いて、自分の中には一つの欲求が生まれました。

「魔術世界を舞台にした『魔術』と『ミステリー』をミックスした 小説が読んでみたい」

「ゲームではできない、一冊完結による推理小説の切れ味を、 TYPE-MOON伝奇でもやってみたい」と。

ですが、この欲求はまさに無い物ねだり、達成困難なものでし た。

まず『TYPE-MOON作品の知識が豊富』なこと。

『伝奇小説もミステリーも書ける技量がある』こと。

なにより、『TYPE-MOONが積みあげてきた世界観・空気感を共感してもらえる』こと。

こんな条件を満たした作家にひとりだけ心あたりがあったのですが、当時からその作家さんは売れっ子でスケジュールの確保は不可能だと諦めていました。

ですが断られるにしてもまずは相談してみよう、とお話をしにいったところ、「今すぐは無理ですが、必ずスケジュールを空けます。やりましょう」と、その作家さんは言ってくれました。

そう。三田誠氏です。目が本気すぎてちょっと恐かったです。

それから四年ほどの時間が経って、『ロード・エルメロイII世の事件簿』はスタートしました。

準備期間中は三田氏からいくつかの作品候補があがったのですが、最終的には最初の予定通り、『魔術 + ミステリー』に決まったのです。

その時に決まった事はシンプルで、

- 1.作品舞台は『Fate/stay night』メインの型月伝奇世界である。
 - 2. 『月姫』メインの世界ではないので死徒の扱いは異なる。
 - 3.舞台は時計塔。主役はエルメロイII世。
- 4.エルメロイII世は教授であって超人ではない。彼は二流の 魔術師にすぎない。
- 5.物語の中心には『一つの神秘(魔術)』がなくてはならない。
- 6.ゲストとしてひとりTYPE-MOON既存のキャラクターを出す。(これは三田さんからのリクエスト)

という事でした。これをもとに創造され、構築されたのが『ロード・エルメロイII世の事件簿 剝離城アドラ』でした。

『剝離城アドラ』の初稿を読んだ時の喜びは今も忘れられません。

魔術がメインなのだから雰囲気はアダルトに。

怪奇譚としての手触りとおどろおどろしさもほしい。

魅力的な主人公とヒロインもほしい。

クローズドサークルで魔術師がバンバン死んでほしい。

その上で最後は切ない、魔術に人生を捧げた何者かの "結末" がほしい。

まさに無茶言うな、という要望でしたが、三田誠はこれらの無茶 な注文を期待以上の内容で応えてくれました。

初稿を読み終わった後、すぐさま三田氏に『シリーズ化しましょう。一年に一冊、これが読みたい』と打診し、結果、『事件簿』は 三田氏の中で全五編からなる長編として再構成されました。

『事件簿』が始まった2014年においてFateのスピンアウト作品はいくつかありましたが、そのどれとも毛色の違う、唯一無二のシリーズが生まれたのです。

他のスピンアウト作品……『アポクリ』『蒼銀』『Fake』といったものとは違い、『事件簿』の執筆過程はまた独特のものでした。 具体的にいうと奈須きのこと三田誠の百日組み手でした。

「エルメロイII世をやるんだから観念して時計塔の仕組みを詳しく 教えてください」

「次の話はこういうネタをやりたいのですが、奈須さんの魔術論と 衝突しませんか? しない? ではこのかたちでプロットを構築し ます」

「よーし、そろそろ誤魔化せないぞう。他のロードたちの詳しい情報を。それぞれの家の冠位指定もちゃんと教えてください。資料になってないなら今夜徹夜で完成させてください。ご安心を、ホテルはとってあります。そう――おまえ の 家 だよ。大丈夫、僕も

手伝う。さあ、楽しい時計塔にしようじゃないか......ふふふ」

「封印指定ってつまるところどんな部署なんでしょう? 鐘撞き堂? あー.....まほよで使う.....なるほど。それは事件簿で扱う事はできませんね」

「え、うそ……学園長ってそういう……んー? このソロモン王の扱いって独特ですね。なんでこんな設定に……はあ、次のゲームの核になる話だから72柱の魔神はネタにするな……? いいですけど、なにする気なの?」

「最終巻の舞台は時計塔の地下にしたいんですけど、地下ってどうなっているんですか? やっぱりウィザードリィみたいな地下迷宮? 青春ですものね、我々にとってウィザードリィは。は? 別世界? 霊墓アルビオン? きのこ氏なにいってるの?」

等々、設定に矛盾あらば容赦なく斬り込んでくる三田誠との、それは熾烈な質疑応答の数々。

そう。他のスピンアウトはあくまで『もしものFate』なのですが、『事件簿』は『Fate/stay night正史における世界観での魔術もの』です。基本設定が『そのスピンアウト作品独特のもの』ではないのです。

本来であれば作者が自分の裁量で作れる世界観、法則が、『事件 簿』では既に定められていました。

魔術協会の在り方。魔術と魔法の関係。魔術師の生態、伝統、能力。

Fate人類史における魔術の歴史と、月姫人類史における聖堂教会の歴史。

そういった設定に準じながら、作者である三田誠はそれぞれの事件を起こしていきました。

「この世界における『天使』をテーマに」

「この社会における『美』をテーマに」

「この価値における『魔眼』をテーマに」

「この記録における『死』をテーマに」

「そして、この時代における『魔術』をテーマに」

これらはすべて『事件簿』において生まれたもの。

既に固まり、変化のなかった『魔術世界』を広げたのは氏の力量によるものです。

既に存在しているキャラクター・設定はこちらから開示したものですが、各事件を彩る魅力的な魔術ギミック、登場人物たち、そして"あくまで設定でしかなかった"時計塔の空気感・生活感に命を与えたのは、紛れもなく三田誠氏なのです。

その結果、『事件簿』はオリジナル作品でありながら、これまでの、そしてこれからの『Fate』のルールを正しく伝道する内容になりました。小説としての面白さだけでなく、『TYPE-MOON世界のガイド本』としても機能する、まさに匠の一冊。

それが『ロード・エルメロイII世の事件簿』という作品です。

•

また、本作の探偵役である『エルメロイII世』というキャラクターは複雑な誕生経歴を持つキャラクターです。

2006年、TYPE-MOONから発行された資料集『キャラクターマテリアル』にて、時計塔のロードの一人として紹介されたのが彼の初出となります。

その段階では「黒髪の長髪、コートと葉巻、魔術師としての才能 はないが教育者として超一流、偏屈、卑屈、そしてなぜか日本の ゲーム好き」という設定しか語られていませんでした。

実は同時期に執筆が始まった「Fate/Zero」の登場人物のひとりが彼の若い頃の姿であり、『ひとりのキャラクターを、青年期と少年期、同時にスタートさせた』ものでした。

とはいえ、『エルメロイII世』の出番は設定だけで凍結。いつか やるかもしれない『冬木の聖杯を、最後に解体する話』が実現した 際には動き出すだろう、という目論見だったのです。

それがこのように一つのシリーズを通して活躍し、彼が『Fate/Zero』から受け継いだ義務タスクを乗り越えた事に、不思議な感動を覚えています。

自分は始まりの石を置いただけで、それを転がして育てたのが別の作家なら、その先まで更に転がしてゴールにまで到達させたの も、また別の作家だった。

もう『エルメロイII世』は自分の子供ではないのですが、それ以上に数奇な運命……物書きとしての繋がり、多くの幸運……を感じさせてくれる、とても大切なキャラクターです。どうか読者諸兄にとっても、そうであってくれる事を。

彼の人生において大きな転機となった『事件』は終わりを迎えま したが、物語はそれで終わりではありません。

我々が成長するように、キャラクターたちも成長していきます。

その誕生においても、作中の人生においても、数奇な運命に翻弄されたこの男がこれで退場する筈もなし。

いつかまた(作者の三田誠氏ともども)大きな『無理難題』を背 負わされて、しかめっ面で奔走する魔術探偵に出逢える事を楽しみ にしつつ、舞台裏を語る解説を締めたいと思います。

三田誠

─密談は終わり、迷宮の扉は閉じられた。

神霊の夢は吹き散り、英雄の勲は潮騒とともに消えていく。

されど、我らは知る。

星の欠片はここにあり。

失われることのない夢は、確かに、この手の内に。

お待たせしました。『ロード・エルメロイII世の事件簿』十巻 『冠位決議グランド・ロール(下)』をお送りします。

完成してみれば、この十巻はシリーズの中でも最大級のボリュームとなりました。

正直にいえば、この『冠位決議グランド・ロール』を上下巻で書きる予定だったときは、ここまでの分厚さは想定していませんでした。なぜここまでに至ったかというと、やはり霊墓アルビオンという時計塔における最大級の神秘を、正面から書き込む決意をしたためです。

これまでの事件簿もそうですが、冠位決議グランド・ロールにせよ霊墓アルビオンにせよ、世界観上、これほど重要な題材を(しかも僕が初めて書くこととなるのに!)快く任せてくれた奈須きのこ氏やTYPE-MOONの皆様には感謝にたえません。ご一読いただいたあなたにとって、それだけの価値ある作品に仕上がってますよう。

多くの物語は、最後にひとつのエンディングを迎えます。

この『ロード・エルメロイII世の事件簿』においても、例外ではありません。そうした物語は、現代文の問題のように「誰かが何かをした」と一言で要約することができるでしょう。たいていの物語は、現実の雑多な要素をひとつのテーマに絞り込んでいく作業でもあるのだから、これは当然のことです。

しかし、同時に、それまでの過程をくまなく読んできた方だからこそ、伝わるものもあります。五章クライマックスのII世の呼びかけなどは、そうしたひとつでしょう。あの二文字に込められたII世だけの感情こころを、あなたがあなただけの魂こころで受け止めてくださったならば、本当に嬉しく思います。

振り返ってみれば、この十冊は、僕の綴ってきた小説たちの中で も、特別な光を放つシリーズとなったように思います。

執筆しつづけた五年の間に、僕の仕事もずいぶんと様変わりして、たとえば漫画原作の割合が大きく増えることとなりました。九巻のあとがきで話した倫敦幻獣譚『Bestia』やクリエイター青春劇『よすがシナリオパレェド』のほか、この四月からは『魔法使いの嫁』のスピンオフ作品『魔術師の青』も連載開始していると思います。

東冬さん・TENGENさんによるコミカライズは『双貌塔イゼルマ』のエピソードへ踏み込んでおり、いよいよ七月からはアニメも開始します。

この『ロード・エルメロイII世の事件簿』本編も、ついに角川文庫さんから商業出版されることとなりました(電子書籍で事件簿をご購読くださってる方は、このままですのでご心配なさらず。混乱を招かぬよう、しばらく電子ではTYPE-MOON BOOKS版のみ刊行の予定です)。

とても目まぐるしく、慌ただしい日々です。

それでも、変わらないものもあります。

たとえば、物語への情熱。

たとえば、背景世界への憧れ。

たとえば、愛しいキャラクターたちへの想い。

小説の執筆とは、誰が受け止めてくれるかも分からないボールを、闇夜にめがけて投げ続けるようなものです。そんな行為がどうして苦にならないかというと、変わらぬものもあるからでしょう。 II世たちとともにひとつの旅を終えられたことは、きっとその証明だと思います。

最後になりましたが、大変なスケジュールの中、いつも素晴らしいイラストを飾ってくださった坂本みねぢさん、アニメの考証ばかりか脚本も一部お願いしている三輪清宗さん、フラットの台詞など監修してくださった成田良悟さん、この世界とキャラクターたちを預けてくださった奈須きのこさんを始めとするTYPE-MOONの皆様に感謝を。

そして、もちろん読者のあなたに。

できれば、次の物語もあなたの手に取っていただけますよう。

おそらく、冬の頃に『ロード・エルメロイII世の事件簿マテリアル』で、もう一度お会いできるのではと思います。

二○一九年三月

『キングダムハーツIII』を遊びながら

PS、最後なので、ひとつだけ私信を。──もう、季節の記憶も朧になりつつあるのだけれど、新宿からの帰り道、TYPE-MOON BOOKSに誘ってくれてありがとう。きのこ。

三田 誠

MAKOTO SANDA

-代表作-

「レンタルマギカ」

「レッドドラゴン」

坂本 みねぢ

MINEJI SAKAMOTO

-代表作-

「ドレスの武器商人と戦華の国」(著:和智正喜/富士見書房)

「Lord of Knights」 (Aming)

イラスト/坂本みねぢ 装丁/WINFANWORKS

ロード・エルメロイII世の事件簿

10 「case. 冠位決議グランド・ロール(下)」

著者:三田誠

イラスト:坂本みねぢ

文章校正: 鴎来堂

角川文庫

2019年5月17日 発行

ver.002

©TYPE-MOON

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

『ロード・エルメロイII世の事件簿 10 「case.冠位決議(下)」』

2019年5月17日 初版発行

発行者 郡司 聡

発行 株式会社 ΚΑ D O ΚΑ W A

●お問い合わせ

https://www.kadokawa.co.jp/

(「お問い合わせ」へお進みください)

※内容によっては、お答えできない場合があります。

※サポートは日本国内のみとさせていただきます。

※Japanese text only

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信すること、あるいはウェブサイトへの転載等を禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

本作品の内容は、底本発行時の取材・執筆内容にもとづきます。

